
Masked Riders -NEXT Generation-

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Masked Riders - NEXT Generatio
n

【Nコード】

N9517W

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

仮面ライダーが「TV番組である」世界に住む仮面ライダー好きの高校一年生・崎元瞬。彼はある日、異次元から来たと言うソラと言う少女と出会うがそれは、悪との戦いの始まりに過ぎなかった。高校生ライダーと、歴代ライダーの戦いが始まる。/仮面ライダー40周年を記念したこのページでの初発表作品。二次創作並びにメタ発言にはご注意ください。

I n t r o d u c t i o n -ある教師の記録- (前書き)

この小説は「仮面ライダーシリーズ」の二次創作作品です。また作品の演出上メタ発言的な要素が存在します。苦手な方はご注意ください。

「仮面ライダー」

1971年4月3日。全ては、ここから始まった。

悪の秘密結社・シヨツカーに改造され、脳手術を施される前に脱出。そして、シヨツカーが送り込む悪の怪人に正義の使者として渾然と立ち向かった青年。名を、本郷猛。

またの名を、「仮面ライダー」と言う。

本郷こと一号を筆頭に、次々と悪に立ち向かう仮面ライダーたちが生まれて行った。

同じくシヨツカーに改造された青年・一文字隼人 - 仮面ライダー

二号 -

家族をデストロンに殺され一号と二号に改造された青年・風見志郎

- 仮面ライダーV3 -

元デストロンの科学者で復讐鬼だった青年・結城丈二 - ライダーマン -

GODに殺された父の遺志を受け継いだ青年・神敬介 - 仮面ライダーX -

南米で野生児として生きていた青年・アマゾン（山本大介） - 仮面ライダーアマゾン -

友の仇を討つ為に改造を志願した青年・城茂 - 仮面ライダーストーンガー -

ネオシヨツカーに立ち向かった青年・筑波洋 - スカイライダー - 惑星開発用改造人間として改造を志願した青年・沖一也 - 仮面ラ

イダースーパー1 -

姉を殺され悪の組織バダンに改造された青年・村雨良 - 仮面ライダーZX -

次期創世王として改造され、親友との戦いを乗り越えた青年・南光太郎 - 仮面ライダーBLACK（後のBLACK RX） -

謎の組織「財団」の人体実験被検体だった青年・風祭真 - 仮面ライダーシン -

ネオ生命体のプロトタイプとして改造された青年・麻生勝 - 仮面ライダーZO -

地空人により蘇生手術（改造手術）を施された青年・瀬川耕司 - 仮面ライダーJ -

改造人間、と言う悲しき宿命を背負い悪に立ち向かっていった彼ら仮面ライダー。

以上に紹介したのは昭和世代（一部平成初期時代）の仮面ライダーである。いずれも理不尽な理由で改造された（並びに復讐や願望のために志願し改造された）青年たちであるのだが、彼らに共通するのは渾然と悪の組織に立ち向かったと言う事であろう。

時には大きな悲劇もあった。時には自らも葛藤する事があった。だが、それでもあきらめずに彼らは戦い抜いたのだった。様々な人や、熱き想い・・・そして希望に支えられながら。

時を経て、2000年。

今も尚誕生し続けている平成世代の仮面ライダーの歴史は、ここから始まる。

長野県山中の遺跡から復活し人を襲い始めたグロンギ。そんな彼らと戦った、「未確認四号」として変身する事になった青年・五代雄介。またの名を仮面ライダークウガ。

クウガは、まさしく「平成」仮面ライダー一号としてふさわしい活躍を果たし、グロンギを倒す。

しかし、戦いは終わらなかった。戦いが終われば、また新たな敵が出現し、その度に新たな仮面ライダーが生まれる。だが彼らは改造人間ではない、それが平成世代の特徴である。

グロンギの上に行くアンノウンと戦った記憶喪失の青年・津上翔一

- 仮面ライダーアギト -

ライダーバトルと言う運命に巻き込まれた青年・城戸真司 - 仮面

ライダー龍騎 -

人類の未来を巡りオルフェノクと戦った青年・乾巧 - 仮面ライダ

ーファイズ -

不死の怪物であるアンデッドを封印した青年・剣崎一真 - 仮面ラ

イダーブレイド -

魔化魍と言う巨大な化け物と、今も戦い続ける男性・ヒビキ - 仮

面ライダー響鬼 -

宇宙生命体ワームに立ち向かった傲岸不遜の青年・天道総司 - 仮

面ライダーカブト -

未来からやって来た侵略者イマジンと戦った青年・野上良太郎 -

仮面ライダー電王 -

人の命を糧とするファンガイアと戦った混血の青年・紅渡 - 仮面

ライダーキバ -

破壊者、と異称を名付けられるも「世界」を旅する青年・門矢士

- 仮面ライダーディケイド -

ガイアメモリにより変身する怪人ドーパントと戦った青年と少年・

左翔太郎とフィリップ（園崎来人） - 仮面ライダーW -

欲望から生まれるメダルを巡りグリードやヤミーと戦った青年・火

野映司 - 仮面ライダーオーズ -

これは、2011年4月までの記録である為ここまでであるが、オーズ以後……フォーゼと言う名の仮面ライダーも誕生したと聞く。それも、高校生ライダーと言う話だ。

地球の中で温暖な地域に存在するこの国日本はかつて沢山の悪の秘密結社に狙われ、昭和から平成と元号が変わった今でも目的は違いつながりながら人を襲い世界を混沌へと変えようとする怪人たちは存在する時には、守られる側である筈の人すら怪人と結託したり自らが怪人へなったりする。

そして彼らは先述したとおり改造人間ではない為、昭和ライダーが背負ったような悲哀を背負ってはいない。だが彼らには彼らなりのドラマが存在し、それに立ち向かう「心」を持っている。

例えば形は違えど、彼らは仮面ライダーなのだ。腰のベルトが装着系になったり、その運命や最初の変身の目的や心情こそ違えど、最終的に彼らは悪へと立ち向かう。人々を守る為に戦う。

2011年。今年、仮面ライダーは40年と言う大きな節目を迎えた。きつとライダーの歴史はフォーゼによりまた大きく書き換えられるに違いないだろう。

そう、だからこそ話しておこうとも思う。この物語の事を。

私がこのような…仮面ライダーと言う戦士達のレポートを書くに踏み込んだのも、この物語が要因だったのだ。それに私は目撃しているのである。

悪に立ち向かい、人々を守る為に戦った、ある青年を。…

否、まだ年齢的に少年とも言つべきか、そんな彼を目撃しているのだ。改造人間ではない、そうである筈のない彼が、変身し…仮面ライダーとなって悪に立ち向かった雄姿を、その姿を、その言葉を。

それに私は断言しよう。

高校生ライダーはフォーゼが「世間的には」初めてなのだが、実は

それ以前に高校生でありながらライダーに変身したのだ、その彼は、しかも高校一年と言っていたから驚きだ。

そんな、まだまだ尻も青く精神的にも未熟者に違いなかった彼が、戦っていたのだ。

世界を守る為に、彼は戦っていた。たった一人の、少女の命を守る為に彼は頑張っていた。親友と共に彼は、人々を守っていた。

こんな私でさえも、救ってくれた、彼。

このレポートはいわば前座なのだ。この物語を語る為に、これを書いていると言っても過言ではないのだ。そう、彼：仮面ライダーの物語を。とまあ、生憎私は一人しかない。だから彼自身の冒険譚は彼を「視る者」から聞いて書く事になるのだが。

……さて、ではこのような長々とした語り部はもう諸君にはいらないだろう。

今から語るのは、私からすれば高校生ライダー第一号：尚且つ、世界を守る為に渾然と立ち向かった戦士……仮面ライダーグレアの物語である。

2011・08・27

橘川尚史

これは、一人の青年と一人の少女の物語である。

仮面ライダーの「全世界」を巻き込んだ、大きな戦いの物語でもある。

I n t r o d u c t i o n - ある教師の記録 - (後書き)

このサイトデビュー作品であり、尚且つ私にとっては久々のライダ
ー作品なので些かブランクと言う物がやはりあります(苦笑)
考え方を間違っていたりするかもしれませんがそこは御了承下さ
いませm()m

Chapter 1 - 1 「フレア編」 崩壊の序曲（前書き）

本編スタート！いきなりオリジナルライダーから始まっていますがお
付き合ってくださいませm（――）m

Chapter 1 - 1 「フレア編」 崩壊の序曲

世界は、無数に存在する。異次元世界、と称されるのはパラレルワールドとも言われているがともかくその存在は『ディケイド』により証明された。仮面ライダーが生きる世界でも、彼らが「味方」と認識されている世界に「敵」と認識されている世界、中には彼ら自身の存在が知られておらず「都市伝説」や「不可思議」と言う解釈もなされている世界も存在する。

当然、「仮面ライダーは架空の特撮番組である」と認識されている世界も、また存在するのだ。

この物語は、とある仮面ライダーの世界より始まる。

「仮面ライダーフレアの世界」

この世界に蔓延る組織。周囲の関係者から「ルシファー」と呼ばれる組織は今、世界消滅の混乱を招こうとしていた。七つの大罪のうちの傲慢に値するその名を期した組織はその名に恥ずる事なく、傲慢の如くに卑劣な怪人を作りだしその世界を滅ぼそうとしていたのだ。

しかし、当然その行為を許さぬ者が……この世界にも存在したのだ。仮面ライダー、とこの世界でも呼ばれる存在である。これまで大量の怪人たちを倒し、人々を守り通してきた。その名はフレア。紅いマスクにバツタ系のデザインである戦士は、今、必死に逃げ惑いながら戦っているのである。

「逃がすな！絶対に捕まえる！！」

「はっ！！」

「フレアも見つけ次第必ず捕える！奴だけは絶対に逃がすな、逃がしちゃおけんぞ！！」

「はっ！！」

東京都内。ルシファー日本支部の近くよりそのような怒声上がる。声の主はルシファー四大幹部の一人の「ギル」だ。外見から見たら非常に硬いかのような鎧を身に纏ってはいるが声はまるで二十代。そんなギルはさっさと行動を起こさない戦闘員を見て不機嫌そうな声を上げるが、それで更に焦ったルシファー戦闘員がそれに応えてその場から散って行く。ギルは椅子に座り不機嫌な面持ちで長い爪で自らのマスクの顎の部分を引っ掻いた。

「まったく……あのような下級戦闘員に任せるくらいなら、俺が自分で行くのにな」

そう言うとマスクのクラッシュャー部分を外し口に煙草を啣え火を着けようとした、が。後ろからコッソンとやられ着け仕舞いとなってしまった。煙草を啣えたままギルは後ろを振り向くと、そこにはギルよりも小柄で……同じような鎧を纏った者がいた。ギルはその者を見て舌打ちをする。

「ちっ、「ライ」かよ」

「ここで煙草吸うな、って何度言ったら分かるんだよ」

「あ？うるせえ！ここは俺の管轄だ！てめえは引っ込んでろ」

「そう？
折角大首領様からの伝達を貰って来たのにな

あ、ボク帰っちゃって良いんだー」

「何？」

ライ、と呼ばれた幹部の一人は懐から紙を取り出しヒラヒラとギルの前で揺らす。ぐつと唾を飲み込んだギルはしぶしぶ煙草を直す。ライからその紙を引く手繰った。どうやらギルよりもライは年下らしいのか、まるで物怖じしない。それはさておき、ギルは大首領からの伝達とライが言っていた紙を急ぎ読んで、内容を理解したかのようにニヤリと口角を上げてクラッシャーを再び直した。

「ほお……いよいよ時間か」

「みたいだね。あ、それと……フレアは別に始末しなくて良いと。」

どの道、この世界と同じ末路を辿るであろうから、だと」

「あ？……まあ、大首領の命なら仕方ない、か」

「てゆうか、まだ捕まえてないんだね」

「うるせえっ！あっちが随分と速足なんだよ！」

ギルが怒ってその手でライを引く掻こうとするがライは軽々と避ける。ライは飄々としながらニヤニヤと笑うのに対しギルは苛立つがここでライを殺しても意味はない、と悟り舌打ちをした。

そしてライは立ち上がるとニヤニヤ笑いながらギルの肩を叩く。酷く、そのクラッシャーの内側の口でいびつな笑みを浮かべながら。

「まあ、精々頑張りなよ。決行は六時間後だからね」

「うるせえ！分かってる！」

「はいはい」

ライは手をヒラヒラさせながらその場を立ち去り、ギルは座っていた椅子を蹴りあげた。イライラしつつもギルは再び座り、クラッシャーを取り今度こそ煙草を啜え火を着ける。白い煙を口から吐き出

しながらギルは空を見上げた。

この世界は、彼ら「ルシファー」にとって用などもうなかったのだ。だったらその空は無機質にしか映らない。…ギルは、思い切り白い煙を上空へ吐くのだった。

* * *

一方、都内。一人の青年と少女が必死に走り回っていた。

青年の方は外見およそ24歳くらいでこげ茶色の短髪、目にかかる程に伸びた前髪にラフな格好。そして手には黒い手袋を嵌めていた。彼こそ、この世界の仮面ライダー・フレアである。最も、今はその変身前の姿である……「のかわひろと 桢川浩人」であるが。

一方の少女。浩人とは対照的に非常に姿はボロボロだった。白い煤けたワンピースを纏い、綺麗である筈の肩まで伸びた黒髪もすっかり煤けてしまっている。首元にはコードのような模様があり、足は裸足。外見は浩人よりも遥かに若く、外見は中学生かそれくらいにも見えるが…彼女は一体どこから来たのだろう。手をつないでいない方の腕には何か握られているのだが。

そんな彼らの後ろから、二人の戦闘員が追いかけてきている。どうやら、「フレアは放置」と言うあの連絡が入って来ていないらしい……。

「待てっ!!」

「こんなところで逃がすものか!捕えろ!!」

「ちいつ、もう追って来やがった!」

「ど、どうしよう……」

「大丈夫!ソラは絶対俺が守ってやるから!だから諦めるな!!」

ソラ、と呼ばれた少女がどうやら追われる元のようにだ。必死に腕で握りしめているそれもおそらく関係しているのだろう。浩人と共に戦闘員の方へ向いたその時に、それをギョツと握りしめたのだから浩人はそんなソラを見てギョツと右手を握り締めた。そして、そのキリツとした表情で戦闘員を睨みつけるのだが、そんな彼らの後ろから中級の・・・まさしく「怪人」と呼ぶべき存在が走って来ている。

「おい！」

「な・・・ッ、あいつは！」

「フハハハハ！ギル様に命じられ、吾輩は貴様を殺しにやって来たのだ！仮面ライダー！貴様の墓場はここなのだ！！覚悟しろ！！」
「浩人・・・！」

ソラは、ギョツと浩人の服を掴む。その様子を見て明らかに怯えているのは丸分かりだ。それに、恐らくここで浩人「フレア」を仕留めた後は彼女を連れ去ると言う事も……。じりじりと迫る怪人だが、浩人はまるで怯まない。怯まないどころか、強い瞳で睨みつけている。

戦闘員二人が怪人より先に浩人に飛びかかるも、浩人は見事な蹴りを披露しその二人を吹き飛ばした。怪人はぐぬぬ、と唸りゆっくりと近づいてくる。浩人は握りこぶしを作り、怪人に対して強い姿勢を見せながらソラを後ろへ下げる。

そして……………どこかの世界で見たような、「特殊なポーズ」を取ったのだ。

左腕を体の斜め右に伸ばし、右手を腰の部分へ。その左腕をゆっくりと、特有の掛け声をあげながら戻していた。それは、どこか別の世界の「英雄」と酷く酷似…それでいて、まるで違うポーズだった。

「ライダー……………、変身ッ！！！」

「変身」と言う声と共に、腰に当てられていた右手を素早く斜め左へと伸ばす。

その瞬間、彼の腰に白銀色のベルトが出現。その刹那に彼の両腕が炎に包まれ、その両腕を前で交差し素早く体の前へ引き戻す。ベルトの中央にあった風車…否、それは名前を当てるならば「火車」だったのだろう。その風車が早く回りだす。

埜川浩人は、改造人間だったのだ。

「とおッ！！！」

浩人は飛び上がり、紅い光が周囲を包む。

そして、その場に飛び降りた浩人は……………
紅いマスクに黄色の目、バツタ系の戦士・仮面ライダーフレアに変身していた。

外見そのものは…どこかの世界で見たようなライダーに非常によく似ているのだが、そのマスクの色合いと良い体にまとったスーツの肩にはまるで薄い鎧のようなものが付着し、足も少しブーツに近い形となっている。少し、変わったライダーであるようだ。

「出たな仮面ライダー！我が刃を受けて見よ！！！」

「こっちはお前の相手をしてる暇はないんだよ！！はっ！」

怪人「ナギナタデビル」は自慢の腕の雑刀を伸ばしフレアへと攻撃を仕掛けた。鋭い刃の攻撃をさつとかわしフレアは刃物ではない怪人の体へと蹴りを入れて右腕でパンチをする。

自然と、フレアにパンチを当てられた部分が熱くなっていた。彼は「火力」を動力源とする仮面ライダーで、その技にも「炎」が関わって来ているのだ。熱きその闘志を持った彼には、まさにぴったり

だっただろう。理由は不明なのだが、浩人はルシファーに改造されて仮面ライダーになったのである。

さて、フレアはその距離を縮めてナギナタデビルを追い詰めていく。ナギナタデビルは特有の声を上げてフレアに刃物を突き付けた。

「おのれ仮面ライダー！我が刃を、受けて見よなのだっ！」

「そんなものが当たってたら、今頃俺はこんな事していないぜ！フレアスラッシュユ！」

その瞬間、フレアは体中にみなぎる炎を右手に集中させてフレアに向けられていたナギナタデビルの刃物に当てる。すると、その刃物は真つ二つにおられてしまった。よく見てみると切断面が融けている。

ギャーッとナギナタデビルは悲鳴を上げるも、更にフレアは蹴りを入れた。

「わ、わ、吾輩の刃が……ッ」

「お前……本当は弱いんじゃないか？」

「ふ、ふざけるなのだっ！ゲヘゲヘゲヘ！！」

首を少し傾げている（＝馬鹿にしている）フレアにナギナタデビルは激怒しとにかく刃物を振り回したりパンチをしていくのだがそれもまるで利かない。フレアはさつとかわしまた蹴りを食らわせる。しかし、やはり怪人と言うべき存在か。弱いだけではないのだ。さつと右腕を上げると先程フレアが変身前に蹴り飛ばしてダウンさせていた筈の戦闘員が起き上がり後ろに控えていたソラの両腕をつかみ拘束してしまった。彼女を自分の目の前に連れて来させたナギナタデビルはきひひと笑う。

「キヤアアア！」

「ソラー！」

「ゲヘゲヘゲへ！仮面ライダーよ、この女を連れて行ってほしくなければ、さっさと我々に倒されてしまえなのだー！！」

「くっ・・・卑怯もんが！要するに降参しろって事じゃねえか！！」
「ゲヘゲヘゲへ！終わりだ！仮面ライダー！！」

ソラは必死に抵抗するも、硬く拘束されてなかなか抜け出せない。フレアは大切にここまで守り通してきた彼女が人質となってしまうは戦えないだろう、とナギナタデビルは考えたらしかったのだ。そう、確かにこのままでは戦えないのである。フレアはマスクの中でギリと齒軋りをする。

ゆっくりとナギナタデビルが近づいて攻撃しようとした、その時だった。

「ナギナタデビルさまー！」

「んー、何なのだー？」

一人の下級戦闘員が急いでナギナタデビルの元へと駆け寄って来るではないか。フレアは彼の気が取られた隙にソラが捕まってる元へ走り、戦闘員を殴り飛ばしソラを解放した。

そんな事など知らないナギナタデビルは戦闘員からの報告を聞いて、「何だとなのだ？！」とかなり驚いた声を上げている。どうやら...大首領、基自分の上司であるギルからの伝達が今ようやく伝わったらしかった。フレアは別に仕留めなくともよい、と言う決定事項は怪人にとっては痛い。何故ならばこのナギナタデビルはフレアを倒すことが第一の使命でもあると実は思っていたからである。

「だ、大首領さまがそのような事を・・・！」

「如何、いたします？」

「・・・」

ナギナタデビルは心底がっかりしたかのように頂垂れると考え始めたのだが…、なんと間抜けな怪人なのだろうとフレアは思っていた。そもそも戦闘中にこのような会話をするのだろうか普通。と言うより、人質をもう解放させたフレアにとって、残るはこのナギナタデビルを倒すのみしかなかった。怪人たちを見つめていたフレアだったが、ふいにソラがぎゅっと手を握ってきている事に気付く。

「浩人……」

「ソラ？」

「何だか……、今日は嫌な予感がするの」
「え？」

ソラは、不安げな瞳をフレアに向けていた。しかしフレアは特に何も感じていない……。ソラは第六感か何かでも優れているのだろうか。怪人たちの様子をじいつと見ながら、ソラは酷く怯えている。そんな彼女の様子を感じ取ったフレアは、マスクの下で唇を噛み締めてソラの手を繋ぐと、怪人たちに見つからないうちに安全な場所へと彼女を隠す。

「浩人？」

「大丈夫だ、俺がそばにいる。俺が絶対に守る。俺は………絶対に負けない」

この言葉は、浩人の思いがよく溢れている言葉だった。ソラはその言葉を聞いてコクリと頷く。そしてその手に握った大切なものを、ソラは更に握るのを確認したフレアは外へと再び飛び出す。

「話はそれで終わりか？」

「ん？今は大事な話をしているから邪魔をするななのだ！」

「生憎だが・・・お前等に話をさせるぐらい俺には余裕がないんだ！ソラは返してもらっせ」

「なっ、フハハハハ！そんな事ふかの……………って、何ーっ？！」

今更、フレアがソラを取り返したのを気付いたらしい。のびていた戦闘員もいつの間にか復帰していて、ナギナタデビルと戦闘員三名になった。一見すると、非常に不利な状況。だが、この世界の仮面ライダーであるフレアは非常にそう言った状況になれていた。

地団駄を踏んで切れるナギナタデビルをギツと睨み返すフレアは、構えのポーズを取った。

「き、貴様よくもおおっ！」

「冥土の言葉はそれだけか？行くぜ！！とっっ！」

その掛け声と共にフレアは飛び上がり、連続蹴りを戦闘員に食らわす。悲鳴を上げて吹っ飛ばされる戦闘員はフレアの特異な炎の力によりいつの間にか爆散し、気が付けばナギナタデビルも追い込まれているではないか。フレアの熱きパンチやキックが食らわせ段々とダメージを負わされる。

「ぐ・・・、お、おのれえええ」

「止めだ！！とおっ！！！」

そしてフレアは飛び上がると空中で一回転。その後すぐに右足を突き出し蹴りの姿勢を取ったフレアは右足に強大な紅い炎を纏わせ急降下した。

そして、…………ライダーの代名詞と言える必殺技を叫びながら、ナギナタデビルに直撃する。

「フレアライダーアアアアアキイイイイック!!!」
「ぐあああああ!!!」

フレアライダーキック。それが、フレア最大の必殺技だ。
非常に高い高温の炎を右足に纏いそれにより全エネルギーを敵にぶつける、技である。直撃したナギナタデビルは遙か後方へと吹っ飛ばと、地面に転がる。そして、爆散した。

* * *

変身を解いた浩人は隠していたソラへと駆け寄った。ソラに向かつて心配そうな顔を向けていた浩人だったが、ソラは朗らかな笑みを浩人へ返す。

「大丈夫かソラ？怪我とか大丈夫か？」

「うん・・・、ありがとう、浩人」

「おう。よし、じゃあ行くか。あいつらもまた追ってこないとは限らねえ」

ソラの手をつないだ浩人は再び走り出すと、木陰へと駆け寄る。そしてそこへ隠していた自身のバイク…マシナイフリートの後部座席にソラを座らせメットを渡す。自身も専用のメットを取り出して被ると、ソラに自分の腰を掴んでおくように促す。

ソラが握っている大事なものをポシエットの中に入れさすと、浩人はアクセルを踏みバイクを発進。そしてその場から立ち去るのだった。

けている。

フレア：浩人は、ルシファーよりソラを連れて逃げ続
けている。
逃げながら、悪の組織・ルシファーの怪人たちを倒して行く。支援
者は、彼自身を守るソラのみ。二人だけの闘いを……フレアはこの
世界で繰り返し広がっていた。

昭和54年5月。平成の世にもなっていないこの世界。それがこの
世界では当然だった。
それが
間もなく“破壊”される。

Chapter 1 - 1 「フレア編」 崩壊の序曲（後書き）

この仮面ライダーフレアは私のオリライでございます。

そして何よりこの世界はDCD風味であるかのように異次元の世界。よって、一号や二号、その上クウガ等の平成ライダーとは全く違う世界観を持っています。

まず、フレアですけども……改造人間です。しかも一号や二号、V3と言った「風力」で動くライダーでもストロンガーのような「電気」で動くライダー、その上スーパー1のような「原子力」で動くライダーではございません。

「火力」です。それもかなり純度の高い「火」の力を持った仮面ライダーです

実はストーリー上次々回の話で彼の話は一旦途切れる事になりますが、彼は主人公ではありません。それはご存知の通りです。

彼がいかに主人公と関わって来るのか、お楽しみに。

Chapter 1 - 2 「フレア編」 最後の夜

ルシファール基地。

その世界の東京のとある場所の奥深くに、その基地は存在した。外に出しては確実にばれてしまうかもしれない、と言う幹部の一人のライの助言により基地は地下へと作られたのである。

その基地の中央・・・円卓机が存在するその部屋の奥に、大首領が座っていた。他の四幹部同様に鎧を纏い、その素顔は見えない。そればかりか、四幹部のマスクにはあるようなクラツシャーが見当たらないのを見ると、大首領は口元すら晒したくないようだ。

その大首領を見つめるかのように円卓の椅子に座る、四人の幹部。ギルにライ、そしてまだ名前の判明していない残りの二幹部。更にそんな彼らの下に付いている下級戦闘員がそこにいた。どうやら、何か重要な話し合いの真っ最中らしい。

ライが顎を指で擦るとギルの方を見つめて喉を鳴らした。

「ねえねえ、あのナギナタ・・・やられちゃったんでしょ？」

「てめえ、人が気にしている事を言うんじゃないやねえよ」

「だって本音だし。おまけに連絡が行き届いていなかったとかねえ

、ボクの怪人たちならそんな事ないのになあ」

「何が言いてえんだてめえ、表出るか?!」

「ちよつと、ここで揉めないの」

青に近いような鎧を纏った幹部がここで初めて口を開いた。どうやら、女幹部らしい。確かによく見てみれば胸の方にも膨らみがある。睨み合うギルとライを見て、呆れたように指を口元に当ててふうと息を吐いた。どうやら然程年を取った女、と言う訳でもないらしい。思えばこの四幹部のうちの三幹部は非常に若い青年と女性だ。残り

の一人、赤色系の鎧を纏った幹部は黙ったまま・・・腕組みをして、他の三人のやり取りを無言で見ている。よく見ればギルは緑色系の鎧、ライは黄色系…と言うより金色系の鎧を纏っているようだ。ギルとライが更に睨み合っていると、中央に座っていた大首領が口を開く。

「諸君！もう間もなく“この世界”は崩壊する・・・例の件は分かっているだろうか？」

酷く、ノイズの掛かった声だった。明らかにその性別や年齢を隠している事が分かる。大首領はくくつと喉を鳴らして嗤う。ギルはライとのにらみ合いを辞めて笑い、ライも顎に手を当てて笑った。女幹部もふふつと笑って、黙っていたもう一人の幹部も小さく肩を震わせて笑う。そうして更にくくつと笑ったライが手を挙げてそれに対する有無を答えた。

「ええ、勿論ですよ大首領さま。ボク達はちゃんと知っています

、ソラが持つ『虹の宝玉』を手に入れ大首領さまの計画を成功させる、それがボク達『四幹部』の使命。だからこそこの世界はその犠牲になってもらう、と」

「くくく、そうだ！我々の作戦を成功させる為には！あのにつくきフレアを守るあの小娘からその宝玉を奪わなければならないのだ！ライ、ギル」

「くはっ」

「あのフレアはもうどうでも良い。ならば即刻にこの世界消滅の為の開発を進めるのみ。被検体の人間を捕える事のみ考えるのだ！」

「了解」

「だいぶ進んでたみてえだな・・・くくつ」

フレアの事は、やはりもう眼中にはないらしかつた。大首領は高笑いをして円卓机の中央に手を伸ばし画面を出す。そこに映るのは、おそらくルシファー基地の実験室であろう。科学者の証である白衣をまとった科学担当の戦闘員が、何かを研究しているらしい。

奥には妙な棺らしきものが鎮座しており、そこからコードが何本も伸びてその先には液体が入った瓶も置かれている。そしてこの時代には似合わぬ・・・まさに秘密結社らしいような機械がその場で何台も稼働していた。戦闘員が何人も忙しく動くその様子を見て、大首領は喉を鳴らす。

「くくつ……………チカ」

「はっ」

チカ、と呼ばれた女幹部は大首領の方を見た。大首領は立ち上がり、手を伸ばし彼女に対して指示を下す。待っていた、とても表現するようにチカはふふつと笑った。

「あの小娘が持つ虹の宝玉の　、蒼の宝玉を奪って来い」

「あら。白の宝玉でなくて、良いんですか？あれはいわゆる変身能力を与える光の宝玉ですよ？」

「構わん。どの道すべて奪うのだ」

今は、水を司る悪に

も偏りやすいあの宝玉を奪うのだ」

「はっ」

そう言うと、チカはペコリと頭を下げるとその場を立ち去った。それを見送ったもう一人の幹部は無言で大首領を見る。大首領は再び喉を鳴らしてその幹部を見つめる。

しかし特に何も指令を与える事なく、大首領はその場を立ち去ったのだった。特にそれは普通極まりないらしい。その後、ライも出ていくのだけれどギルは黙ったまま座るその幹部の肩に腕を乗

せた。

「随分とまたダンマリを決め込んでんなあ、“キョウ”」

「……………別に」

「まあ、お前さんが大首領さま自体によく思われてねえのは事実だしなあ、ま、お前は優秀だしそれなりに人望も厚いから仕方ないんだろっけどよ」

「……………俺は別に、気にしていないが」

「はっ、まあ良いか。俺あ行くぜ」

「……………ああ」

キョウ、と呼ばれた幹部はどうやらギルとはそれなりに仲が良いらしい。マスクの下でくっつと笑ったギルが出ていくのを見送ったキョウは、一人静かに笑う。

そして、また静かにその部屋を出ていくのだった。

* * *

世界崩落のカウントダウンは、既に始まっている。

浩人は以前、そのような事を夢の中で言われていたのだ。それを告げたのは、自分よりも遥かに年下に見える少年。否、単に彼は童顔で幼声なのかもしれない。だって彼はスーツを着ていたのだ。

それもそれなりに良い質のスーツである、そんなスーツを果たして少年が着るのか、そもそも何であるようなスーツがあのような外見少年の元に存在するのか

と、別に浩人はそれを妬んでいる訳ではないのだ。問題なのは、彼が告げた言葉。

先程思い出した言葉の他にも、彼は奇妙な言葉を言っていた。

この世界の悪魔は、^{ルシファー}“他の世界”も潰そうとしている

少女を、絶対に守り抜いて欲しい

他にも、ライダーはいるだろうけどきつと君が出会う事はないのかもしれない

本当に、よく分からない。何故このような言葉を告げられるのか・
・、まるで浩人には心辺りなんてないのだ。自分にそのような言葉を告げる外見少年にも、まるで会った覚えなんてない。
特に浩人の耳を疑った言葉は、この言葉だ。

これ以上、フレアに変身してはいけない。君の体に組み込まれた「ある物」が、君を破滅へと招いてしまう。そう
なったなら・・・君は、あの少女から離れなければならない

よく分からない。確かに自分は・・・ルシファーによって、改造人間にされてしまった。あの時は自ら脱出して逃げてきたのだけれど、正直に言うならば改造の最中に体の中に何かが組み込まれてしまったとか、本当によく分からない。そりゃあ、自分の変身の動力源は「火力」だからそれに関する何かは埋め込まれているのかもしれないが・・・。

それに、この力は正義のために、ソラの為に使わなければならないと浩人自身が思っている。ならば、ルシファーを滅ぼす最後の最後まで戦わなければならないのだ。例え、己の体が滅びようと。そして、少年はこの言葉を言う。

君の炎の力は、いつしか光の力と対峙する事に、なるだろう。

実質、この夢を初めて見たのは数か月前。その時は最初の言葉ぐらいしか言われなかったのだけれども、だんだんと夢を見る度に言われる事が増えて行き 数日前に見た夢にて、先ほど浮かべた言葉を言われたのだった。

正直相談するまでもない、とは思っていたのだけれど流石にこんな展開となってくるとちよつとまずい。いよいよ自分の力は本当に「悪」と思われてしまったのか、とかそう言う心配ではなく ルシファー相手に立ち向かっていた自分の闘いが、いつしか「世界」規模になつて それがまるでまだ悪夢を産むかもしれない、と言う事を言われてしまつていようなものなのだから。

しかし・・・疑問はある。浩人の体に組み込まれている、「ある物」の事や・・・夢の中で外見少年が言っていた「光の力」。それは一体何かと言う事。全く理解不能だ。自分の体は自分で整備している身であるが、そう言ったものを見つけた覚えはない。

「 全くもつて、奇妙だよな...」

浩人は朝、目覚める度にその事を考えているが、一向に答えが掴めそうにない。

野宿で環境が悪いから、そんな夢を見るんだ、と 以前・・・ ” おやつさん ” に言われた事を思い出し、浩人は苦笑する。

思えば、こんな逃亡生活を始める前は普通におやつさんの所に、浩人は居候していたのだ。改造人間にされても尚、おやつさんは浩人を支えてくれた。言うなれば、改造人間にされた当初・・・孤独な境遇となつた浩人を支えて応援してくれたのは、おやつさんだけであつたのだ。

それが、ソラと出会い彼女と共にルシファーから逃げる生活を始める事により・・・浩人自身が、おやつさんの住まいより離れたので

あつた。以前はチラリと顔を覗きに行ける時期もあつただけれど・・・今はそのような余裕が、無くなつてしまった・・・。

「元気にやつてるかなあ、おやつさん……」

浩人はおやつさんの顔を浮かべ、ハアとため息を吐く。それを聞いて隣に座っていたソラは、不安げな表情を見せてきた。

「浩人？どうしたの…？」

「ん？ああ、何でもねえよ。ソラは気にすんな」

にこやかに浩人は笑い、ソラの頭を撫でた。

現在、時刻は夜の8時……。逃亡生活を続けている彼らには正確な宿がない。野宿しているのだ。何時なんどきルシファー怪人もしくは幹部が現れるのか分からないのだ。正直、それ故に睡眠は然程取れていない。だからもう徹夜一貫で浩人は今まで頑張ってきた。昼間はキツイ、とかそう言う問題ではない。

ソラは早く寝てしまう体質のようだから彼女は無防備になつてしまふ。

だから、いつ何時襲撃してくるか分からぬルシファーより彼女を守る為に夜も警護しなければならぬ、と浩人は思っていた。

（今んところは異常なし、か……）

「…浩人」

「ん？どうした？」

座りながらウトウトしていたソラが眠そうな目を擦り、浩人の袖を掴んできた。

今まで無かった彼女の反応に、浩人は驚く。ソラはニコリと笑って浩人の頭を撫でた。突然の行動に浩人は目を丸くするも、どうやら

船漕ぎ状態のソラには気付かれていない。

「あのね、わたしをしんぱいしてくれるのはうれしいんだけど……
浩人だって、はやくねてね？」

「ソラ……」

「んと……むにゃ」

「……」

「浩人も、無理、しないでね……？」

その一言は、深く浩人の胸に浸透した。思えば、ソラは自分より先に寝ているから自分がいつ寝ているかどうか……寝たか寝てないか何て知らないのだ。そもそも徹夜した場合だとそのまま適当な朝飯を買ったりなんざりして、ソラが起きた後は既に朝食の準備も出来ているパターン。浩人がいつ寝ていつ起きたのか分からないパターンが非常に多い。

ソラは、きつとそんな自分を心から心配していたのだろう

、と浩人はある意味不規則な生活の自分を叱り飛ばしたくなる。心の底から、守ってやりたいと思っている。彼女を、ルシファアの魔の手より守ってやる。それが自分自身の使命だ。けれど、体の事も大切にしてほしいと、ソラの方は心から願っている。………たまに、早く寝るのも良いのかもしれない、と浩人は思った。

その言葉を最後に寝入ったソラの頭を柔らかく撫でてやった浩人は微笑を浮かべる。

「ありがとなー……ソラ」

今は悪い予感も、何か怪しい気配も何も感じない。平和と断言しても良いのか分からないが、今は平和なのだ。体をたまに休めるのも悪くないか、と思った浩人であった。

* * *

“夢”ヲ見テイラレルノモ、今ノ内ダケダ：

……

陰で、そう思った人物がいた。そいつは、公園の茂みのまた奥“深く”より、じいつと寝入り始める浩人と既に寝入ったソラを見つめている。冷たい感情しか宿っていないその瞳は、些か金色にも近いのだろうか。ただただその場で二人を見つめている上に、怪人共や幹部が発する特有の「気」を発していなかった為に、この人物は浩人に感付かれなかったのだろう。

酷いくらいに冷め切ったその瞳に映る、浩人の姿を再度確認する為にその人物は隠し通せぬ程苛立ちをあらわにする。その姿は暗がりに隠れてしまっていてどんな姿なのかは全く確認できないのであるが、苛立ちを隠す気は全くないらしい。拳をギリと握りしめた。

貴様ノ事ヲ少シ、泳ガセ過ギテシマッタヨウ

ダ。イツマデモ夢見心地ナラバ、ソノ夢ヲ醒マサセテヤル。コノ世界ノ崩落モ、後少シナノダカラ……

奇妙奇天烈なその言葉。その言葉にはどことなく、雑音が混じりその性別も年齢も分からないようになってしまっているからはっきりとはしない。

この人物はおそらく、ルシファー関係の人物なのだろうともすぐ分かる。その人物は、茂みより空を見上げた。その空は夜の如くに真っ暗である。だが　この空にあるのは、それだけなどではなかったのだ。肉眼では普通見る事が出来ない、だがその人物になら見えている、ソレ。………：天空を平行に走る、「亀裂」。世界が

崩壊し始めている、その証拠だと分かる亀裂。

段々と、それは大きく開き始めている。まるでこじ開けるかのよう
にそれは大きく、太く……。亀裂が開ききったその瞬間、この世界
は崩落する。そう、ルシファーは紛れもなくこの亀裂をこの空間上
に出していたのだ。だが、一体全体どうやって発生させたのだろう。
世界への干渉をする事を出来る人物など、この世界では未確認なの
だ。否、他の「世界」にもいるかどうかも分からない。

コノ亀裂が開キルソノ時マデ……………、後、

5時間。サア…………フレア、貴様が「フレア」デアルソノ最期ノ時ヲ、
迎エルガ良イ……………！！！！

その言葉を発した刹那、天空の亀裂が開くそのスピードが速まる。
大きくなり始めるその亀裂は、いよいよその規模が大きくなり始め
て……………

渦を、巻き始めたのだった。その様子を見ながらその人物は喉を鳴
らして笑うとその場から姿を消す。しかしその様子を見つめていた
のは、その人物だけではなかった。同じように浩人を見据え、尚且
つじつと息を殺しながら……上空へと浮かんでいたその人物

、否、少年。先程の人物とは対照的に酷く悲しさを含んだその瞳
は大きい。そこは年相応なのであるうが何故浮かんでいるのかが分
からない。

崩壊が、始まろうとしている……

消え入りそうなその声で、少年は呟いた。

時間がもう、ない……一刻も早く、あの少

女を逃がさなければ。この世界より、早く逃がさないと……大変な

事になる……………

世界崩落までその時間が刻々と進む中、少年は必死そうな顔を浮かべて再度呟くと……………懐より、何かを取り出した。それは、

バックルの部分に大きな穴が開いた、ベルト。

持ち主がまだいないそのベルトを持った少年は、再び悲しそうな瞳を浮かべる。

多少の犠牲とか、そう言った物を……………生み出したくない。だから……………何としてでも、奴らを倒さなければ……………
……………全ての世界が、滅ぶその前に……………

浩人を見つめながら再度呟いたその少年は、浮いたままソラの方へと移動すると、彼女が持っていたバッグの中にベルトを押し込む。

そして、その場より……………姿を消したのだった。

未だ夜であるこの世界に、彼が踏み入ったのは……………それが最後だった。

「世界崩壊まで、あと5時間」

Chapter 1 - 2 「フレア編」 最後の夜（後書き）

一応グダグダ感があったりしますが、次々回でフレア編はし
ばしお別れとなります。ソラとルシファー、最後に現れた名無しの
両名は次の「邂逅編」以降も登場する事になる登場人物たちです。
尚、浩人は次々回以降一旦その出番を終えます。彼がまた登場する
日は如何に…

Chapter 1 - 3 「フレア編」 夢と幹部の闘

浩人が寝入り、およそ1時間経った。

早く寝たせいかわ、それともいつもと違って寝てしまったからか……とにかく眠る事に慣れず、それでも何とか浩人は浅い眠りに入っていたのだが

彼はまた、夢を見ていたのだ。

それは、いつものような変な少年が出てくる夢などではない。全く違う夢。最初は分からなかったのだけれど、いつもと違って見慣れぬ景色を現している事にそれがすぐに分かる。

「どこだ？ここ」

全く、どことも場所が分からないその夢の世界。浩人はしばし考えていたのだが、ふいに後ろから聞こえてきた爆音に　浩人は後ろを振り向いた、と、その刹那。

自分のすぐ足元が、何かによって爆発する。浩人は急ぎ横へとかわすのだけれどもすぐにその場が爆発、浩人は多少後ろへと吹き飛ばされた。一体何が起こっている？と浩人は急いで辺りを見回すのだけれども、突然目の前に……見慣れぬ戦士たちが現れる。

「え……………？」

その戦士達は、二人いた。

一人は、明るい緑色のマスクに首には赤いマフラー、そして自分の変身した姿であるフレアによく似たそのスーツに銀色の手袋をしている。もう一人の方はと言うと、これまた自分によく似ている気もした。灰色ともとれるような銀色のマスクに青色のマフラー、ただ違うとするならば腰に付いている鞞にブーツのデザイン。右左同じようなデザインなのだが、少し違うのだ。左足の方は黒に近い群青

色ととってもいいのだけれども、右足はまるで違う。銀色の鎖が巻き付いた水色のカラーリングだったのだ。そしてその戦士の手袋は黒色である。

そして・・・こちらの方をゆっくりと振り向いたその戦士二人のマスクに共通し、尚且つ自分自身と共通したその顔は……バツタをモチーフとしたデザインだったのだ。

「俺と、同じ……?」

浩人がゆっくりと呟くと、緑色のマスクの戦士は頷いて浩人の肩をポンと叩いた。銀色のマスクの戦士はと言うと、浩人を後ろへと隠す。まるでヒロインのような扱いに浩人は怒鳴りそうになったのだが、その理由は分かりたくなくとも分かる事になる。

何故ならば、二人の戦士を追うかのように目の前にさらなる人物が降り立ってきたのである。それは、鎧を身に纏った人物

ルシファアの一端であった。一体誰かは判断しようがないのだが、とにかくそいつはルシファア関係なのだ。だったら尚更……!と浩人は飛び出しそうになるが、銀色の戦士はそれを止めさせて自分の下半身を指さす。疑問に思いながら見てみると ……浩人は絶句した。

「な、んだよこれ……ッ!」

そこには、浩人がフレアになる際のベルトが出ていた。だが、バツクル部分が破壊され尚且つ……右足の部分のズボンの裾がボロボロで、自分が改造人間であるとはつきり分かるかのように皮膚の部分が破壊され、機械の部分が剥き出しとなっていたのだ。

あまりにもその酷い状況に浩人は目の前の敵を凝視する。今までじ

やもあり得なかつたその状況。しかしこの敵は、おそらくそんな状況へと自分を追い込んだのだろう、とも浩人は思う。

まさか、こいつは本気で俺を殺そうとしたのか……？ 目の前の敵は無感情ながらに動きどころか声すら発していない（それは目の前の戦士達も一緒なのだが……）。それに浩人は、こんな状況だと戦えないだろう、とようやく悟ったのだ。

大人しくしているしかない。

浩人の中に絶望感やくやしさが満ち溢れていくのだが、目の前の戦士たちは……一向にそれを感じさせなかった。否、諦めてもいないのだろうが決してここにいる自分を、殺させやしないと言う絶対的な意思を持っていたのだ。

そうして、双方が……それぞれのポーズを取る。緑色の戦士は、浩人とよく似たポーズ……浩人のポーズを反転させたかのようなポーズで、銀色の戦士は……見た事もないような、左手を前に突出し右手で握りこぶしを作り胸のすぐ横に当てる、と言うポーズだった。

二人の戦士はお互い頷き合つと、まるで息ピッタリと表現してもおかしくないように……共に走り出す。向かう相手は勿論、目の前にいるルシファールの一端で

* * *

「起きて、浩人……！」

聞き覚えのある声に浩人はハッと目覚めた。目覚めてすぐに見えた

のは自分の上に乗りがかかっているソラだった。もう朝なのかと時計を見ると、まだ9時少し過ぎではないか。

いつも深く寝入っているソラがこの時間に起きているなんて、一体どうしたのか……とゆっくり体を起こすがすぐに浩人は警戒を深めなければならなかった。

何故ならば、自分の視線の先　　遙か先にルシファー戦闘員がいたからだ。しかし、普段のソラならば深い寝入りの為に戦闘員が来ようと自分が戦闘を始めようと絶対に起きないのだ。それが一体全体どうしたのか、他にも何かあったのかと彼は顔全体で訴える。

「それが変な夢見ちゃって……それで起きたら戦闘員が」

「何……？俺も夢見てたんだ。どんな夢だった？」

「何か……浩人のような人達が、私を助けてくれる夢」

何と、と言うばかりに浩人は眉間を抑える。ソラが言うに、彼女の夢に現れた人達ライダーは浩人が見た夢に出てきたライダーとちと違ったようだが、とにかく助けてくれたと言う。

ソラの夢に現れたライダーも、二人。一人は何でもタカのようなデザインのマスクをかぶり、胸の方はトラのようなデザインで足はブーツのようなデザインだったと言う。そしてもう一人はまさに浩人の夢に出てきたような緑色の戦士と瓜二つ。違うのはスーツの腕の部分に入った線の本数と手袋の色。ソラの夢に出てきたその戦士は赤い手袋だったらしい。

それであんまりにも驚いたので目覚めるとソラは戦闘員を発見したと言う事らしかった。こんな偶然あり得ない、と浩人は目を丸くしたのだが……今は悠長に構えている時間はない。

「逃げよう、今なら大丈夫だ」

「うん。浩人……何か、怖い」

不安げな瞳を見せるソラを抱きしめた浩人は急いで止めてあるマシ
ンイフリースの元へと走る。勿論、ソラは大事に玉が入ったバッグ
を抱えている。そして止めてあったイフリースへと浩人は跨り後ろ
へソラを乗せた。メットを被りイフリースを走らせる。

時刻が時刻であるが為に、ライトを付け走っているが、どうやら戦
闘員は気付かなかつた模様。猛スピードで飛ばしていたのだけれど
も、特に追っても来ないようなので浩人は安堵してイフリースのス
ピードを少し落とした。ソラは浩人の腰を掴みながらバッグの中を
覗き見たのだけれども、ふいに・・・中に何か増えている事に気付
く。

「何？これ・・・」

ソラはバッグの中に手を入れ、その増えた物を少しバッグから取り
出した。それは、確かにソラが知らなくて無理はなかったのかもし
れない。およそ一時間前に、不思議な少年の手により入
れられた、バックルの部分がないベルトなのだから。

まるで浩人のベルトにもよく似たそれを見ていたソラは、ふいに……
奇妙な即視感へと襲われる。ホンの一瞬の事だったのだけれども、
それをどこかで見た事がある気がしたのだ。だが、浩人のベルトの
形状もそれとよく似ている。だから見た事があってもおかしくはな
いのかも知れない。と勝手に納得してしまったのだった。

ベルトを再度バッグの中へ仕舞い込んだソラは前を見て、ふいに周
囲の霧が濃くなっていている事に気付く。ソラは、上部のみのメットを
被っていた為に、すぐにそれに気付いた。浩人は頭部全体のメット
だったために、未だ気付いていないのだろう。

「何、これ」

「ソラ？どうした？」

「浩人！何だか霧が濃いよ・・・?!」

「何？まさか」

浩人がソラから聞いてようやく霧の存在に気づき、バイクを一時止めようとしたその時だった。目の前に人影らしきものが見えるではないか。このような時間にまず人は通らない。

　と浩人は考え、その人影を乗り越えようとバイクを更に走らせるのだが・・・深い霧の中から数名の戦闘員が飛び出す。

「止まれっ！」

「止まれっ！」

「なっ！邪魔なんだよ！！！」

「浩人！」

「大丈夫だソラ！」

　しかしまあ、思ったより早く嗅ぎ付けやがったな。しかし俺はこのバイクを絶対止めないぜ！！うりゃああ！！！」

そうして浩人はバイクのスピードを上げて、前へ立ち塞がる戦闘員を轢きながら更にバイクを走らせようとした、その時だった。目の前に突然青い火が立ち上るとバイクの目と鼻の先に止まる。

慌てて浩人はバイクを止めて、その青い火を凝視した。このような火を　　、彼は過去に一度か二度ぐらい目撃した事があった

のである。それは、中級の怪人でも下級の戦闘員でもない、悍まじき気を纏ったルシファアの四幹部の一人　　チカ

のものであるからだ。

生憎、火と火であるが為に相性が悪すぎる為に浩人は迂闊に手を出せない。

「こんばんは、フレア」

「てめえ……チカツ！！！」

「ふふふ、覚えていてくれたみたいね。さあ、単刀直入で悪いのだ

けれど、後ろの彼女が持つ宝玉の一つ……『蒼の宝玉』をこちらへ渡してくれないかしら。悪い様にはしないから」

「何？」

「ふふふ、そこまで警戒しなくても良いわよ。その彼女を突然攫ったりしないし、第一私はそこまで戦いは好きじゃないもの。ふふふ」

チカは余裕を持った口ぶりで浩人とソラに揺すりをかけてきた。目的は勿論、大首領の命により奪う事を命じられていた『蒼の宝玉』。浩人は知らないのだが、その宝玉に秘められているのは火と正反対の水であり、悪に一番近いとも言われている宝玉なのである。

ソラは持っているバッグをギュツと握りしめて、浩人はチカを目の前にしても構えのポーズを取った。いきなりこんな事を言われても信じない、信じてはいけない。特に、相手が上級の幹部である場合だと嘘を吐いている可能性だって否定できないのだ。チカは嘆息する。

「やっぱり渡してくれないの？」

「当たり前だ。誰がお前なんて信じるか」

「ふふふ……あらあらやっぱり正義の味方ねえ、それらしいわねえ、ふふふ。けど……私が本当に手を出さない、って言ったらどうするの？」

「……………」

何が言いたい、と表現するかのようには浩人はチカを睨みつける。だが一方のチカは、やはりその口ぶりに余裕を持っている。一体このような余裕の根源はどこから来るのだろうか。

それに わざわざこう言った幹部級の怪人が、目の前に現れると言う事自体が何だか怪しい。怪しい事極まりないのだ。浩人の表情は明らかに訝しげである。

その一方でチ力は、マスクの下で嘲笑を浮かべていた。口を弓なりに変化させ、蔑むように目の前の二人を見つめている。しかし生憎それは漏れる事はないので、気付かれていないようだが。

「さあ、どうするのー？」

「……………断る」

「あら残念ね」

「お前を信じる気になれないし、第一……………敵組織を誰が信じるか！」

「お堅い事。良いわ、交渉は決裂ね」

チ力は再びふふ、と笑った。やはりこちらの思うようにはいかなかったか、と内心思うがそれも半分計算のうち。この正義の塊のような浩人がまずその交渉に乗るなんてあり得る話ではないのだから。チ力はちらりと持っていた懐中時計を見て現在時刻を確認する。

終末まで、後3時間50分。彼女はあまり時間は喰ってられないようだ。「例の件」の事もあるだろうし、このフレアを……………何とかしなければいけないからだ。

あまり卑怯な事はしたくなかったが仕方ない、とばかりにチ力は左腕を上げる。その瞬間、周囲に広がっていた霧が一か所に集まり始め像を成して行く。

「?! まさか、コイツ」

「ふふつ、研究員お手製の新作デビルちゃん。さあ出でよ！ミストデビル!!」

「何?!」

その名を叫んだと共にギギツと、影から声が聞こえて段々とその像が形を成す。浩人が身構えてソラを後ろへ庇う。そして変身しようとした、その刹那だった。突然影から戦闘員数

名が現れ、浩人が後ろに庇っていたのを良い事に、いきなりソラを拘束したのだ。

「きゃあああ！！浩人！！」

「?! ソラ！！」

「大首領の命により貴様を基地へと連行する！！」

「ソラ！！てめえ、チカ！！」

「あら、悪の組織は
これくらい悪じゃないと、
ダメじゃない？」

その瞬間、像を成した怪人が目の前に現れて浩人をいきなり攻撃する。それをかわした浩人はその姿を見てギョツとした。ミストデビル……、外見は今までの怪人たちと然程変わらないのだけれども違うのはその体から煙が噴き出していると言う事だった。

尚且つ、異様に腐敗臭を醸し出している……。浩人は、ギリツと歯軋りをした。まさかチカは最初からこれが狙いだったのかと、今更になって怒りが込み上げてくる。しかし霧の怪人、と言うのはある意味で厄介なのだ。この時の浩人は考えもしていなかった。

「てめえつ！！」

「仮面ライダー！今までの怪人と我が一緒と思うな！フハハハハ！！」

「許さん……お前だけは許しちゃおけない！！」

そしてミストデビルに蹴りを入れようとした浩人だが、蹴ろうとしたその瞬間にミストデビルの姿が掻き消える。急いでどこへ行ったのか探すのだけれども、後ろからチョップを入れこまれる。見ると、そこにミストデビルが移動していた。

そう、そいつは「霧」の怪人だ。つまりは自分の姿を消したりするなど自由自在なのだ。浩人はそれでも攻撃を加えようとするのだけ

れども、まるで雲をつかむかのように逃げる、そして攻撃されてしまう。

「くそ……、どうしたら！」

「ふふっ」

「チカ……てめえ!!」

そして浩人が変身しようと、ポーズを取ったその時だった。ミストデビルが再び霧へと変化して、姿を消す。視線のみでミストデビルを探し、変身しようとした

その刹那。

彼の後頭部に、鈍い衝撃が走る。視線をすぐに後ろへ向かわせようとするのだが、数秒と経たないうちに再び衝撃が走り彼の姿勢が崩れる。ゆっくりと、後ろを見た彼の目に映ったのは……ミストデビルの姿だった。痛みが広がる中でも彼は、そいつに攻撃しようとするが頭を殴られていて意識がどこか朦朧とし始めていた浩人の攻撃は全く通じない。逆に、強いアップパーカットを食らい後ろへと後転してしまう。

「て、めえ」

「くくく、残念だったなあ仮面ライダー。大首領さまに貴様も基地に連れてこいとこの命令があったものでなあ……しばらく眠ってもらうぞ」

「何を」

それは大首領からの命令による攻撃だったらしい。ミストデビルは更に強く浩人を蹴り込み、彼の腹を強く殴った。そこはベルトも収められている部分だ。おそらくすぐに変身出来なくしよう、と言う画策なのだろう。蹴り返そうとする浩人だったが

、その鈍い痛みに耐える事が出来なかった。

再度攻撃を食らった後……横転した浩人は、気絶してしまった。

ミストデビルは気絶した浩人へ近づくとコンコンと彼の体を叩く。反応なし、と確認したミストデビルはチカの方へと向いた。

「これで良かったでしょうか！」

「ええ、ご苦労様」

「浩人…浩人…！ツ…！」

「動くな！」

「大人しくしろ…！」

「ふふっ…後から大首領様にあのような命を貰うとは驚いたけれど、上手く行ったようね。さ、二人を連れて撤収よ…！」

「はっ！」

「離してっ！嫌！浩人、浩人…！お願い、目を開けて！浩人…！」

ソラは戦闘員に拘束されながらも抵抗し、浩人の名を呼び続ける。が、強い衝撃を食らってしまった浩人がそれで目を覚ます事はなかった。おまけにその後ソラも、後ろから手刀で殴られて気絶し、二人揃ってルシファアの基地へと連れて行かれてしまう事となった。チカは上手くいった、とばかりにほくそ笑みミストデビルもゲラゲラと笑う。この後に、思いもよらぬ失態を犯す事になるなど、知る由もない二人は笑い続けるのだった…。

「世界崩壊まで、あと3時間45分」

Chapter 1 - 3 「フレア編」 夢と幹部の罠（後書き）

予定変更、と言う進路変更に悩まされながらも今回話投稿出来ました！

もう、本当に本当に 次回こそ、フレア編の一旦の区切りとなります。本当の本当に、嘘じゃございません

次の話で いよいよ本当に、物語の本当の始まりを迎える事になります。強いて言っておくならば、次回にて主人公たちの世界が少し垣間見える事になるかも………？

Chapter 1 - 4 「フレア編」 正義の炎

二人が出会ったのは、ルシファー基地の隔離実験施設だった。その施設で何の実験をしていたのか、今でも浩人には分からない。だが……そこへ乗り込んだ浩人が彼女の姿を見つけた時、彼女を連れて逃げなければならぬと、直感で思ったのだ。

誰？

ライダーに変身したままの浩人がそこで、彼女にそう呼びかけられた。まるで檻のような場所にいれられた彼女は今よりもずっと酷い状態で……まるで、すぐに折れそうな枯れ木のように細く、肌の色も尚白かった。そんな姿を見た時

浩人は、檻を壊して、自らの名前を告げる。

俺はフレア、仮面ライダーフレア

仮面、ライダー……？

まあ、これは変身した姿だから普段は埜川浩人ってんだ。

君は？

……ソラ

そっか。良い名前だな、ソラ

どうして、それ壊したの……？

決まってるだろ？君を、ここから連れ出す為だ

え……？

その時の彼女の、ソラの驚愕した顔は本当に浩人にとって印象深かったのだろう。浩人はソラへと手を伸ばしたのだ。その檻を壊し……

…一度変身を解いた浩人が、満面の笑みで。

逃げよう、ソラ

あなたは、あの組織と戦っているの・・・？

ああ。俺は、こんな体にされちまったけれど・・・あいつらのやっている事を、見逃すわけにはいかない。だから、俺は戦う。戦い続ける。これ以上、好き勝手をさせない為に

でも、私は……

大丈夫、俺が必ず……君を守る

………！

その言葉がきつかけに、ソラは手を伸ばした。そして彼らは逃げ出すと共に実験に使用されていた七つの玉……『虹の宝玉』を持ち出し、逃亡劇が始まったのだった。

それから数か月　　彼らはずっと逃げ続けていたのである。

まさに流浪と言っても過言ではないのだけれども、浩人はそれで良いと思っていた。ただ、彼女が無事であれば　　それだけでいいのだと。

* * *

「世界崩壊まで、あと1時間30分」

「……」

鈍い頭の衝撃が走ると共に浩人は目を覚ました。腹の方も痛い。ゆっくりと体を起こした浩人は辺りを見渡して自分が一体どのような状況下なのかを、思い出す。

彼はあの時……かつてない強敵にやられ、気絶してしまった。ソラ

は拘束されたままだ、と言つのは覚えているのだけれどもそれ以降はまるで記憶にもない。まあ、気絶していたのだから当然なのだけれども。と、浩人は急いでソラを探すのだけれども………肝心のソラが見当たらない。

「ソラ！どこだー!!」

後頭部を擦りながら浩人はソラを探す為に近くにあった扉を蹴り開けるのだが、そこからすぐに飛び出してきたのは戦闘員たちだった。しかも、その手には見慣れたバツグを持っているではないか。

「お前らー!!」

「ぎゃっ、もう起きたのか!」

「かかれっ!!」

「今お前らの相手してる暇はないんだよっ!!」

浩人はすぐに掛かってきた戦闘員をあつという間に投げ飛ばしたり蹴ったりと一網打尽にする。そして、戦闘員の一人が持っていたバツグを取り返すとそいつを更に蹴り飛ばした。

浩人は悟った。ここはおそらくルシファアの基地なのだと。そうだあの後にきつと自分たちはここに連れ込まれたのだと。だが脳内に何も変化がないと言う事は脳手術自体は受けさせられていないようだった。ここまで連れてきたのであれば何か意図があると言つのに……。

彼はルシファアに改造された改造人間だ。捕まえたのであればさつさと脳手術でもするものだと思っていたが……、一体何を考えているのか。ソラすらも捕まえたと言う事は、いよいよ大首領関連なのかも思いたくなるが……、考えている暇はないだろう。浩人は急ぎこの部屋を抜け出しすぐそばにあった階段を駆け上がって、すぐに一つ一つ部屋を調べて行く。

「どこにいるんだ、ソラ・・・！」

戦闘員に出くわす度に浩人はアツパーカットや回し蹴りを食らわせながら浩人はとにかく基地内を駆け回る。必死に浩人はソラの名前を叫びながら、基地中を探し回ってだいぶ時間が経った時か

新たな扉の前へ行きつくのだった。

その扉は白い。他の扉は黒かったのにこの扉だけ白いと言う事は、まさかかなり心臓まで来たと言う事なのか。と、浩人は考える暇もなくその扉を蹴り飛ばす。

「なっ・・・！」

その部屋は

大首領の、部屋だった。その後ろ姿を見

た瞬間に、浩人は立ち止まる。今まで見た事あるような幹部同様にその姿は鎧に包まれている。だが、椅子に腰かけて足を組み、尚且つそのマスクも幹部とは違いクラツシャーが見受けられない。

その姿を見た瞬間、浩人は拳を握りしめて構えのポーズを取った。

「お前が・・・お前が・・・！ルシファー大首領か！！」

「如何にも！……ようこそ仮面ライダーフレア、埜川浩人。我がルシファー基地へ。しかし残念だ、貴様とももうそろそろお別れだと言っただから」

「！！……別れだとはどういう意味だお前」

「言葉の通りだよ。我らルシファーは真の『世界征服』へとその駒を進める。だから貴様には用がないと言う事だよ。簡単に気絶させた程度じゃあすぐに目覚めるとは思っていたがまさかこうも早いとはなあ。ふふふ、流石だ・・・流石ルシファーで一番の科学力を結集させて改造させただけある」

「はっ！その科学力は今こうして正義のために使わせて貰ってるぜ

「！！大首領、今ここでお前を倒す！ソラも取り返す！！」

そして浩人はその場で変身ポーズを取った。腹も殴られ痛みが走っていたがそれも恐らく時間がたてば治るとも思っていたようだ。現に、もう痛み自体は引いているのだから。

左腕を斜め右方向に構え、斜め左へと動かしながら浩人は叫ぶ。

「ライダー、変身ッ！！」

その瞬間に腰に当てていた右腕を斜め左へと上げた瞬間にベルトが出現。両腕に炎が出現し両手を交差させてすぐに前へと引き戻す。

そして浩人は飛び上がる。

そんな様子を見ながら大首領は、喉を鳴らしていたが、腰かけていた椅子に座ったままだ。

「とおっ！！！！」

浩人はフレアへと変身し、大首領へパンチを食らわせていた。しかしそれを受け流した大首領は座ったままフレアへパンチを食らわせる。それをまともに食らった彼は少し後ろへ離れるがすぐに回し蹴りをして大首領へとダメージを食らわせようとする。だが、余裕を含んだ大首領にそれは効かなかった。足を止められ上へと投げられる。

バク転をしたフレアはその拳へ炎を宿らせると鋭いパンチを食らわせる。

「フレアパンチ！！」

「……」

そのパンチは、大首領のマスクの正面へと衝突し大首領のマスクを、

少し溶かした。だが大首領自体はまるで平気らしい。すぐにその拳を払うとフレアの胸へと強い拳をぶつける。鎧に包まれた大首領の拳を左手で受けたフレアだが、妙にビリッとした感覚へと襲われる。そして大首領のマスクの溶けた部分から口元がちらりと見えて、その口元が歪なように弓なりになっているのが分かる。異様に若いようにも見えたその口が開くも、やはり雑音交じりだった。

「フレア。貴様は我を倒すことなど出来ない」
「やってみなきゃ分からねえだろ!!」

すぐにフレアは左手で大首領の拳を押し返し彼のマスクを完全に取っ払おうと蹴り上げるのだがすぐにそれも阻止され今度は完全に押し返される。

後頭部の鈍い痛みがまだ引いていないせいか、どうにも動きが緩慢だ。それでもフレアは再び回し蹴りをして大首領へとダメージを食らわそうとする。だが、すぐにかわされて拳句の果てには左の壁へと衝突させられてしまった。その壁は異様に薄く突き破りフレアは隣の部屋へと移動する。

と、そこには……

「浩人?!」
「!!! ソラ!!!」

その部屋こそどうやらソラが捕まっていたらしい。一緒にチカやギルもいる。フレアの突然の乱入に驚いたのはギルよりもチカだった。まさかすぐに脱出されるとは思っていなかった模様。

「なっ・・・あなた!」
「チカ!ギル!」
「ちっ、何でここにフレアがいるんだよおい」

「それはこっちの台詞だ！ソラを返せ！！」

フレアはすぐにチカやギルを蹴り飛ばしその場から突き放す。と、すぐに他戦闘員や白衣を着た戦闘員が飛び掛かって来るがフレアは右足を体の横へ引き炎を宿らせて回し蹴りを食らわせた。そもそもフレアがいる事自体知らなかったギルはそれに、仰天の声を上げる。

「待てよチカてめえ、何でフレアがいるんだよどういう事だ?!」

「そ、それは」

「我が指令したのだ」

戦闘員を吹き飛ばし続けていたフレアたちがいるこの部屋に、大首領が姿を見せる。やはり一部が解けたままだったマスクをかぶったままの大首領は、本当に余裕の表情を浮かべていた。

ギルは、先刻まで「フレアには用はない」と言っていた大首領に不満げな声を上げる。

「大首領、どついう事なんだよ?!」

「くくく……」

「フレアはもう用なしなんじゃねえのかよ?!」

「ああ、フレアにはもう用はない」

「じゃあ何故」

「だから、『フレアには』用はないのだ」

「……………はっ?」

一方、……完全に蹴りだけで戦闘員を吹き飛ばしたフレアはソラにバッグを持たせ、そんなやり取りをしていた幹部二人と大首領を尻目にその部屋から飛び出す。

その様子にすぐには気付かなかった、ギルは素っ頓狂な声を上げた。

「……………どういう意味なんだよ、それ」

「大首領さまはね、確かに『フレアには用はない』とはおっしゃったけれども……………、『埜川浩人には用はない』なんて、一言も言っていないじゃない?」

「まさか……………要するに、仮面ライダー自体は不必要と?」

「その通りだ! くくく……………ギル、今すぐにあの二人を追え」

「は?……………あつ、ち、いつの間に!」

ギルは怒鳴り声をあげながらすぐさまにその部屋を飛び出す。チカも、急ぎ飛び出そうとするも大首領が「待て」と呼び止める。

「大首領、さま?」

「お前は一つ……………失態を犯したな」

「は? 一体どういう事で?」

「……………蒼の宝玉は、どうした?」

「あ……………?!」

そうだ、チカは確かにここまで浩人「フレアとソラを連れてきた。だが大首領が「埜川浩人とソラの捕縛」を指令する前に命じていた、肝心の蒼の宝玉を奪うのを忘れていたのだ。思いもよらなかった自分の失態にチカはマスクの下で唇を噛む。だが、更に大首領は言うのであった。

「それとだ」

「?」

「……………“例の機械”のスイッチを、さっさと入れる。もう時間などない」

「! ! !……………了解しました」

チカはその指摘に更にマスクの下の顔を赤くして、その部屋から同

じように飛び出すのであった。その部屋に残された大首領は、くくつと喉を鳴らして笑うと自分が持つ懐中時計に目を通す。時刻はもう0時前……もう間もなく日付が変わろうとしている。そしてそれは……世界崩落のカウントダウンが更に進むと言う事に、大首領は更に笑った。

「さて、どうするかな、“彼奴”は。くくつ……まあ、どの道あの少女だけが逃げたとしても特に無利益だからな……くくく」

そう、意味深な言葉を言った後に大首領はその姿をフツとかき消すのだった。

* * *

一方、フレアとソラはとにかく基地内を走り回っていた。戦闘員を蹴り飛ばし、殴り飛ばし、とにかく逃げていく。ミストデビルと言う強敵が見えないのだから、今のうちに何としてでも基地を脱出せねば、とフレアは考えていたのだ。バッグからは幸い盗まれたものはないようだから、それならばまだいいが問題はソラが何かをされてないかという事。走りながら、フレアは彼女に聞く。

「ソラ、大丈夫か？どこも痛い所はないか？」

「うん、私なら大丈夫……浩人こそ、平気？」

「ん？ああ、俺は大丈夫だ」

「ホントに？」

「ホントだ。さて……早くこっから逃げ出そうぜ！」

フレアはソラの手を引きながら基地の坂をとにかく駆け上がり・・・大穴へと辿り着く。そこには、何もなかったがマシンイフリートも一緒に運び込まれてしまっていたらしい、その場に転がっていた。フレアはそれを急いで起こすとソラを後ろに乗せる。

それから周囲を見渡していたのだけれども……………今の所奇襲が来る様子はないようだ。ふいに安心して、バイクに乗り込もうとした、その時だった。　　凄まじい殺気が、後ろから近づいてくる。ソラを庇わなければいけないような衝動へと駆られたフレアは、ソラの後ろに立って、自分たちが先程上がってきた坂の方へと向きなおす。

「浩人？」

「ソラ、そのまま前向いてなっ！」

そしてフレアが構えたその刹那、その坂の方面より……………鍬が付いた鎖が伸びてくるではないか。フレアはそれを上へと蹴り飛ばし更に炎が宿った手でフレアチップを食らわせその鎖を切る。

しかし、間髪を入れずに凄まじい殺気が更に立ち上ってくる。その殺気の根源を、見ようとしたその時だった。断ち切ったはずの鎖が再び繋がれ……………

「ぐはあっ！……！」

その鎖が、フレアの胸を、貫いていたのだ。前を向いたままだった

ソラが、その音に驚愕して振り向き……目を見開いた。口から凄まじい吐血をした為それを急ぎ右手で抑えるも、クラッシャーからそれが漏れ出たフレアの姿を更に見た時に、彼女は悲鳴を上げる。

「いやあああああああつ！！！浩人おおおおおつ！！！」

「ごほつ……誰だよ、てめえは！！！」

右手で血を拭いながら、その坂よりやってくるそいつにフレアは目を向けた。そこからやってくる、長い鎖を持った奴……それは赤い鎖を纏った幹部、キヨウだった。フレアは、マスクの下の口から更に血を流すも何とかその場で持ちこたえる。

キヨウは無言のままその鎖を自分の所へと引き寄せ、その指でフレアの血を拭き取った。右手で傷口部分を抑えなければ、その部分からポタポタと血が零れ落ちてくるからであった。

「……………逃がさない」

「上等だ、やってやるうじゃねえか！！！」

「……………フレア、否、埜川浩人。……お前に、時間があるのだと思うな」

「何……？」

その言葉の真意を答える前にキヨウは持っていた鎖を振り回し始め攻撃を開始した。フレアはそれを避けて右足で鎖を蹴り返す。それでも再度持ち直したキヨウは勢いよく駆け出し鋭い蹴りをフレアへと当てる。本当ならば避ける事が出来たのかもしれないが、傷の影響からか動きが鈍い。

その傷口からも口からも血を吐き出しながら、フレアは横転した。キヨウは、そんなフレアを見下し鼻で笑うと更に蹴り込み返り血を浴びながらも蹴り続ける。彼がマスクの下で一体どのような表情を浮かべているのか、それは想像に難くはないだろう。

「ぐっ・・・」

「……………くくく」

「ちっ、こんな、ところで……………ぐはっ！」

フレアは痛みにもがき苦しみながらも何とか立ち上がるが、それでも尚キヨウは彼にアッパーカットを食らわせて横転させる。そんな彼の体が宙を舞い、バイクに衝突。ソラの素肌にフレアの血の飛沫が飛び散って、更に声を詰まらせた。

「浩、人ッ」

「くっそ……………思いのほか力が出せねえ・・・ごほおっ！」

「嫌ああああ、やだあああ！もう止めてよおおお！！」

ソラは悲痛な叫びをあげて、キヨウへと訴えかけるも彼はそれに応えない。ガクガクと体を震わせているフレアを庇おうと、ソラは立ち上がるうとした、が。それを……………フレアは制する。

彼は決めていた。例え、自分がボロボロになろうともソラだけは守り通す。実験施設から彼女を連れ出し逃亡生活を始めたその時から、彼女だけは……………絶対に守り抜くと。

「浩人……………嫌、そんな傷」

「心配、すんな」

「でも……………私、もう」

「絶対、守り抜く、から……………そんな顔、すんなよ」

フレアは、血の付いていない左手の掌で、ソラの頭をわしゃわしゃと撫でた。自分がここにいる限り、ソラを守って見せると言う強い思いがそこにあったのだ。

ソラはそんなフレアを見て酷く、胸が詰まりその目から涙がこぼれ

落ちる。ポロポロと泣き出したソラの顔を見て、フレアは……突然、自分がかぶっていたマスクを外したのだ。その素顔……浩人である顔を晒すと、ソラの顔が更に悲しみに満ち溢れた物になる。その顔は、口から血を吐き出しているせいか若干青白くなっていたのである。

「参ったな……、泣き出す、なんてさ、もう随分ぶりじゃねえか」
「だっ、て」

「……俺はな、お前を守ると決めた。だったら、こんな場所でソラを泣かせたくなんて、なかったのにな……ごめんな」

「……………戯言は、それだけか」

その、キョウの冷たい一言を聞いた途端に浩人の顔が酷く激昂した物へと変貌するが、次の瞬間には傷口に再びあの鎖がねじ込まれていたのだった。

ソラの目の前で浩人は血を吐きだし、それによりソラの顔へ返り血が付く。

「いやあああああ！！！」

「く、そ……！こんなところで、終わるかよ！！！」

しかし、もう力が殆どないも同然だった。浩人は、それを実感していたのだ。正直、ミストデビルにやられ捕まって以降の流れは最悪そのもの。

時間もないのかもしれないと、彼は悟る。唇を噛み締めた浩人は、ソラを見た。彼女は完全に怯えており、それでもバッグは握っているのだがこのままでは奪われてしまう可能性も否定できない。ひよつとすれば、守りきれないかもしれない。だが、こんなところで逃げる訳には行かない。例え力がなくともここで負けるわけには行かない……絶対に負けない、と浩人は誓う。

「俺は逃げない……絶対、逃げたりしない!!」

「……………ここで引いておけば良かったのにな」

「はっ、言わせておけば好き勝手言いやがる!てめえらの息の根を止めるまで、俺は逃げない、倒れない、死なない!絶対だ!!」

「……………ここでお前を殺す。……死ね、死んでしまえ」

「やってみやがれこの糞幹部!!」

浩人がそう吐き出すと口から血が垂れ落ち傷口からは更に血が流れる。そんな様子を見て、ソラは自然と更に涙を流していたのだ。目の前で、自分をこんなに大切にしてくれた人が…浩人が苦しみながらも、血を吐きながらも、それでも尚戦い続ける。

ソラは十分に守られてきた。それでも彼は、ソラを守ろうとする。

それは、彼が「正義の味方だから」と言う理由ではなく、「一人の人間として」ソラを守りたいと言う事を。ずっと前から彼は、「ヒーロー」なのだと言う事を。

「浩人……浩人……っ」

「はああああああっ!!!」

涙を更に流すソラを横目で見た浩人はギュツと拳を握りしめ、ひと声上げると目の前にいるキョウウへ向かい駆けていく。どんなに血を流そうが、浩人の足は止む事はなかった。キョウウは鎖を投げつけ更にその傷へとねじ込もうとするのだが浩人はその拳で鎖を弾き返した。舌打ちをしたキョウウがもう一度それを投げつけると、今度は浩人はその拳に炎を宿らせ突き破る。マスクの下で目を見開いたキョウウだったがならばとばかり殴りかかるのだが、どこからそんな体力が、と思う程に浩人は素早く避ける。と右足を上げ蹴りかかるように当てた。

「ッ?!」

「良いか　　てめえは俺を殺すと言った、だがな……俺の命は、こんな所で燃え尽きねえんだよ。俺はまだ、ソラに平和な世界つてのを見せてやれてねえんだぞ？お前らに幽閉され、変な実験に巻き込み……お前らは何とも思わねえのかよ！！俺は許さない、たった一人の少女の体も心も無駄にしよつたてめえらを、ルシファアを許す訳には行かねえっ！！うおおおおお！！！」

「た、戯けが！！！」

「言ってるおおおおおっ！！！！フレア……ライダーキイイイイイイイック！！！！！」

そしてそのままその右足へ炎を宿らせそのまま左足を軸にして回し蹴りの形式を取ったフレアライダーキックを炸裂。後ろへと吹き飛んだキヨウだったが更にそれを追った浩人は目の前で手を交差させるとそのままキヨウの胸へと手を当てる。

自らの体にも炎を宿らせ全身火だるまと化した浩人は叫び声をあげたままキヨウを壁へと追突させた。

「な、何を……っ！！！」

「俺の炎を……正義の炎を食らいやがれっ！！！！ブレイヴファイアアアアアアアアア！！！」

壁に衝突させたままのキヨウへ、浩人は全エネルギーを……自らの中にあつた炎の力を己の体全体へと集結させるとそれをそのままキヨウへとぶつけた。そして、右の拳で更にキヨウの胸へとパンチをするとそこから更に炎が伝わりキヨウの体が熱い炎へと包まれる。声とならぬ悲鳴を上げたキヨウはそのまま壁を突き破り、暗闇の中へとその炎を宿らせたまま消え去って行った。

フレアの内に眠る炎の力を全開放した最強の技・《ブレイブファイア》。その技を食らわせた浩人は激しい息切れをしながらソラの方へと振り向く。

「ソラ 　　ここから、出よう」

「浩人……っ」

「大丈夫、言つたる？俺はこんな所で死なないってな」

そして、笑顔のまま浩人がソラの元へ近づこうとした、その時だった。ソラも、浩人自身も、ようやくこの基地から抜け出せると思っていた、その刹那。

後ろから猛スピードで駆け抜けてくる者が、一人。浩人は横目でその姿を見た時、その表情を一変させるのだった。ギルが今、ここまで走ってきていたのである。まさか来るまいと思っていた相手の出現により、浩人は急ぎソラが載るバイクの元へと走ろうとしたのだが　その前にギルは辿りついていた。辿りついたギルは浩人の首を掴み地面へと捻じ伏せる。

「て、めえ」

「貴様……絶対に帰さんぞ！！そこまで血まみれになってるからには訳があるだろうが、大首領がお前を追えとの話だったんでなあ」

「……はっ、タイミング悪いなお前。赤い野郎はさつき吹っ飛ばしたぜ」

「な、に……?!キョウを?!」

その瞬間、ギルは浩人の首を絞める力を更に強める。苦しげな表情になる浩人をマスクの中から激昂した表情で睨んでいたギルは浩人を締め上げようとしていたのだ。

「貴様ああああ!!!!」

「ぐ……はあ」

「止めて、止めてええええええ」

ソラはバイクから離れて急いでギルを浩人から放そうとするのだがギルは怒りの感情のまま、手だけでソラを弾き返した。

悲鳴を上げて後ろへと倒れるソラを見た浩人はその瞬間怒りに火をつけ、ギルの締め上げるその腕を力づくで押し上げまだ感覚のあつた右足でギルの横っ腹を蹴りどけると急いでソラの元へと駆け寄る。

「ソラ！大丈夫か！！」

「浩人お・・・」

「早く、早くここから……っ！」

浩人は急いでソラの体を起こそうとするも、横目でちらりと後ろを見てギルを確認する。ギルの方はギルで、どうやら崩れた壁の方を見ていたのだ。 やられた仲間を気にかけているのか、と

浩人は認識すると自分の力がもう微塵にも残っていないのを悟った。恐らくこのままでは戦えないだろうと、浩人はソラが持っていたバッグの中をまさぐり赤い宝玉を探し当てると、両手で握り自分に残る炎の力を、その宝玉へと込め出す。

「浩人？何してるの・・・？」

「俺に残る炎の力を……この玉に込めてる」

「っ？！そ、そんなことをしたら！」

「大丈夫、俺の炎の力は、俺自身から湧き上がってくる、何度でも尽きようが何度でも蘇らせてみせる！だから、な？」

そして、最後の炎の力を玉に込め終わると変身が解けると同時にその玉を再びソラが持つバッグの中へと戻すのだった。変身が解けた浩人の姿は、もう本当にポロポロの姿で、戦えないようにも思える姿そのものだった。ソラは、そんな浩人を見て彼を抱きしめる。

「浩人・・・っ、もう、ここから出よう？もう浩人をポロポロにな

んで、させたくない・・・！」

「はは……っ、そんなボロボロなんだなあ、俺」

「ちゃんと休まなきゃ、その怪我だって、治さなきゃ」

泣きながらそう言うソラの頭を撫でながら浩人も抱きしめると、彼女の涙を指で拭う。正直、確かに胸の傷がひどくズキズキと痛んでいたのだ。否、もうズキズキとどころか
逆に殆ど感じて
いなくなったりするのだけでも、それを敢えて言わずに浩人はソラを抱きしめていたのだ。

「俺は、まだやれる。ボロボロになろうがなんだろうが、これから
もソラを守ってやるから、な？」

「浩人……」

「そう不安な顔すんなって。俺は
仮面ライダーであり、一人の人間だ。例えこの体が朽ちようとも、悪が滅ばない限り俺は戦い続ける。ソラを守り続ける。それが、俺なんだから、な？」

ソラは、その言葉を聞き血に塗れた浩人の腕と体を握り返してやるのだけでも、・・・浩人の口から血が垂れ流れるのを見て更に涙を目尻に溜めてしまう。戦士と言うのは何と過酷なものか、出来る事ならばこれ以上彼をルシファーとの戦いと言う戦場に巻き込みたくない、と思っていたのだけでも恐らくそれは不可能だろうとも同時に思う。

心のどこかで感じていたのである。改造人間にされてしまった彼の宿命は、ソラと言う大切な人を守りルシファーを倒す事なのだ。どこことなく、改造人間、と言う言葉に酷く哀れな感情を覚えてしまう。

と、その刹那。後ろから怒りに狂ったギルの姿が、襲いかかろうとするギルの姿がソラの瞳に見えたのである。ところが先程の闘いで疲れ切っていたからであるからか、浩人は気づいていない。ソラは、

一つ涙を零した。そうして、「浩人！」と叫びそうになったその刹那だった。

その涙のしずくが開いていたバッグの中へと零れ落ち、一番よく見えていた緑の宝玉へと落ちる。するとその緑の宝玉がまるで涙へと反応するかのように、光り出す。

「っ!!！」

「何だあ?!！」

「何、これ」

その光は淡い緑の光から強い光へと変貌し、ソラと持っていたバッグのみを包みだす。いきなりの変化に驚くソラだったのが、それを見た浩人は、まるで全てを悟ったかのようにソラを更に強く握り返し、笑ったのだった。

「大丈夫……、俺が、いるからな」

「浩、人……?!！」

「ソラ、

」

一瞬、浩人が何と言ったのかソラには分からなかった。だがそれが分かったその瞬間には、ソラは「この世界」から姿を消していたのだった。あとに残ったのは、何が起こったのか分からないギルと、全てを悟ったかのような、そして何かを決意した浩人のみが残っていたのである。

この瞬間、時間は一時を差し……文字通り、世界は「崩壊」した。世界を見つめていたその「目」はどこかへと姿を消し、それを画策

したものは不敵な笑みを浮かべ同じように姿を消す。無論、その組織も一緒だった。

しかし、彼が一体どうなったか、それは知る由もない。

これが、全ての始まりである。

F l a r e · s S T O R Y T o b e c o n t i n u e d

Chapter 1 - 4 「フレア編」 正義の炎（後書き）

「昭和臭い香り」を目指そうと奮闘した所見事な一万字越え・・・！
これでマジの、フレア編「一旦」終幕です。そうですマジです。何
と中途半端な！みたくな感じですがこれで良いんです
いよいよ本格的に物語を始めます。ようやくと主人公が登場します。
では、次更新もお楽しみに！

Chapter 2 - 1 「邂逅編」 平凡なセカイ

世界が、震える。

いよいよこの時が来た。どれほど待ちわびたか、この時を。
あの男も「もう終わった」。ならばここからは、我らが動く時だ。

世界征服、と言う我らの野望が動く。震えが止まらないのだ。
これほどまでの嬉しさ。

さあ、始めよう。 世界を「乗っ取る」この作戦を。

ある人物は、震え上がる程に、ずっと待っていたのだ。だからこそ待っていた。フレアの世界が「崩御」するのを。崩れ去るのを。あの少女が、「異界」へと渡るのを……。

「世界」と言う名の均衡も、同時に崩れが始まりだすこの時を、ある人物は待ち焦がれていた。そして、自らの駒を配備して動き出す。

* * *

ここは、仮面ライダーが「存在しない」世界。否、厳密に言うなれば「仮面ライダーは架空の存在でありTV番組である」世界である。そう、日常に満ち溢れ混沌としながらも日常が繰り返される世界。仮面ライダーどころか、他のヒーローも架空の存在であるこの世界には、怪人も、世界征服も、改造人間も……全てが「作り物」であり「架空」。ある一種で見れば、それはまさに「ノンフィクション」とも言える世界なのである。

そんな世界に、彼は住んでいた。後に、「世界を救う」と言う大きな偉業を成し得る彼が。

都立・将稜高等学校。

東京都内でもちよつとした進学校としても有名なその高校は男女共学であり、生徒たちもごく普通の毎日を送っていた。フリーダムな校風が好まれていた為、非常に人気が高い高校でもあったのだが、そこに見事進学を果たしていた彼には打って付けであったのだ。自分の趣味を更により広く、より高く目指す為には。

「AM11:35」

「この範囲はテストにも出るからよく覚えておきなさい。一年生のうちではここは普通にやる問題だからしっかり覚えて点数を取る事」

今は授業中。黒板にこの時間の担当の先生がカリカリと板書をし、殆どの生徒が書くのに必死になる中、彼だけは集中している物が違った。今開いているノートの横に開いているもう一つのノートに何やら必死に書き込んでいたのである。たまたま両利きであった彼はチラリチラリと黒板を見て左手で正規のノートにそれを書き写すなか、右手の方でそれを必死に書き込んでいた。それは、誰もが見た事のある

「これで……こうして……っと、書けた書けた。うん、やっぱ一号はかっけえよなあ」

小さいながらも、そう呟く声は非常に楽しさを含んでいる。黒髪短髪に短く刈つたもみあげ、少々幼さが残るその瞳に少し焼けた色黒気味な肌。元気で熱血、と言う言葉で表してもおかしくないようなそのような様子だった。そんな彼がウキウキとしながら、何かをノートに書いていると・・・後ろから、ポンつと何かが飛んできて彼の頭を直撃した。

「つた！」

「こら！崎元くん！ちゃんと授業に集中しなさい！」

崎元、と呼ばれた彼が恐る恐る振り向くとそこにはチヨークを持つた先生がいつの間にか立っているではないか。どうやら先程投げたのはチヨークであるらしい。後頭部を擦ると先程投げつけられたらしいチヨークの粉の後が残っているではないか。苦笑しながらペコペコ頭を下げると先生は溜息を吐きながら教壇の方へと戻る最中、先生は彼が必死に書いていたノートを見ている。

「あなたねえ……またそんな絵を描いて……、そんな物を描くぐらいたら勉強の方を必死に頑張りなさい！そもそもあなたの成績は」「はいはいはい、どうせ先生にはこれの良さなんて分かりませんよーだ。ちゃんとノートは書いてますし授業も聞いてますから心配しないでくださいね！ほらほら、先生は授業の方に戻ってくださいって」

「……………全く」

先生は呆れながら、彼の元から離れちゃんと教壇の方へと戻って行くのだった。彼は先程まで描いていたノートから手を放して先生が完全にこちらから視線を外したのを確認し、ホッと一息。

そして再びそれを描きだすのに勤しみだすのであるが、後ろからその様子を眺めて溜息を吐く者が一名。完全に呆れを含んだ目線で彼

を見つめている女子である。彼女はおそらく彼と親しい仲か何かなのであろう。そしてもう一人、その女子の席より一つ開けて座っている眼鏡を掛けた男子。彼もその様子を見ていたのだけれども、関係なしとばかりに欠伸をしてから教科書を読みだす。

これが、彼らの日常なのである。

そして先生に注意されながらも必死に何かを描いている人物こそ、その「後に世界を救う人物」であるのだ。彼の名は、崎元瞬。現在、高校一年生。

「PM12:10」

授業が終わった。この日は一年生は諸般の都合により午前帰宅である為、瞬はいそいそと帰宅の準備を進めていた。机の中に隠していたレンタルのDVD袋を鞆に詰め込み、先程必死に書いていたノートも詰め込む。と、そこへ先程欠伸をしながら授業を受けていた男子が近づぐ。

「瞬は相変わらずなんだな、平常点引かれてるぞ？絶対」

「翔真かよ。別に良いじゃねえかよ、俺は俺なりの道を進んでるんだから」

「ま……お前が留年しようが、知った事じゃないけど」

「な！お前さあ、随分と幼馴染に冷たいんだなあ」

「……うるさい」

翔真、と呼ばれた彼は深川翔真と言う。彼は瞬とは幼馴染であるのだが、翔真の方が瞬よりも些か頭のレベルとしては上を行っている。

瞬が体育会系なのだとするれば翔真はまさしく文化会系。

そんな彼と瞬は同じ高校に通っているのだけれども、最近じゃあ翔真は塾へ通い、瞬は家で趣味を楽しむと言う真逆の生活を送っているのだ。

そして、幼馴染、と言う言葉に反応してか後ろからやってくる女子が一人　先程、呆れていた例の女子である。そんな彼女は後ろから瞬の頭をひっぱたく。

「（ポカッ！）」

「たっ！」

「まーったく、少しは翔ちゃんを見習ったら？！瞬、てば年々馬鹿になっていくような気がする」

「ゆ、有香・・・」

「瞬はいつも馬鹿だろ、有香」

「う、うるせえよ翔真！俺だってなあ、努力してるんだからな？！」

「“仮面ライダー観賞”を、でしょ？！」

「ギク」

「ほら今日だってDVD袋持ってきてるくせに」

そう瞬を非難する有香　　櫻居有香も、瞬と翔真の幼馴染である。

瞬と翔真が黒髪であるのに対し、彼女は明るい茶髪のサバサバとした男勝りなタイプなのだけれどもそこは特に気にしてはいけならしい。有香も瞬同様に塾には行っていないがその髪の毛の割にバッチリ勉強をしてくる真面目な生徒なのである。

瞬は鞆を抱えムスリとした顔で有香を睨みつけた。そう、彼女が言った「仮面ライダー観賞」。それが意味瞬の趣味の一つであったのだ。瞬はビツと有香に指さした。

「うっせえ、今日はレンタル返したその足で「RX」を借りてくん

だ！それ以外は至って普通だろどこに文句があるんだよ有香！」

「それが文句ありありなのよ！さっきだって授業中こそそ仮面ライダー描いてたんでしょ」

「おっ、よくぞ聞きました！」

「聞きたくて聞いているんじゃないんですけど?!」

まるで夫婦漫才のようなそのやり取りを見ていて翔真はクスリと笑う。丁度教室にはもう彼ら三人しかいなかったが為に、それがよく聞こえた。眉をしかめて瞬が反応する。

「何だよ翔真」

「別に？有香……馬鹿は馬鹿で放っておいたら良いんじゃないか？」

「けど翔ちゃん、こいつの趣味年々デカくなってるんだよ?!去年なんて確か、映画の完成披露試写会に俳優さんたちが出席するから、ってあたしとの約束すっぱかして」

「あれは悪かった、つってんだろ？でも見逃せねえんだよ！あの「ダブル」と「オーズ」を生で、生でだぞ?!正直平成ライダーの俳優を生で見るだけでも大変なんだぜ？今や女性ファンが多い事でも知られる仮面ライダー！しかも今やイケメン俳優がその主演と来た、チケット取るのなかなか大変だったんだ、俺の苦労も知ってくれよ」

「うるさい！（ポカッ!）」

「たっ!」

「……ホント、いつ見ても飽きないな」

翔真はフツツと笑って瞬と有香がまた夫婦漫才らしきものを始めたのだけれども、瞬がこんなにも仮面ライダーに関して騒いでいる訳。それは無論、彼が仮面ライダーファンであるからなのである。

そもそも16歳である彼が仮面ライダーに慣れ親しみ始めたのは物心付いた時から。彼の亡くなった父親が仮面ライダー好きであった

事がきつかけで、生まれたばかりだった瞬はその時からビデオを見せられたのだと言う。彼が生まれた16年前と言うと、現在は板についている「平成仮面ライダーシリーズ」がまだ始まっていない時期であり、なので彼は仮面ライダー一号や二号を始めとする昭和ライダーが出てくるビデオを見せられていたのであった。彼自身、その当時にどんな反応をしていたのかは覚えていないらしいのだが、母親曰く「酷く夢中に見ていた」との事。それ以降、彼は大きくなればなるほどに父親からビデオやライダー図鑑にフィギュアと買いつけて貰い……、拳句の果てにはショーへと連れて行ってもらったりと、脈々とライダー好きと言う血を濃くしていったのであった。彼が幼馴染である翔真や有香と出会ったのは無論本当に小さい頃なのだけれども、幼少期からライダーを父親から教え込まれていた瞬にとつて翔真や有香は良い遊び相手。その当時、瞬は翔真と共にライダーごっこをしたり三人で一緒にライダーのビデオを見ていたりしていたのだった。年を重ねるにつれ、三人の趣味は三種三様となつていったのだが、彼だけは　瞬だけは、趣味を一切変えるつもりはなかったのだと言う……。ちなみに高校生になる以前から彼は「昭和ライダーシリーズ」制覇を目指しているらしく、既に本編はBlackまで制覇。今現在はその続編である、「Black RX」を見ているのだと言う。

「瞬は昔からのライダーオタク、だからな」

「!!! オタク言うな！俺は仮面ライダー「ファン」だ!!!」

「どつちも一緒だろ」

「何で瞬はそこまでライダーを見る訳？理解出来ない」

「うるせえ！理解されなくても良いですよーだ。あ、こんな時間だ。じゃあな！」

「あつ、ちよ、瞬！待ってよ！」

「……有香、一緒に帰りたいかったのか？」

「べ、別にそんなんじゃないわよ！」

さっさと教室を出て行った瞬の背中を見つめていた有香は翔真に痛い所を突かれ、真っ赤になってそっぽを向いたのだけれども、翔真は凶星だ……とばかりに苦笑を漏らすのだった。

しかし彼ら二人も、瞬も知らない。今日と言う日が、運命の日である事に。

「PM13:00」

将稜高校の、反対側の通り。その通りはあまり滅多に人は通らず、家も空き家が多く寂れているとも言える風貌だった。そこに倒れている人物がいた。

白い煤けたワンピースに煤けた黒く長い髪の毛、首元のコードに手元に持った大きなバッグ。

そう。「フレアがいた世界」から飛ばされてきた少女、ソラがここに倒れていたのだ。一体ここに、どれくらい倒れているのだろうか。

ふいに、鳥が数羽彼女の上空を飛び交い、その鳴き声で彼女の眉がピクリと動く。

「ん……」

ようやくと目を覚ましたらしいソラが顔を見上げると、目の前には仮面ライダーフレア……浩人の姿も、敵組織の幹部の一人の姿も見えないのに驚く。そして、慌ててバッグの所在を確かめると、自分がしっかりと握っている事にホッと一安心。だがしかし、そこに広がる光景は自分にとってはまるで見覚えのない光景だ。途端に、不安が広がっていく。

「どうしよう……うう、どう？」

とりあえず立ち上がったソラはバグを大事に抱えてそこを出る事に。が、しかし……自分が元いた地域よりもそこはずっとアスファルトが多く、おまけに休めるような陰も見受けられなければ倒れていた場所が場所だけに人が全くいない。

ただでさえソラは、浩人に守られてきた。いつも一緒にいた彼がない、と言うその感覚

少し前までなら「一人」と言う現状に特に問題はなかったにも関わらず、あれほどまでに自分の手をしっかりと握っていてくれた強い存在、温かい存在でもあった浩人がいない……。

「浩、人……どうしよう、私……」

本当に、寂しい。それに彼女は、どうしていきなりここへ飛ばされたのかもよく分からないのだ。いきなりだった。実験施設から持ち出したこの七つの宝玉 「虹の宝玉」。正直に言うと、彼女にはこの玉の性能がまるで分からないのである。どうやってここに飛ばされたのかも、分からない。

とりあえずまずはこの世界での行動を起こそうと思ったソラだったが、何だか自分一人では心細い上に不安だ。それにもかいたらルシファーの追つてが来るかもしれない。誰か、匿ってもらう人も見つけなければならぬのだが、果たしてこの世界がどこの世界かも分からない今……誰か他人に説明をしたところで理解してくれる人なんて、現れるのだろうか……？

泣きそうになるソラだったが、こんな所で泣いていたって、浩人は来ないのかもしれない。否、……泣いているのを気付いてくれないだろう。

「とりあえず……人を、探さない」と

そう言つてソラは、その倒れていた場所から歩き出す。勿論、しっかりとバッグを握りしめて。

彼女が、瞬と出会うのはまだ先のようにだ……。

* * *

とりあえず、彼女が無事に「この世界」に渡つてくれて何よりだ……

誰かが、そう呟いた。暗がりにいるその人物は、手に大きな水晶玉を持つている。が、すぐにそれを直すと暗がりの方より空を見上げた。

雲一つない晴天の空。あまりにも、何もなさすぎる空にその人物はちよつとした危機感を覚える。

特に空が予知だとかそう言うのを兼ね備えているとかではない。

そう、あの時も、そうだったのだ。そもそも、彼女が、ソラがあの玉ごとこの世界にやって来れたのも何か引つかかっていたのである。否、別に「あの能力」をこの人物が疑っていた訳ではない。

ただ、本当に引つかかりがあつたのだ。……ルシファーが彼女と浩人、仮面ライダーフレアを捕えた時、何故幹部であるチカは玉を奪わなかったのだろうか。昏倒させていたのであれば、奪う事など単純だったはずだ。なのに、奪わなかった。その為に大首領から咎められたのだ。

否、もしかすると……どこかに大首領の意図でもあつたのではないか、とその人物は考えた。あの首領はどこまで考えているのか、彼にも一切分からなかった。もしか、幹部が知らない大首領の思惑

でも動いていたのではなからうか……。そう考えると、彼は震える。そうして、透き通った青いその空を見て、再び呟く。

出会いを、早く迎えばいいのだけれど……世界崩落のアレは、所詮カウントダウンに過ぎない。それならば、早く、彼を「目覚めさせなければ」ならないと。

また、意味深な事を呟いた。そしてその人物は暗がりの方へと姿を消す……。

本当に奇妙な人物だ。もしかしたら、フレアの世界でソラのバッグに例のベルトを入れた、あの少年なのかもしれないが、今はそれが分かる事はないであろう。

物語は、「役者」の知らぬ所で歯車を回し、段々と動き始める。その象徴とあるべき、否、その物語の「役者」の一端である彼も……この世界へと、渡って来ていた。

首からマゼンダカラーのトイカメラをぶら下げた青年。彼は頭をわしゃわしゃと掻いて目の前の状況を把握しようとしているのではない。端正なその顔の眉間に皺が入る。

「全く……とんでもない所に来ちまったな……」

そう言った彼は、首にぶら下げたカメラのシャッターを、切るのだった。

この世界の住人である少年・崎元瞬

不本意にも、異世界から渡って来てしまった少女・ソラ

そして、このカメラを持った奇妙な青年

出会いこそが物語を進める。彼らの運命の邂逅まで、あ
と少し……………。

Chapter 2 - 1 「邂逅編」 平凡なセカイ（後書き）

いよいよ主人公登場！と思ったらまだライダーじゃない・・・と言
う展開ですみません（苦笑） でも、彼はこの巻の章でライダーへ
と変身する能力を身に着けます。そして、ソラがやってきたり

例の「通りすがり」（笑）

あやつが本格的に動くのも、次かな？しかし次です、次で運命の邂
逅を迎える事になります！物語もようやく板についてきたな・・・

・
・

Chapter 2 - 2 「邂逅編」 破壊者とのデアイ

その世界には、他にも降り立つ者がいた。

そいつらは闇夜に隠れて、息をひそめていたのだ。自分たちの目標ターゲットに見つからぬように。ニヤリと弓なりに口の形を変えたソイツは、目標を狙い定める為に策を練っていた。

しかし、それと同時に恐れてもいたのだ。世界を救う存在……仮面ライダーの出現を。

この世界には、「仮面ライダー」も何も存在しない。この世界では、よく見知っているその脅威が「TVのヒーロー」であると言っただが……それでも、脅威は脅威なのである。

ならば、そいつらの種となるような、存在は滅さなければならぬ、とソイツは思っていた。そう、どの世界にも、「仮面ライダーの素質」を持った若者はいる。

ソイツは齒軋りをして、他の世界で散って行った悪の組織や存在を思い返す。あの厄介な……“仮面ライダー”、と言う存在を生み出したシヨツカーは、何と愚かな事をしたのだらうと。

シヨツカーが天才青年科学者であった本郷猛を拉致し、改造手術なんて施さなければ……さっさと脳手術をして、脱走なんてされなければ……このような苦勞をしなくとも済んだのだ、と。

「随分と、お悩みだな？」

見慣れた仮面が、闇の奥から見える。ルシファアの、大

首領だ。

ソイツは弓なりになった口からほくそ笑むような声を零すと、天を見上げて鼻で笑った。

「くく・・・っ、随分と余裕そうだなあ？『フレア』はどうなった？」

「嗚呼。消えたよ」

「くくっ、そうか。で？お前の部下は今頃・・・あの少女と玉を？」

「まあ、そうだな。それと、この世界にいる『仮面ラ

イダーの素質を持った若者』を探している。厄介だからな。これ以上、仮面ライダーが増えるのは」

「確かになあ……でもお前のような力を持った者が、ライダー共を屈服させられない筈、ないだろ？現に

「いや、良い。と
ここで、計画の方は順調か？」

「ああ。くつくつく……気になるならお前も、来れば良い」

「いや？……まだ妾は、行くべきではない
くつくつく」

「・・・」

闇の中で行われていた、大首領とソイツの話はそこで切られた。そして、大首領は闇の中から差している光を見つめる。それは・・・紛れもなく現代世界へと繋がっている光だったのだ。仮面の中で、更に口を弓なりにした大首領は、そこから見える風景を監視し始める。そこから見えていたのは、瞬だった。

「ありがとうございましたーっ」

店員の軽快な挨拶と共に店から飛び出したのは、瞬。学校から即座に飛び出した瞬は急いでレンタル屋へと向かうと、借りていたDVDを返却しました新しく借りてきたのだった。

「良かった、RXのレンタルあと一本！て所で。俺ってラッキーだな」

まだ昼食すら取っていないかった瞬は腹の減りを覚えると、目当ての物を無事に借りる事の出来た高揚感と共に早々と帰路に着く。今日は母親が留守であるが為に昼食は自分で用意をしなければならぬ。丁度お金もまだあると言う事に気付いた瞬はその足でコンビニへと向かう事にする。

瞬の学校の制服はブレザーであるがそこまで珍しくはない。今の時間、どうやら周囲を見渡しても瞬ぐらいしかその辺りをうろついている高校生はいないが、別に気にする事はないだろう、と彼は思いコンビニを探し始めた。その矢先だった。

うつすらと、視線を感じたのである。

ふいにそれに気づいた瞬が急いで振り向くけども、そこには誰もいない。

首を傾げ周囲を見渡すも、ここを通るのは他の社会人だったり……誰も瞬を見る気など、ない。じゃあいったい誰が？と考えたとしても 瞬の腹の音がそれを遮った。

「やべえ、やっぱり腹減る……早いとこコンビニへ行こう」

特に、その感じた視線を気にするまでもなく瞬はその場を去ったの

だけれども……遠く離れた電信柱からそんな瞬の姿を覗いていた者が一人。黒いサングラスをかけたその人物はしばらく瞬の背中を観察していたのだけれども、無線機でどこかへ連絡をし始める。

そして……それが終わるとまるで陽炎のように、その場から姿を消したのだった。

大首領とも、何か関係があるとも思えるのだが今の瞬にはそれを見極める事は出来ない。それを知りえないからである。だがいずれ分かる事になるのであろう。

さて、その場からサングラスの男が姿を消した後、またその場に別の人物が現れた。全体的に霧がかかったかのようなその人物は、じいっと瞬の背中を見つめた後に　　ほお、と息を吐くとその場からすぐに走り出したのだが……………

まるで、他人よりも早く、但し一秒と言う僅かな時間の中で進んでいるかのようにも思えるその人物は、走り去りながら、瞬の横顔を見つめていた。

「　　おばあちゃんは言っていた」

そう呟きながら、走りながら、ピンと人差し指を天高く上げたその人物。

赤い装甲、青色の目で瞬を見つめるその人物は、更に呟いた。

「　　自分が好きだと信じる物を極めれば極める程、本当に己がやりたい事が視得て来る物だ。」……果たして、本当に『この高校生』にそれだけの技量があるのだろうか……？」

そんな事を呟いたその人物だが、その存在を瞬に悟られていなかった。何故ならば、彼は瞬が今自由に動いている時間よりも、「更に早い時間」を進んでいるのだから。だから、気付かれなくても仕方

がないのである。しかし、何故この人物が今、「存在しない筈のこの時間」にいるのだろうか。

一体何故か、その理由は今は全く分からないのだが
“彼”が動き始めたと言う事も、また歯車が動き出した、証拠であるの
やもしれない。

そして、その人物は……先程のサングラスの男同様にどこかへと姿を消したのだった。

さて、この状況……どうやって打破するか……

正直、その青年は非常に目の前の状況に困惑していた。首から下げているトイカメラをパシャリ、と一度切ると溜息を吐いて眉間に皺を寄せる。

目の前には数人の女。数人の子供。合わせると十数人の女子供……青年も混じっているようにも見えるが、とにかくそれだけの人数に集られて、まるで身動きが取れなくなっていた。

何だかその眼の色を観察していると、妙にキラキラと輝いている物がある。一体全体なんなんだ、と混乱の中にあるものの考えを手繰り寄せて眉を寄せた。

もしか、ファン？俺に？悪い気はしないが……そうなる
と夏ミカンがうるさいな。あと、女は分かる。何で子供までいる？
子供は扱い慣れてないが……

そんな事を考えながらカメラを再び切ると、青年の一番目の前にいた子供が興奮しながら青年の服の袖を掴んできた。「げっ」と言う

と、子供はそのキラキラした目で青年を見つめる。小学生ぐらいにも見えるその子供は友達と一緒にいるが、反応がどうも違っていた。

「おにいちゃん！おにいちゃん、“ディケイド”なんですよ？！はやくへんしんしてよー！」

「はかいしゃがこんなところになんのようなんだー！おれがたおしてやるー！」

「やめるよー！ディケイドは“仮面ライダー”なんだからせいぎのみかただろー？！」

「うるせー！はかいしゃははかいしゃなんだよー！」

ムキー！と言いながら何とも可愛らしい子供のやり取りを繰り広げているではないか。

しかし、青年にとつちやそれはくだらないやり取りにしか見えない、と言うか子供自体あまり好きでもなかったが為にそれを見ているとどうにも調子が狂う。

大きく溜息を吐くと、カメラを再び切ってから青年を批判する子供の頬に指を突いた。

「わっ！」

「そうだ、俺は破壊者だ小学生。だがな、お前に倒せないだろ普通。俺はお前より大人」

「あ、あのっ！」

「んっ？」

子供の相手をしていると、その後ろに控えていた女性……大方女子高生か女子大生ぐらいだろうか。

真面目で清楚な華の女子学生、とはまるで正反対な派手なケバケバしいメイクをしたその女は、まるで好きな人を見るかのような目で

青年に声を掛けてきた。

・・・正直、タイプでも何でもないらしい。青年はこれみよがしとばかりに眉を顰める。

「I上M大”さんですよね?!」

「.....は?」

「あの、前からずっとファンだったんです!一緒に写真撮ってくださいませんか?」

「はっ、あ?!ちよ、待った」

「キヤー!まーくんだまーくん!」

「まーくんこつち向いて〜!」

「待った!お前等、誰と間違えてるんだ?!」

何だか意味が分からない。青年が、今まで人に集れる事はあつた。

まあ、大体男ばかりにであるがとにかく集られる事は多かつた。女にも一度この青年は集られた事はあるのだが、子供やこんなケバケバしい女に集られるのは初めての事だったのである。

しかも、何か人違いをされているらしい.....とこの青年は思い頭を抱える。訂正しようにもその歓喜の悲鳴にかき消され届かないではないか。子供は相変わらず騒いでいるがどこかポカーンとしているようにも思え、青年はすっかりその渦から離れられなくなってしまう。

そして、何かが切れた青年はむきになつて自分の名前を叫ぶ。

「おい!勘違いしているぞお前等!俺は“門矢士”だ!さっきその餓鬼が言ってたろ!俺は破壊者であつてお前等の知っているようなアイドルなんかじゃ」

「キヤー!まーくんカツコいい〜!」

「まーくんこつち〜!まーくんサイン下さい!」

「だから俺は井上なんちゃらとは違う!離せ!」

完全に辺りの女子は勘違いしているので、……彼、門矢士は青筋を立てる。

世界の破壊者……通りすがりの仮面ライダーこと、仮面ライダーデイクライド。マゼンダ色がメインカラーでまるで「バーコード」ともいえるような変わった風貌のライダーで、平成仮面ライダー十代目とも言われている。そんなデイクライドに変身するのが、彼、士なのである。

ところで、何故彼が「I上M大」と言う人物に間違えられているのか……。士自身はさっぱり分らないらしいが、それにはちゃんとした訳がある。実は今、士がいる世界は瞬たちがいる世界であり、つまるところ仮面ライダーがTV番組の世界。この世界では要するに、門矢士と言う人物はフィクションの存在であり、子供たちからすればカッコいい仮面ライダーデイクライドであるが女性からすればそんな門矢士を「演じていた」俳優・I上M大にしか、見えないのだろう。否、見えなくて仕方ないが。

I上氏が演じていたのだから、士とI上氏が顔も声も一緒なのは当たり前。だから……そのような存在がこんな街中……繁華街に現れたとなると、ある意味I上氏の女性ファンにとっては嬉しい悲鳴と言っても過言ではなかったのだ……。

事情を知らないとは言え、I上氏だと思われてしまった士は混乱の最中で自分が「門矢士」であると認識してもらおうと自分が持つカメラを一生懸命かざしたのだが……。誰も気付いてくれなかった。さっきから黄色い悲鳴ばかりで一向に周囲がまるで離してくれない。これでは、ゆっくりとこの世界が何なのかを探索できないではないか、と士は内心憤慨した。

「くそつ、おい、離れる！俺は門矢士だ！そんな名前じゃないって何度言えば分かるんだ！」

「きゃー！男前ー！」

「生で見たらホント綺麗なのねー」
「まーくん！まーくんの顔が見たい！！」
「だーかーらー！！・・・くそっ、夏ミカンもユウスケも一体どこに
いるんだ・・・?!」

そういえば、肝心の旅の同行者である光夏海、もとい仮面ライダー
キバラーや「クウガの世界」と言うリイマジネーションの世界に住
んでいた小野寺ユウスケ、もとい「もう一人の」仮面ライダークウ
ガの姿が見えない。彼ら三人はいつも旅をするときは一緒であるは
ずなのだ。

それが、ここには土一人だけしかない。一体、どういう事なのだ
ろうか・・・？
そんな疑問を考えさせられる暇もないらしい土は、更に飲まれてい
った・・・。

「PM13:45」

一方、瞬は帰路へと急いでいた。瞬の家はそのこの繁華街を潜り抜け
た先にあるのだから、帰りにそこを通るのは当たり前だったのだ。
その繁華街はそこそこ繁盛しているし、いつも夕方になって帰宅す
る時もそこには誰かしら絶対にいるのだ。
今の時間帯は昼間だ。だから人はそこそかなり多い方の筈・・・
なのだけれど、その時間は妙におかしかった。女性が多いのである。
いつもならば会社に勤務しているようなOL風の女性から、瞬と同
い年くらいの女子高生、または女子大生まで。おまけに幼稚園か保
育園に行っていない子供まで見えている。いつもこの時間だと、人

でござった返している事などない筈。

「なんだ・・・？何かイベントでもあったっけ？」

瞬がそう呟いていると、隣を女子高生らしき女性が走り去る目前に、こんな事を口走った。

「I上さん?! I上さんがいるの?! まーくんの顔見てこなくちゃ
!..!」

.....その名前に、そのあだ名に瞬が動かない筈がなかった。
まーくん。そのようなあだ名を持つている俳優など、瞬の記憶には
たった一人しか浮かばない。否、その人物の名前しか出てこなかつ
た。おまけに名字も言っていたのだから、もう断然間違いがないだ
ろう。瞬は慌てて携帯を取ってイベント情報を調べ始める。

「I上・・・I上M大さんがこの近くに居るのかよ?! ちよ、今日
なんかあつたっけ? 待て待て待て、俺心の準備が出来てねえってI
上さんだろ?! 土だろ?! えええ、ちよ、やばいって」

ライダーオタクの瞬が、あの番組の存在を知らない筈がない。

「仮面ライダーディケイド」。平成ライダー十年目記念、尚且つ半
年しか放映期間がなく映画で完結と言う一風変わった作風を醸し出
していた、「通りすがりの仮面ライダー」。瞬もその番組をリアル
タイムで観ていたが為に勿論その「破壊者」の存在を知っている。
主人公・門矢士を演じた俳優・・・I上氏の事も勿論熟知していた。
だから、イベント情報とかはまるで女性ファンの如くにチェックし
ていたのである(それはI上氏に限られていないが)。

急いでI上氏のブログをチェックしたのだけれど.....妙な事に気付
いて、瞬は眉をしかめた。

「今日・・・何もねえな・・・あれ？じゃあプラベか？いやいやいや、そんな訳ないだろ。ここ結構小規模な方だし。とゆか有名とかじゃねえしな・・・じゃあ、なんでだ？」

工上氏のブログには、今・・・瞬がいる繁華街に仕事で行くような事は示唆されていない。それどころか、瞬が言った通りこの繁華街は有名なんかじゃない。それに地元出身の芸能人等は特にいないはずだからある意味、芸能界とは無縁な土地にも等しいのだ。

それが、一体どういう事なんだろうか・・・？

すると、目前より人だかりが現れる。その群れは遥かに女性ばかりだ。何やら黄色い悲鳴を上げながら、サインがどうたら、写真がどうたら・・・と女性たちが言っている。やはり工上さんがいるのは間違いないのか、と瞬が思っているとその人だかりの中心らしき所から、声が聞こえた。

その声を聞くと　それは、確かに聞き覚えのある声だったのだが、様子がおかしい。

「だから、離せ！人違いだと何度言ったら分かるんだ！俺は井上なんちゃらじゃない！！」

確かに工上さんの声だ。でも、何か変だな・・・？

瞬はそう思い、その人だけに恐る恐る近づき、その中心部分を見ている事にしたのだが女性がとにかく多く、揉みくちやにされそうになる。それでも瞬は何とか中心部分を覗いてみようとした。

そして・・・何とかその中心部分を見ようとした、時だった。すぐに目に入ったのは、どこかで見たようなマゼンダ色のトイカメラ。それを首から下げているその青年は顔と声が「工上氏」であるのだが今は眉間に皺が寄り、とにかく退く事を要求している。

瞬は、そのトイカメラを見た瞬間に・・・もしや、と言う考えに辿りつき、その考えが本当かどうかを確かめる為に青年に聞こえるように大声で尋ねた。そう、そうとしか考えられなかったのである。

「あ、あの！」

「ん？何だ高校生！俺は今、それどころじゃねえぞ？今は取り込み中だ！あつ、だからこら俺は」

大声で聞いたら青年のガサツそうな声が聞こえてきた。どうやら瞬の音がちゃんと聞こえた模様。そして、グツと唾を飲み込むと更に聞いた。無論、確信と思しき質問を。

「門矢士さん

士さんですよね？！」

「……………！」

その名前を出した瞬間、青年・・・士はハッと顔色を変えて、瞬の顔をまじまじと見つめた。

瞬はその顔を見て、I上氏　もとい士なんだと改めてはつきりする。井上氏ならまず、ファン（と重しき女性）を嫌悪になど思わない。それが士ならどうだろう。明らかに嫌悪の色を浮かべている上に、常にカメラを首からぶら下げている・・・。後者だけですぐに判断出来るのだが。

些か怪訝な表情を浮かべた士は人だかりを掻き分けて、瞬へと近づく。

「高校生、俺の事・・・ちゃんと分かるのか？」

「分かります、分かりますよ！首から下げたそのトイカメラが何よりの証拠です！」

「このカメラの事も知ってるのか？じゃあ・・・俺が何なのかぐらいも」

「分かります」
「・・・」

瞬のその強いまなざしを見つめて、土は一瞬面食らったかのような表情をすると、まさに土らしい、不敵な笑みを瞬へと向けた。そして、わしゃわしゃと彼の頭を撫でる。

「わっ!」

「ほお、俺の事がちゃんと分かる奴が見つかるなんてラッキーだな」

「ちよ、土さん・・・。ところで、何でこんなに囲まれてるんです?」

「そんな事、寧ろ俺が聞きたいんだが?!このままじゃ身動きが取れないどころかこの世界の探索すら出来ない!何とかしろ高校生!」

「ちよ、そんな無茶ぶりすぎますって!」

瞬は土に何とかしろとせがまれ人ごみの中で必死に対策を考える。

こういった女性は、一人の芸能人だけを追っかけている訳と限らない・・・。それは自分の幼馴染に全く該当しているのだけでも、ひよつとしたら使えるのかもしれない。それに瞬は、土がこんなに女性に囲まれてしまっている理由が、彼が「仮面ライダー」であるから」と言う理由ではないのかもしれない、と単刀直入に考えたのである。

だから、すう・・・と息を吸い込んだ後に、瞬はありったけの声で、指を土たちが歩いて来た方向の反対側へと指してから叫んだのであった。

「あーーーーっ!」

「?!」

「あつちにーーーー、S藤Tさんがいますよおおおおっ!早くしないで行っちゃいますよ!」

「えっ！」

「きゃああ、Tくん?! Tくんがいるの?!」

瞬が、現在ブレイク中の俳優であるS藤氏の名前を出す案の定反応した。そして、瞬が「あっち! あっち!」と指差す方向へと段々女性たちが流れていくではないか。

士がそれで茫然としていると、瞬がその右腕を掴み女性たちが流れて行っている方向とまるで正反対の方向・・・瞬にとっては自宅への方角へと士を引っ張り始める。

「お、おい高校生!」

「逃げますよ! あの手の嘘はバレやすいんですから!」

「わ、分かった」

瞬がどうやら自分を助けようとしている、と言う事を理解した士は仕方なく瞬に付いて行く事にした。正直、同行者である夏海とユウスケの姿が見えない以上、連絡を取って合流しなければならぬと思っていたのだが、そんな余裕もない上に今は俳優に間違えられてしまうような状況。

こんな状況下から救おうとしている瞬はどうやら敵ではないらしい、とも認識できる。

しかし、この世界には疑問符が一杯である。何故…小学生のような子供が自分を「デイケイド」だと認識していたのか、何故…女性に俳優と間違われてしまったのか、何故…目の前の高校生はちゃんと自分を「門矢士」と呼んだのか、と言う事。

・・・正直、今その事を考えていても埒が明かないと判断した士はこの騒ぎがない場所へと行った後に目の前の高校生…瞬を問い詰める事にしたのだった。

だが、瞬も・・・流石の士も知らない。

この出逢いこそ、定められた「運命」である事を

。

・

Chapter 2 - 2 「邂逅編」 破壊者とのデアイ（後書き）

久々の更新となってしまうって大変申し訳ございません・・・m（
|）m

さて、今回の話ではつきりと出しました。

とまあ・・・前回の更新で触れたので分かっているだろうですけども
（笑）

「門矢士」||「仮面ライダーディケイド」

彼の存在は平成ライダー史上最も複雑であり、その扱いも厄介となる
るやも得ない存在であるんですが、ここで敢えて出しました。

正直、この彼自体何話かぐらいしかいないんですけどね・・・（苦
笑）

さて、あとは・・・まさかの俳優発言（笑）本当なら名前をそのま
ま打ちたいのですが、もやはり著作権やら肖像権とかはこついつた
二次創作でも大切になってくるので、敢えてローマ字込で（苦笑）
すぐ分かりますでしょうけど

あと、伏線！まさかの「天の道を往くライダー」（笑）

さ、彼が本格的に絡んでくるにはまだ時間もありませんが彼自身は動
いているんだと認識しておいてくださいませ・・・m（|）m

さ、次回更新でヒロイン再登場です（笑）

Chapter 2 - 3 「邂逅編」 運命のカイコウ

「PM 13:45」

繁華街が土の存在により大変な騒ぎとなっているその頃。裏路を歩いていたソラも……今、非常に厄介な事に巻き込まれてしまっていた。現在の彼女のその姿はまさに現実で言う乞食のような姿であるのだけでも、それでも可愛い顔をしていると、寄りつく存在はいるようだ。

「えっと、あの……」

「嬢ちゃん随分と綺麗な顔してるのに、ボロツちいねえ」

「うっへっへ、こんな可愛い子見たのは初めてっすよ！」

「どうだい嬢ちゃん、うちで働かない？」

「え、あの、その」

「今なら無料で職に就かせてあげるよ？ふふふ」

ソラは裏路を歩いていた時に妙な男二人組に絡まれてしまい、逃げまいとするためにその奥へと追い詰められ攻められてしまっていたのである。正直、この二人は明らかに表の仕事で働いているような風貌ではなく、黒服にサングラスと裏稼業の何かで働いている男であるのだろう。しかも、ソラのようにかわいいた女の子に食いつくと言う事は間違いなくまともな目で彼女を見ていない。キャバ嬢やホステス以上に危ない仕事に勧誘するような者たちであろう。男の鼻息も荒い。

ソラは心底ビクビクしながら、何とかしてここから逃げたいと考えていた。今、自分はこのような男たちに絡まれる暇など本当にない筈。浩人が今、側にいない以上何も出来ないのは事実であるのだが、信頼できるような存在を見つければならなかった。

「あ、あの・・・私」

「うつふぶん、そこまで遠慮しないでいいんだよ？」

「ひひひ、どうにも引き気味みたいっすから一度連れて行っては如何です？」

ソラの顔色がサツと更に不安なものへと変わった。良く見ればこの男は二人ともがたいが良く・・・女一人、それも然程力がない女なんて簡単に捕まえられそうな風貌ではないか。泣きそうな表情になるソラを見て、男の一人が更に気持ち悪いような笑みを浮かべる。

「泣きそうな顔もかわいいねえ」

「やっぱりこういう子が一番儲けになるからね」

「あ、あの私、そんな」

「さあさ、嬢ちゃんこちらだよ、連れて行こう」

「ちょ、そんなっ！あの、私！」

今更言うが関の山、ソラはその手に持ったバッグごと抱えられて、その路地から連れ行かれそうになった。その刹那だった。ソラを抱えた男の目の前にいたもう一人の男が、突然動きを止めたのだ。先程とは打って変わった口調で、突然言い始める。
否、目の前に立ちふさがった人物に・・・そう言ったのだ。

「おい坊主、ちょっと通してくんない？こっちは急いでんだけど」

どうやら通せんぼでもされている模様だ。ソラは、一体誰なんだろうとその言葉が向けられた人物の方を観てみると・・・そこには、見た事もない二人の青年が立っていたのである。

一人は、ブレザーの制服を着ている生真面目そうな黒髪の青年、否、高校生ぐらいだろう。もう一人はその高校生よりも明らかに年上で

ピンク色のフリースの上から黒い上着に黒いズボン、おまけに首からカメラをぶら下げた茶髪の、いまどきのような青年である。高校生は、凄く険しい顔をして、告げた。

「おい、あんたらが抱えてるその彼女、放してやれよ」

「何だ坊主？随分とえらそうだなあ」

「明らかに嫌がってるのに無理やり連れて行こうだなんて、裏稼業も随分とやる事が派手なんだね」
「なっ！！！」

高校生はハッキリとした口調で、間違いなく裏稼業で働いているであろう男二人の胸をえぐるような言葉を吐き捨てた。それで当然男たちが反応しない訳がなく

「こんの糞餓鬼・・・！なめるんじゃねえ！」

「！！！」

ソラは高校生が、殴られる！とばかりに思い、目を逸らしたのだけれど・・・高校生はその拳を左手で受け流すと右の拳で男の脇腹を殴った。「ぐはっ！」と情けない声で胃液を吐いた男は更に殴りにかかるも今度は右ひざでその腕を蹴りあげられて、高校生は左足を軸にして回転すると、鋭い蹴りをその腹へと加えていたのである。彼の後ろに控えていた青年はちよつと面食らったかのような顔になり、その物音に気付いて顔を上げたソラは口元に手を当てる程に驚いていた。腹を蹴られた男がその場に蹲ると、ギツと高校生はソラを抱き上げているもう一人の男を睨みつける。

「な・・・！」

「ライダーキック・・・なんちって」

「?!！」

“ライダーキック”と言う単語を聞いたソラはサツとその顔色を変えた。

この世界が未だどのようなのかさっぱりと分からないソラだったが、今のやり取りで確信する。この世界にも、「仮面ライダー」がいるのかもしれない、と。しかし、目の前にいるのは明らかに若い、若すぎるのだ。そんな彼が本当にライダーの力なんて持っているのか？すぐにソラの脳内は疑問へと彩られるも、正直それをちゃんと話すか話すまいかは判断しかねるが。

さて、ソラを抱き上げた男は後ろからソラを抱いたままそくさと逃げようとした、のだが

「おいおい」

「!!!」

「人さらいをするつもりか？お前は。あの高校生に酷い目に遭いたくなきゃあ・・・その女、置いてった方が得策だぞ？」

後ろからいつの間にか回り込んでいた青年が、その男の肩に腕を置きながらそう言っていたのである。面倒そうに頭をポリポリ掻いているが、その眼は明らかに「置いて行け」と言う色が現れている。そして高校生の方を見れば、相変わらず睨み据えているではないか。

それを見て一気に怖くなった男は、ソラをその場に降ろしてから蹲っている男を連れて血相を変えながら「し、失礼しましたあああああああつ!!!」と言いながら逃げていくのであった。

「おととい来やがれ！」

「全く、俺を連れて逃げると思いきや今度は人助け。ライダーの俺よりよっぽどライダーらしい事してるじゃねえか、お前」

「だって、困ってる人を見たら放っておけないじゃないですか。と

ゆか、土さんだつて殴る気満々だつたくせに。一発殴つてやっても良いと思つたんですけど」

「煩い。俺はあう言う奴に手を出すほど軟じゃないんでね」

ソラは何が何だか分かつていないのだけれど、この会話によりある確証を持つ。この二人のうちの片方、カメラを持った方の青年が「ライダー」と自分自身を言ったのだ。つまり

この凄い腕っぷしを持った高校生はともかくとして、青年の方は仮面ライダーと思つても、間違いないのかもしれない、と。しかし少し気になる事が。「逃げる」とはどういう事だろう。

「あ、あの……」

「ん？あ、君、大丈夫か？怪我とかしてないか？」

「え、あ、はい、大丈夫です」

「そっか、良かった」

まずは二人に声を掛けてみよう、と声を掛けてみると高校生の方が微笑を浮かべながらソラを心配してきた。特に怪我はしていないので大丈夫と答えるとホッとした顔つきになる。一方の青年はそんなやり取りを興味ないような感じで見つめているのだけれども……ソラは、まず気になった事を二人に聞いてみる事にした。まずはライダーがどうたらと言う前に聞くべき事項であるのは間違いないだろう。

「えっと……逃げる、って」

「ああ、実は、この人がちょっと人違いされちゃって、それで逃げたんだ」

「人違い……？」

「おい、無関係な奴に俺の事話さなくても良いだろうが」

「聞いてきてるんだから素直に答えてるだけですよ俺は。土さん……」

・無愛想なのは相変わらずみたいですな、性格とかもまるで一緒

「あ、あの・・・」

「ったく、お前・・・俺の名前や俺がライダーである事ばかりか、俺の事をまるで知り尽くしたような口調、おかしいぞお前」

「別に俺にとつちゃあおかしくないんですけど・・・」

士さん、と高校生に呼ばれている青年は不機嫌そうに高校生の肩を掴んでいる。その口ぶりや名前を言っていない所から、二人は知り合って間もないのだろう。しかも青年は、自分がライダーであるとお構いなしに、ソラと言う見知ったばかりの存在の目の前で口走っているではないか。

しかも何だろう、青年は明らかに喧嘩腰である気もしなくはない。高校生は特に機嫌は悪くないのだけれども、青年はこれでもかと言うつらいに眉間に皺を寄せている。誰かに人違いされたこの青年を、この高校生が助けたのは分かった。だがそれならば、もう少し感謝していてもおかしくないのでは・・・？とソラは思った。ふいに、また声を掛けようとした、その時だった。

「あつ、いた！」

「「！！！」」

「？」

「キヤー！エ上さーん！！」

「やっべ、もう追ってきた！！」

「おいどうするんだ？！こっからじゃあ隠れる場所もないんだぞお前」

「だから！あの手の嘘はすぐバレるって言ったじゃないですか！！」

ソラは目の前で口論する二人を尻目に、二人が逃げてきた原因の理由らしい群衆を見つめていると、何だか見慣れぬような化粧をしたような女性が、大量に走って来ていたのである。ソラはギョツとし

て後ろへ引くと目の前の高校生がソラの手と青年の手を掴む。

「えっ?!」

「ちよ、おい、この女も一緒なのかよ!」

「とにかく逃げます!俺ん家近いし、このまんまじゃあ彼女も巻き込まれる!!行きます!!」

「きゃあっ?!」

ソラは高校生に引つ張られるがまま、走る羽目となってしまった。青年も渋々走っているのだけれども、ソラは付いて行くのが必死であつた。今はとにかく逃げるしかないらしい。

ふいに、高校生の横顔を見つめてみると、高校生は嘘とかそう言う事を全然ついていないかのような、本当に必死な顔で走っているではないか。少なからず、この高校生の事は信頼して良いのかもされない。この青年が先程から「ライダー」と連呼しているのも聞かなければならぬ。

ともあれ、ソラは内心でこの二人にしばらく付いて行こうと、決めたのだつた。

瞬は今の状況を必死に打破しようと考えていた。

俳優・I上氏と間違えられてしまった、何故かこの世界にいる「門矢士」を連れて逃げてきたのはいいものの、すぐ近くの裏路で悪い奴(瞬談)に絡まれてしまった乞食のような少女を助けてしまった。否、見捨てようとは考えてなかった。どの道、瞬は士に会っても会っていないなくても助けただろう。

だがそこまでは良かった。もたついている間に女性の群集がやって

来てしまったのである。そうこうして二人を連れ逃がっている瞬なのだけれども、正直体力もあまり持たないかもしれない、と瞬はしみじみ思う。こう言う時の、好きな人が関わってくる時の女性はあ意味恐ろしいような体力を發揮する。

「おい！お前ん家本当に近くなんだろっな？！」

そう左隣を走っている士は声を上げて叫ぶ。瞬はハアと溜息を吐きながら士に答えを返した。

「あの、もう少しです！」

「ったく、これじゃあ追いつかれるぞ！！もっと早く走れ！」

「俺はこれで精一杯です！！」

「じゃあこの女を置いていけば良いだろ！」

何て事を言うのだろうか。正直、士がここにいる理由は漠然としながTVで観ていた士と同様なようなので少々安心する。この士と言う人物はあまり周囲に気配りを掛けるような人物ではなかった。だから見知らぬこの少女に冷たい言葉を投げかけるのも当然なのである。

それを聞いていた少女は少し驚愕な顔色を浮かべながら泣きそうなのが分かる。瞬はむっとして士に言いかえた。正直、ここ数年のライダーの中で一番冷たいな・・・と瞬は改めて実感する。

「あのですね・・・こんなところに彼女一人を置いて行ける訳がないでしょうが？！」

「そこまで慈悲深いのかお前は」

「人としてそれは許せないですよ！この子も助けて何が悪いんです？！」

「じゃあ早く何とかしろ！！」

士は怒声を瞬に浴びせるもののかく逃げるしかないと思いきり続ける。瞬の必死なその声を聴いた少女ははっとしたかのように顔色を変えた。もしや、まるで考えていないとでも思われていたのだろうか。それはそれでちよつとシヨツクなだけけれども、この少女を放っておけないのも事実。

恰好も乞食のようだしまるでボロボロ、しかも手には何か大事そうに抱えている。まるでこの世界を存じ上げないと言う風で悪い奴に襲われていたのだ。瞬はライダー好きではあるがそこまでライダーを意識していない。困ってる人を助ける、それこそ人の摂理だと思っていたのだ。

と、左端に見慣れた家が見える。そう、その家こそ瞬の家だった。母親は留守、つまり家はもぬけの殻。今日会ったこの二人を匿うには絶好の場所であるのだ。瞬たち三人は何とか走りぬくと、その家を門を開けて急いで中へ入り、家の周りに囲まれている垣の後ろへと隠れる。

「ようやく着いたか!!」

「とりあえずこつち!家の中へはちよつと待つてくださいね!」

「えっ、あの」

「大丈夫、俺がいるから安心して」

「そ、そう言う事じゃあ・・・」

少女が何を言いたいのか、瞬には分かっていた気がした。士ならともかく、何故見知らぬ自分をも助けたのか。正直、悪い奴から助けてもらっただけでも大きいのに、群衆から一緒に逃げてきたのだ。ギョツと手に持っている物を抱きしめた少女は泣きそうな顔をして、瞬を見つめる。

「私　　ここまでしてもらえるなんて」

「正直、考えられなかった？」
「・・・」

無言で少女は頷く。外は群衆の声が聞こえていたが、隠れながら瞬は少女の頭を撫でる。少女はそれにきよんとするが、瞬は笑顔を向けた。

「俺さ、困ってる人を見かけたら放っておけない性分なんだよね。昔からライダーを見てるから、て意識もあるかもしれないけど、人を助けるって事はどんな些細な事でも大切だし、当たり前的事だから。あのまま君を放っておいたら、確実に君はあの群衆に巻き込まれてしまっていた。何だか凄いポロポロだしさ、君。だから・・・放っておけなかった、と言うか」

「おい、そんな綺麗事、通じるとでも思っているのか？」
「え？」

「人を助ける事が全て正義とは限らない。もし助けたとて、自分はその利益を得る訳でもない。時には助ける事が罪となり得る。・・・それでもお前は、助ける事が大事だと思うのか？」

それは、「世界の破壊者」と言う異名を着せられた土らしい言葉であった。彼は数々の世界を回ってきた。そして、幾多のリイマジのライダーと出会い、仲間になってきた。

土は自分なりの正義を貫いてきたつもりであろう。だが、「人助けをする」と言う事は本当に重い。その行為をしたとしても、それが果たして正義となり得るとは限らないのだ。瞬は、「人助けは当たり前」だと言った。それならばきつと、「正義」を純粋に考えているに違いないのだろう。

「土さんは、どう思ってるんです」

「少なからずと、人助けだけで正義が成り立つとは考えてないな。プラスになるような事をしたとしても、それが全て受け入れられるとは限らない。お前は、今後もその考えを貫き通すつもりか？」

「……………俺は、今後その考えが揺らぐつもりはありません」

「……………ま、お前はライダーでもなんでもないからな、別に正義がどうたらと考える事もないだろう。さて、で……………行ったか？」

士の目線は、いつの間にか外の方へと向いていた。瞬と少女がそれに釣られて見ると、いつの間にか群衆はいなくなっているではないか。瞬は少しほっとしながら、持っていた鞆の中から家の鍵を取り出す。ふいにその鍵についているキーホルダーを見て、少女が反応を見せた。

「あ、あの」

「どうした？」

「その鍵に付いているそれって……………」

「ああ、仮面ライダーのキーホルダーだよ。中でも一号と二号のがお気に入りかな、俺は。あれ、それがどうかした？」

そのキーホルダーと言うのは、瞬が大好きで止まない仮面ライダーの一号と二号がデフォルメ化されたキーホルダーであった。少女の目はその中の二号に行っていたのだけれど……………よくそれを見た後に、何やら顔色が段々と変わっていくではないか。

「あ、あの…！」

「え？二号がどうかしたのか…………？」

「これ、どうしてキーホルダーになってるんです?!」

「はっ?!」

「仮面ライダーは……………この世界にはいないんですか?!商品になつていふと言う事は……………實在なんてしないんじゃないかあ」

「え、うん・・・この世界じゃあ仮面ライダーはTV番組だよ？」

その言葉を聞いた瞬間、少女は酷く悲しそうに顔した。瞬はごく当然の事を言ったままでなのだが、それは少女にとってショッキングな事実でもなんでもなかったのだ。それを聞いた土も怪訝な顔つきをして瞬を見つめる。そうだ、この土にもその事実を告げていなかったのだ。

土は旅人だから知らないのは分かる。だが、この少女はどうなのだろう。仮面ライダーの存在を聞くあたり、まさか知らないのか？と瞬は思う。思えば、この少女の事をまだ何も知らない。乞食のような恰好をしているがそれも何か関係あるのだろうか？

ただならぬ事実が、ある気がする。瞬はそう思い、この二人を家に入れる事にした。

Chapter 2 - 3 「邂逅編」 運命のカイコウ（後書き）

ようやくと出会えた・・・！しかも土と言うおまけつき！（え）

正義の事をちよつと語ってみました。正直土と言う人物自体が書き難く難しい存在なのですけどこんな事を考えてるんじゃないかと。彼なりの正義。それはDCD本編でとうに分かっていたつもりなんですけどね（苦笑）

さて、それでソラが二号のキーホルダーに反応した理由は・・・多分本編Chapter 1を読んでいたら分かってくれると思います。もしも分からなければ、詳しくはChapter 1をチエケラ！（宣伝か）

そしてChapter 2はまだ続きます。そうです、翔真と有香、あの二人も再登場させなければならぬのです。どこまで続くのか・・・それは、敵が本格的に出るその時までChapter 2は続きますです。次回をお楽しみに

Chapter 2 - 4 「邂逅編」 世界のハナシ

何かが闇で蠢く。

もそもそと動きながら、そいつはじつと時が来るのを待っていた。霧のような物をまき散らしながら、光が差す目の前の道を見つめている。

目の前を歩くのは人、人、人。自分が知らないような服装を纏った人であり、紛れもなくこの世界に生きる人達。そいつは知っているのである。この世界が、「仮面ライダーのいない世界」である事。だから、そいつのような存在の事なんて架空上の者とは思っていないのだ。

だからこそ、襲いがいがある。

そう思い、そいつは闇の中より・・・指令を待つ事にした。自分自身を作り上げてくれた、青い仮面をかぶった女幹部の指示を。二チヤリと笑いながら、そいつは再び闇の中へと姿を消したのだった。

説明しなければいけない事は山ほどだ、と瞬は実感していた。

家に無事入り、リビングで昼飯を食べている瞬の目の前には俯いてソファに座ってるソラと、少し離れて同様のソファに座り腕組みをしている士。

はつきり言うと、瞬に対して士は非常に怪訝な表情を浮かべている。無論、どうしてかは瞬にとって分かりきっている事だった。今、目

の前にいる二人は両方ともがこの世界の事に関して存じていない。士なんて某俳優に間違われ女性陣に取り囲まれていたし、ソラはソラで本当にこの世界の事に関して皆無であるらしい。あと少して妙な所に連れ込まれる所だったのだ。

この世界で今まで普通に生き、今まで普通に(？)ライダーで楽しむ性格を送っていた瞬にとつてどちらも非日常な要素ばかりだった。ひよっとしたらこのような、奇跡とも等しいこんな現象に出くわしているのは瞬だけなのかもしれない、とちよつと喜ばしい感情もあったのだけれど、この二人にとってはどうなのだろうと思ってみる。士はいわずもがな、良く知っている。正直に言うならばある意味彼とて首を突っ込みやすい体質でもある(それが主人公なのだから仕方のない事なのだけれども)。ただ、初めてあの状況に巻き込まれた上に、仲間も傍にいない状態。彼とて全く訳が分からないような状態なのだろう。いつもより眉間の皺が深い。

「・・・で？いつになったら話してくれるんだ？高校生」

「ちょ、俺の名前それで固定みたいになつてませんか？！」

「そうだろ？お前、明らか中学生とも大学生とも違う。だから高校生だ」

「あのですねー、俺は」

「それで、俺達を勝手に入れても良かったのか？お前、一人暮らしじゃないんだろ？」

士にそう聞かれてパンを一口頬張った瞬は嚙んですぐ飲み込むとその問いに答える。

「ああ、母さんはパートで夜まで帰らないし、大丈夫ですよ」

「ふうん・・・じゃあ、お前の親父は？」

「父さんは……………」

父の事を聞かれ、瞬は少し答えるのをためらうと目線でリビングの奥に置かれている仏壇を見やった。その視線を土も追うとその仏壇に飾られた、30代くらいの男性の写真を見つめる。それだけで納得したらしい、「ああ」と声を漏らした。瞬の家庭事情を少し分かったらしい、土がリビングを見渡す。

「通りで随分と飾り気がない訳だ。二人暮らしならこうもなるか」「飾り気がなくてすいませんでしたねー。ぶっちゃけ、金がない訳じゃないんですけど母さんがその金を俺が使っても良いって言うてるから・・・」

「と言うか、随分と食うの遅いな。パン二個でどうしてここまで掛かる」

「話すり替えないで下さい」

ある意味くだらないとも言える瞬と土のやり取りを黙って聞いているソラなのだが、やはりじっと下を俯いたままだ。瞬はそんな彼女をチラリとみて苦笑せざるを得なかった。

・・・しかし、先程のあの反応は、一体何だったのだろうかとも思う。ライダーのキーホルダーを見たあの時の彼女の顔は、酷く驚きそれで尚どことない焦燥感をも感じさせた。しかもどうだ、仮面ライダーが「TV番組である」と言う瞬にとってごく当たり前の事実を告げただけでこれだ。土ならともかく、彼女の風貌からして明らかに彼女が寝泊まりをするような場所を持っていないのだろうか。しかし、仮面ライダーを知っているのだ。そりゃあ、仮面ライダーは有名なのだろうけど・・・このような女の子、年頃であるならばもっとおしゃれとか女の子らしいのに興味を持ってもおかしくない。それがどうだ、このような格好でいたのだ。正直、瞬にとって掴みようがないような何かがあるのかもしれない。ようやっとパン二個を食べ終えた瞬は、ハアッと息を吐いた。そのような様子の瞬を見て、土は口を挟んでくる。

俺が知っ

てるような土さんとまるで一緒だな、と瞬は思った。

「やっと食べ終わったか」

「俺、いつもこのペースなんですけど」

「それにしちやあ遅すぎるだろお前」

「お前お前言わないで下さい！俺には、崎元瞬って名前があるんです！」

「へえ、瞬か。何だ、良い名持ってるじゃないか」

完全に俺様態度な土に瞬はちょっと眉間に皺を寄せるが、早い所事は済まさなくてはならない。土のペースにどことなく飲まれている気はしなくもないが、説明をしなければならぬと瞬は思った。

座っていた椅子から立ち上がると瞬は二人の前に立つ。新たな反応を見せた瞬に、俯いていたソラはようやくと顔を上げた。鞆を持ち、瞬は二人に告げる。

「とりあえず・・・二人はきつとこの世界が本当に存じないと思うんです」

「当たり前だ。あんな女たちに追い回されるような世界なのかここは」

「正直、土さんにとっては……そうかもしれませんね。俺、先程言いましたよね？ここでは「仮面ライダーがＴＶ番組である」と。土さんなら、理解してくれますよね？」

「……事実なのか」

「俺は嘘吐いてませんよ。説明する為にはここじゃ資料不足です。着いて来ててください」

「資料不足？」

「あ、あの」

「一応、君の事も聞かせてくれないかな。そのような格好じゃあきつと警察にも補導されかねないし、ここまで来たなら俺にも責任が

あるから」

「責任……？」

瞬はそう言ってソラに対してニコリと笑いかける。と、彼女の頼にどこか赤みが差した気がした。土は少々事情が飲めないのか、怪訝な表情なままである。だがここには始まらない。瞬が部屋を出ようとするので、二人は座っていたソファから立ち上がり、彼に着いて行く事にした。

家構造からして二階建てか、と土は漏らすがその通り。瞬の家は二階建てで彼の部屋は二階にあった。亡くなった彼の父親が家族の為に建てた家。特に彼は夫婦唯一の子だけあって、部屋もかなりの範囲を取ってもらったらしい。階段を上がりすぐ右へ曲がると、廊下の先に二つの部屋へとつながる扉があった。一つはおそらく彼の母親の部屋だろう。瞬たちから見るとその部屋は右に配置されている。

一方の左の扉、そこが瞬の部屋へと通じる扉である模様。母親の部屋の扉よりも奥に配置された瞬の部屋の扉には、デカデカとポスターが貼ってあった。土はそのポスターを目にし、少々面食らったような顔をする。

「これ……オーズか？」

「あ、そうですそうです！俺、今一番オーズにハマっているので！……で、土さん、オーズの事ご存知なんですか？」

「まあな」

土のその答えに意外そうな表情をした瞬であったが、彼はその部屋の扉の前に立つ。そのオーズポスターはどうかの付属だったらしい、商品情報等が印刷されているのだ。瞬が嘘を吐くような人物ではない、と今まで共に生きてきて大体飲み込めていた土は、何か納得したような顔になる。

瞬は、自分の部屋に通じる扉を開けた。そして、二人を招き入れた

のだけれども・・・すぐ二人の目を引いたのは、大体30cm程の大きさをした一号のフィギュアであった。例の変身ポーズを取っている一号フィギュアにソラの目は釘着けとなる。

「あの、これ」

「ああ、小遣いはたいて買った一号の人形なんです！もうべらぼうに高かったから俺、何か月も小遣いを我慢して買ったんですね」
「良く出来てるな、これ。まるで生き写しだ」

士ですら絶賛の声を上げるそのフィギュア。瞬はちよつと誇らしい気持ちになるが、そのような事をしている場合ではない。咳き込みをして瞬は、鞆を机の上に置き機のすぐ左隣のカーテンを開いた。そこに保管されていたものを見た時、更に二人の顔は驚愕へと変わって行った。

そこにあつたのは、まず棚だ。だがただの棚ではない、そこに鎮座されていたのは何十本、否、もう百本近くになるかもしれないというDVDや小さいフィギュアに大量の本であつたのだ。それらに全て共通していたのは、「仮面ライダー」と言う項目が当てはまると言う事。あり得ない程のそのDVDの数に、士は目を見開きソラは絶句していた。瞬はその前に立って、説明を始める。

「俺がいるこの世界、と言うよりも・・・俺が住むこの世界は先ほど言った通り、「仮面ライダーはTV番組である」世界、要するに士さん……仮面ライダーディケイドは架空上の戦士である世界です。ディケイドだけじゃない、先程言ったオーズやダブル、そして一号と言った・・・いわゆる昭和ライダーと分類される戦士たちもかつてこの世界で放映されていた番組の中で戦っていたんです」

「俺達と言う存在は、あくまで「創作上のキャラクター」と言う事で間違いないんだな」

「ええ。そして今、この世界では仮面ライダーオーズが放映されて

います。ちなみに、今年の8月にその放映を終えて次のライダーへとバトンタッチされる、俺達の世界じゃあそれが当たり前なんですよ。オーズはTVの中での活躍を8月末には一旦終えて、次なるライダーの活躍が9月初めから始まる。まあ、単刀直入に言うならば、仮面ライダーは列記とした番組でありキャラクターなんですよね」

「……じゃあ、俺がI上なんちゃらに間違えられたのは」

「そう。『門矢士』と言う人物はこの世界では、『I上大』と言う俳優が演じていた人物にすぎません。だからなんです、だから士さんの周りに大量の女性が寄って来た。あの人たちは全員、I上氏のファンなんだと思われます。突然現れた士さんを単にI上氏だと勘違いした、それだけなんですよ」

「……大体分かった」

士が納得したような表情でそう言うが、ソラだけは驚きの表情をまるで消せなかった。この世界には仮面ライダーは存在しない、否、番組のキャラとして存在している。その事実がソラにとっていきなりの爆弾を突き付けられたようなものだったのだ。

途端に俯いて、服の裾を握りしめた。その様子に瞬は心配そうに近づく。

「大丈夫か……？」

「あの……あの、私……ッ」

「言いたい事があるなら、はつきりと言ったらどうだ？」

士が不意にそう言い、瞬は「士さん！」と叫んでいた。唇を噛み締めたソラは確かにそうだと士に言われた事を脳内で反復する。自分は一切何のためにここに来たのか。否、正確にいうなれば自分はこちらへ無理やり飛ばされてきたような物なのだが、とにかくこの世界に来たと言う事は、何かしら救いの手立てが見つかるかもしれないと言う事である。

ソラは思い切って、聞く事にした。たつた今瞬がライダーに博識である、と認識したからだ。ひよつとしたら、「彼」の事が分かるのかもしれない。

「あの！」

「え」

「あの……ッ、瞬、さん」

「瞬で良いよ、どうしたの？」

「……フレアは」

「え？」

「フレアは、仮面ライダーフレアはご存知ですか……？」

「仮面ライダーフレア……？俺は知らないぞ」

「埜川浩人と言う人物が変身する、赤くて炎を使う仮面ライダーなんです！あの、瞬は仮面ライダーの事について知ってるんですよ？！じゃあ」

「……ごめん、俺、そんな仮面ライダー、知らないんだ……」

「え……？」

ソラの顔が、途端に泣き崩れそうな表情へと変わった。そう、彼女が聞いたのはソラを元の世界で守ってくれていた赤き炎の仮面ライダー・フレアの事だった。この世界じゃあ仮面ライダーは創作物、じゃあもしかしたらと言う思いで瞬に聞いたのであるが……。彼女の希望が、一気に崩れ去った気がした。しかしそれは仕方のない事なのだ。何故ならば、瞬は『仮面ライダーフレア』と言う仮面ライダーも、『埜川浩人』と言う人物も瞬は本当に知らないのである。そのような仮面ライダーがこの世界で番組として放映された事もなければ、瞬にとって赤いライダーと聞けば他にもっと思いつくライダーはいるけれど生憎それらの中に、当てはまる戦士はいない。

しかも、世界を旅している土ですら、フレアの事を知らないのだ。

ソラは、悲しい感情が込み上げてその場に崩れてしまう。

「ちよ、大丈夫か?!」

「……………う、私…私…ツ、浩人…浩人お…………」

「事情が、あるみたいだな」

腕組みをしながら士はそう呟く。そう、確かに彼女の話を瞬は聞くつもりだったのだが、何か彼女の反応からしてずっと深刻な物なかもしれないのだ。瞬は彼女の背中を擦りながら、ソラが落ち着き次第ちゃんと話を聞こうと決めたのである。と、ここで瞬は士に聞いた。

「士さん、士さんですら…………フレアと言う存在は」

「だから知らないと言っているだろう。炎を使う戦士は他にもいるだろうが、フレアと言う奴に会った事も聞いた事もない。カードもないしな」

「じゃあ、この子は一体…………」

「俺が知らない世界、まだ破壊者が訪れていない世界からの訪問者、なのかもな」

士がそう言ったのも瞬は頷けた。否、もう頷くべきだったのである。フレア、と言う存在は瞬も士も知らない。検索したってきつと出ないであろう、「炎の戦士」のフレア。そもそも炎を使う、と言うよりはそれを属性として持つ戦士ならば何人かいるのだけれども、そのような戦士は本当に知らない。だとすれば可能性は一つだけある。「放映される事がない仮面ライダー」もきつとあるに違いない、と瞬は頭の隅でそう考えていた。仮面ライダーを作る会社ですら名やその案すら上がらない、仮面ライダー。しかも世界を巡る旅人である士…ディケイドすら知らない存在なのだ。

瞬は、その仮面ライダーの事に関してもきつちり聞こう、そう決め

たのだった。

と、その時。

「しゅーん！いるんでしょー?!」

「げ」

「どうした？」

外から、瞬にとって聞き覚えのある声が聞こえてきたのだ。

それを聞いた瞬間、瞬の顔に青筋が立つ。そして部屋の窓をチラリと開けて外を見るのだけれども、そこにいた人物を見た瞬間に瞬の表情が凍りついたのだった。土は怪訝そうな顔を再び浮かべる。

「おい、どうした？」

「やばい……有香に翔真が来やがった。ったく、何でまた」

「誰だそいつらは？」

「俺の幼馴染で」

ピーンポーン、と鳴り鈴が響いた。瞬の背中からぶわっと鳥肌が立ち、急いで瞬はその部屋を飛び出す。土はソラを放置しておくのが気になったが、瞬の方も気になるので彼のあとを追う事に。凄まじい勢いで瞬は階段を駆け下りると、あっという間に玄関へと向かいその扉にチェーンを掛けてゆっくりと開けた。そこにいたのは、やはり翔真と有香だった。まだ制服と言う事は今帰ってきた所なのだろう。

「あー、やっぱり帰ってきてきた！」

「な、何だよ二人揃って」

「お前こそどうした？チェーンなんて掛けてお前らしくもない。ち

よつと用が出来たから来たんだ」

「よ、要件ならここで聞くよ」

「何よ、随分と余所余所しいじゃない。あんた、何か隠してるんじゃないの?!」

「べ、別にそんなんじゃないって!」

瞬は、内心でかなり汗を掻いていた。今はこの二人を相手をしてい
る暇なんてない。家にはある意味、土とソラを匿っているも同然だ
ったのだから。特に・・・ソラと言う女の子を瞬の家、しかも部屋
に上げていると言う事態を、有香だけには知られたくなかった。ど
う言う訳か有香はそう言った話題によく食いついてくるのだ。知ら
れたらどうなるか。だから本当に怖い。

しかし、一体全体何用なのだろうか。瞬がその件を聞こうと顔を出
す。

「で?何の用だよお前等」

「……その状態で普通人の話聞くか?」

「べ、別に良いだろそんなの!」

「やっぱり何か隠してる・・・ちよつと瞬、その扉を開けなさいよ
!」

有香が怒り心頭でツカツカと門を開けると、扉をこじ開けようとそ
の扉に手を掛けた。ヤバいと思った瞬がその扉を急いで閉めようと
した、その時だった。

後ろから追い掛けてきていた土がその扉に手を掛けて、チェーンを
外し扉を開けていたのである。

「何やってる、瞬」

「ちよ、土さん・・・?!」

「人と話すのにあの姿勢はないだろお前。どうい風吹き回しだ」

「ちょ、それは土さんとあの子がいるからで!!」
「……………土、って?」

士と口論になりそうになったその時に、有香の声で瞬は我に返った。見ると、有香は幽霊でも見たような顔になっており翔真も少々面食らった顔をしているではないか。

士は瞬の事もお構いなしに瞬の幼馴染二人をまじまじと見つめる。

「へえ、こいつらが幼馴染か」

「……………」

「……………」

「俺の顔に、何かついてるのか?」

「……………ありえない」

「確か…………あのバー」

「それを言うな、有香」

俺が悲しくなるから言わないで。

瞬は有香に対してそんな風な感じを出すのだが、もう遅い。もっとも知られたくなかった相手に知られてしまったのだから。瞬は、一体全体どうすればいい?と頭を抱えたのだった。

Chapter 2 - 4 「邂逅編」 世界のハナシ（後書き）

久々の更新申し訳ありません・・・m（――）m

とりあえず、瞬と士のポジションが分かってきた気がします。ボケと突っ込みですわこの二人（笑）にしても、ソラがちよっと空気になりかけてる気がして何か怖い

そして幼馴染二人もキャラ濃いと言う事実にはソラ涙目・・・（苦笑）

次回、Chapter 2が完結する！かもしれない（おい

Chapter 2 - 5 「邂逅編」 崩れたハイボン

一体、どうしたら良いんだろうか。

今、瞬は自室にいる。目の前には土とソラ、そして 結局

転がり込んできた翔真と有香がいるのだ。だが有香から注がれるのは、明らかに猜疑心の瞳。それもそうだが、今有香の隣にはソラがいるのだけでも、有香以外の女子がこの部屋にいると言う事態を…
…彼女が一体どのように考えているのか、想像できる。翔真の方は特にこれと言って何も無い、だが土の方はと言えば少し有香とソラの事で面白がっているようにも見える為に瞬は酷く頭を抱えていたのだった。

「えつと……………」

「何よ瞬。こんな貧相な格好をした子を家に上がらせちゃって」

「それには訳があるっていったら？」

「……………」

「ちよつと、あなた。何か言ったらどうなのよ」

「え、あの、その」

「そんなおどおどしないで言いたい事があるならズバツと言いなさいよズバツと!!」

何か、正反対だなあ。そう思いながら瞬は、有香がソラにも突っかかり始めたのを見て溜息を吐かざるを得なかったが、何だか有香ならば彼女にズバズバ物事を聞けそうだなと思える気もしなくはない。そんな二人の横にいる土は、二人の様子をニヤニヤしながら見て、こんな事を言い出した。

「随分と、正反対なんだな」

「有香は…………昔からこうだから…………何か迷惑なら、俺が連れて帰

りますが」

「翔ちゃん?!」

「いや、俺もこんな勝気な女は嫌いじゃない。瞬は良い幼馴染を持つたもんだな!」

「からかつてるんですか?!」

ニヤリとした笑みを浮かべた士は瞬に対して笑いかけるが明らかにからかっている内容なので瞬は即座に士へと反論した。翔真はそんな二人の様子を見てぷつと吐き出すもそれを瞬に見られて「笑うな!」と言われてしまうのだった。そういえば、とばかりに瞬は身を乗り出した。

「ねえ、君」

「え、私ですか?」

「そ。名前・・・聞いてなかったと思って」

「瞬、もしかして名前聞いてなかったの?!」

「そうだけど・・・何だよ」

「何それ失礼」

「うるさい!」

「あ、あの!私……………ソラ、って言います」

「ソラ?」

「はい。ただの“ソラ”です」

「……………名字は?」

翔真がソラと言う名前を聞いて怪訝そうな表情を浮かべる。

確かに、今の時代は名字と名前が二つあってこそその名前だ。どれか一つだけだなんてありえない。あり得るとするならば、ホームレスと言う事になってしまつ(ある意味で言う愚弄発言になるだろうが)のだ。彼女は見た所確かに貧相な格好だ、だが一人暮らしを出来るような健康体であるように思えないのである。身体が痩せている

上に金を持っている様子もない、おまけにこれ位の年頃の少女が果たして、このような格好にもなるとは思えない……と言う、ある意味瞬が考えた事と同じ事を、翔真は考えていたようだ。翔真にまじまじと見つめられて、ソラは萎縮してしまった。

「ごめんなさい……名字はあったかどうかなんて」

「覚えて、ないのか？」

「はい……正直、捕えられたその時以前の記憶は全くなくて」

「え？」

「捕えられた……?! ちょっと待て、それどういう事なんだ?!」

「瞬、どういう事よちよつと!」

「ああもう有香は口出しすんな! ソラ、それ、どういう事なんだ?! さっき言っていた、『フレア』と言う仮面ライダーと何か関係があるのか?!」

「は、はい……」

「大体分かった。フレアってのはお前がいた世界のライダーなんだろう? だったらお前は、大方その世界の悪の組織に捕えられていた、って事になるよな」

「! そ、その通りです」

士はやっぱり流石としか言える。まだソラが何も言っていないにも関わらず、その事を導き出した。もつとも、士本人は然程気にしていないようだ。さて、ちゃんと名前も聞けてソラの事が大体分かった気がするがここはちゃんと本人の口から話してもらわねばならない。

ソラは自分の事をちゃんとと言う決心をしたらしいが、瞬にとってのある意味最大の問題は他にある。瞬は目の前の幼馴染二人に一瞥しながら言う。

「で? ……何か最初からここにいたような顔つきになってるけど、

お前等は一体何用だった訳？」

「ああ。……橋川先生の事、覚えてるか？瞬は」

「橋川先生って、橋川尚史先生の事か？」

「ああ。先程その先生の奥さんと会ってな、ちょっと頼まれ事を引き受けたんだ。お前……確かあの先生と仲良かったからと思っただけ」

きつかわなおふみ

橋川尚史きつかわなおふみと言う士にとってもソラにとっても知らないその人物。その人物の事をいずれの事の為に解説しておくでしょう。橋川と言うその人物は瞬・翔真・有香が中学生の時にお世話になった教師であり、瞬たちが高校入学したこの年に定年退職を迎えた御年60歳の男性である。

そもそもどうしてその先生が瞬と仲良いのはどうしてかと言えば理由はたった一つしかない。橋川氏はその年でありながら仮面ライダーのファンであると言うのである。そもそももうライダーが作られて40年、当時20歳でまだ若き新米教師であつたらう彼のその心を捉えたのが、初代仮面ライダーであつたのだらう。それでライダー好きを思い切り公言していた瞬の事が目に入り、仲良くなったのだらう。

その橋川氏からの頼み事とは何なんだろう。翔真からメモから受け取り瞬は読みながら言う。

「ふむ……なるほどね、分かった。また後日に会いに行ってくる」

「俺達はその要件だけなんだ。ちょうど良いと思っただけ……じゃあ、帰るか？有香」

何の頼み事かは知らないが、翔真と有香が用事を終えたのは事実。もう瞬に用はない。

翔真が有香に帰りを促してみたのだが、有香はハッとこちらを振り返るとソラの手を引いてとんでもないとばかりに凄い剣幕で瞬にとって本当に頭を抱えかねないような事を、言い出したのである。

「何言ってるのよ翔ちゃん!!」

「は?」

「なんかこの子随分と訳ありっぽいしさ、何か本物の『門矢士』が絡んで来てるなんて正直ただ事じゃないんだよ?! 最初は何か気に食わなかったけど、よく見たら可愛いじゃない」

「へ?へ?」

「ちょ、おま・・・」

「正直、仮面ライダーは幼少期の時ぐらいしか見てないけどさ、この瞬間も凄いいリアルじゃない! 丁度毎日に退屈してた所! こんなドキドキさせられるような展開……放って帰るなんて私はイヤ!」

「……………退屈なんてしてないじゃ」

ボソリと瞬がそう零すももう遅い。有香は一旦ここまで食い付けばもう食い下がらないと言う事は、幼馴染の二人は嫌と言うほどに良く知っていた。正直、有香が士と言う存在に簡単に納得したのは驚きであったようだが。それはともかく、有香は完全に残る気であるようなのでその場から立ち上がったいた翔真は深々と溜息を吐いてその場へ再び座り込んだ。

「分かった。……有香がここまで言い出したら、絶対に引かないだろうからな。俺も残る」

「ちょ、待て待て待て、マジで二人ともここにいいのか?!」

「ああ」

「おい……、話に寄っちゃあもしかしたら」

「良いんじゃないか?別に。関わらせておけば」

完全にヤバイ方向へとなっている気がすると思った瞬だったが、翔真や有香にそして士は最早「帰る」だとか「関わらない」とか言い出しそうにはなかった。士自体ももう完全に事態を飲み込んでいる

らしいのか、完全に幼馴染三人のやり取りをニヤニヤしながら見つめていたのである。
もうここは諦めるしかないらしい。瞬は嘆息を吐いてその場へと座り込んだのだった。

闇の中で蠢く者がいる。

ぐにやりと歪んだその場より何か飛び出す。その何かは、形を順々に成して行くのだがそれを見つめている者がいた。その者は青い仮面を被り全体的に青い鎧を纏っているのだが、クラッシュャー部分を展開した部分を手でなぞり、口元の口角を弓なりにした。

「ふふふ。そろそろ時間ねミスデビル。……準備は、完了かしら？」

その人物はどうやら女であるらしい。

目の前に形成されたその者を静かに見つめ、ニヤリと嗤った。いよいよとばかりにその者も静かに足を動かす。そして再び、女仮面は告げた。

「さて？探すのよ、あの被検体を。この世界には厄介な『ライダー』はいないようだし？……くすくすくす……、さて、私の名誉挽回の時なんだから、この世界で思う存分に暴れなさい？」

そう告げると、それに反応するかの如くにそいつは静かに闇から顔を出した。

そいつは、怪人だった。怪人である上にそいつは身体を霧のように

霧散させるとどこかへ姿を消した。くすりと嗤った女仮面はクラッシュヤー部分を元に戻して自らも闇より飛び出す。彼女は、あのルシファアの四幹部が一人、チ力であった。しかし何故ここにいるのだろう、あの世界は崩壊を起こしたはずなのだ。なのに、ここにいます。ともすれば、残りの幹部のギルやライも生きていたのだらう。フレアⅡ 浩人やキヨウの詳細は不明だが、そうであれば大首領も生きていないのである。そう、目的は紛れもなくソラや『虹の宝玉』であろうか。チ力はニヤリとマスクの中で笑みを浮かべて空を見上げる。

「さあ……………計画の第二段階の、スタートよ」

一方、瞬の家。そこでは既にソラの話が終わっていた所であった。ソラはウソ偽りなく答えていた。自分が、元々は『ルシファア』と言う悪の組織に囚われて何かの実験体に使われていた事、自分を助けてくれたのは『埜川浩人』と言う青年だと、その青年はルシファアによって改造人間にされていた事（ここで瞬がやけに食い付いたが）、その青年こそが『仮面ライダーフレア』であり自分と共にならずと逃亡生活を続けていた事、そして運命の日……………自分は夢を見た、そしてルシファアによって捕えられてしまい、何とか幹部の一人は倒したと言う事、そして浩人が……………自分を傷だらけになりながら最後の最後まで守り通していたと言う事を。その話を全て終えた時沈黙が広がるも、ソラはその瞳に涙を浮かべていた。自分を案じ、例え傷を作られボロボロになろうとも自分を守ろうとしていた浩人。今、果たして彼が無事かどうかなのは分からないのだ、彼を案じているソラがこうも不安になるのも頷けるの

である。

そして、瞬はその話を聞いていて……興奮と共に驚愕の話に絶句していた。そう、改造人間に悪の組織。それこそ自分が愛する仮面ライダーの世界観であるのだ。しかもそれはもう、一号や二号と言ったライダーが活躍していたあの設定に準じているではないか。

だがそこにあつたのは、よもすれば……ショッカーと言うあの恐ろしい組織の上に行くかもしれない謎の組織だった。しかもライダーは生死不明、ソラは単身この世界に渡って来た事になるのだが、この世界で気が付いて果たしてソラはどれだけ不安だったろう。彼女が泣きそうになっているのも無理はなかったのだ。ソラは、涙をぼろりとこぼして瞬へと告げた。

「私……これからどうしていいのか分かんなくって……、でもじつとしてるより動いてる方がマシだと思って……それで」

「それで、変な連中に巻き込まれて俺に助けられた、と」

「はい……」

「思ったより、重い話だな……それで？お前は一体どうしたいんだ？ライダーの事にやけに食い付くと言う事は、お前はライダーを探し求めていたのだろう？」

士が言った事も一理ある。彼女が動いていた理由、それこそ根本的にあつたのは間違いなくライダーに関する事だ。ソラは下を俯いて涙を堪えながら、再びポツリと言った。

「ひよつとしたら、ここにもライダーがいるかもしれない……そう思ったから」

「それは、直感で？」

「……私が暮らしていた世界では、ライダーは浩人一人だけだった。でも、浩人は言っていたんです。ひよつとしたら自分が知らないだ

けで世界のどこかにはライダーがいるんじゃないか、って」
「……随分と、話がぶっ飛んでるな……」

翔真がそう言いながらソラの話聞きながら取っていたメモを目の前に置いた。流石翔真、と言う事だろうか。きつちりと彼女の話の中の要点をまとめていないか。と、彼が気になっていたのは別の所らしい。再びメモを手に取り彼はソラへと聞く。

「……ソラは、いつの時代生まれだ？少し興味深いんだが」

「え？……昭和54年ですけど」

「へ?!」

「昭和、って昭和あああああ?!しかも54年?!」

「うるさい」

そう。ソラが暮らしていた世界はまだ昭和時代。その年代を言われた時、有香も瞬もかなり驚いてしまったのだ。翔真はうるさいとの反応を示すかのように指を耳に入れているが、土はやっぱりかと言う反応を見せていた。カメラのシャッターを切ると、こう告げる。

「世界で言うのは色々あるからな。現に、全ての世界が全て同じ流れを辿っている訳じゃない。たまたまだろ、フレアの世界が昭和なもの。で？瞬は何か言いたそうだな」

「え……っ、だって、昭和54年で、えええ!!!」

「だから何だ？」

「土さんご存知ないですか?!昭和54年!1979年!スカイライダーじゃないですか!」

「何？」

スカイライダー、と言う名前を出されて土の顔も一瞬歪んだ。そう、スカイライダーがこの世界で放映されたのは1979年、本編の設

定も1979年の事だったのである。

何かの偶然か？それも何かあるのか？そもそも確か、スカイライダーはそのモデルにイナゴであるがフレアはソラ曰く、飛蝗をモデルにした改造人間であるらしいのである。イナゴと飛蝗はいわゆる仲間だ。一瞬、なんらかの繋がりを考えた瞬であつたが……数秒後にはすぐに否定していた。

「そついや、ソラがいた世界じゃあ七人ライダーも存在しないらしいからやっぱ違うかなあ」

「何がよ」

「や、だからな？ルシファーてのもどうやら人を平気で改造人間に仕立て上げる程の能力を持つてる組織みたいだから、もしかしたら……て思つたんだよ。フレアって存在そのものもさ、もしかしたらスカイライダーと同様の八人目つて可能性も考えたんだけど……やっぱ違う気がするんだよなあ。ソラ自体、それも存じないみたいだし」

「…………ライダーオタクが」

「ちげえし！俺はライダーファンだ！」

「お前なあ。異世界である上にあのライダーたちと似たようになってるかなんて分からないだろうが。もう少し学習しろ」

翔真と瞬のやり取りはともかく、土のその言葉で瞬はその場に頭を項垂れた。そもそもルシファーと言う組織が何を考えているのか分からないが、まさかそこまで頭が回るとは思えない……と土はそこまで言うときカメラのシャッターを切った。どことなく落ち込んでいた瞬であつたが、ソラがごそごそと持っていたバッグをいじくりだしたのを見てハッと顔を上げる。

「何、してるんだ？」

「私があの世界から逃げる時に一緒に持っていた物がこれなんです。

……ルシファアは、『虹の宝玉』と呼んでいました」

そしてソラは自らが持っていた七つの玉を床の上に置いて、他の者はそれに目を見開いた。その七つの宝玉は虹の七色……ではなく、赤・橙・黄・緑・蒼・紫・白、の七色が揃っていたのだが、不思議な事にそれぞれ違う光を放っているのである。土はそのうちの赤い宝玉、『赤の宝玉』を手に取り天井のライトの光にそれを曝した。

「海東の奴が喜びそうだな、こりゃあ……中で本物の炎みたいなのが揺れてやがる」

「それは……浩人が炎の力を込めたから」

「そうなのか？ ほう、だとすればこれはフレアのいわば形見と言う訳だな」

海東の名前を出したのも何だか頷ける。彼は海東……海東大樹の事を言ったのであろう。

仮面ライダーディエンド。名前から分かる通り、彼は「泥棒」なのだ。とまあ、本人はあくまでトレジャーハンティングのつもりであるらしいが。そんな彼ならばもしかやこの宝石の類いに目を付けそうだと土は言いたかったのであろう。

それはともかくとして、有香と翔真はこれみよがしに眉間に皺を寄せる。

「にしても、こんなもの一体何に使うんだか……私にはただの宝石にしか見えないけど」

「俺も同感だ。だが、何かしら不思議な力があるには違いないんだらう？」

「はい、そうらしいんですが……よく分からなくて」

「普通の虹色と違うのも何か気になるな……俺、この白い宝玉は好きだけどなあ」

そう言う瞬が取ったのは『白の宝玉』であった。それは光に晒してみると、強い光を放ってくる。まるで、強いエネルギーがこれに取り込まれているかのようにも思えるのだが、これだけだと本当に何なのかよく分かったものではない。瞬は苦笑しながらソラが持っていたバッグの中身を見ると、何かはまだ入っている事に気付き手を伸ばす。

「何だこれ」

「え？」

「ソラ、これもお前の？」

「……………私は、そんなもの知らない……………」

瞬が取り出したのは、バックル部分に何もはめ込まれていないベルトだったのである。ソラは、そのベルトの事を元いた世界で気付いたのだが、今の今まで考えていたけれどまるでその出所も本当に知らないようであった。瞬はそれを手に持ったまままじまじと見つめる。

まさしくその形状はパツと見、あの一号のベルトにも近いようにも思える……………かと思えば、まるで機能していない石のようなベルトはクウガのベルトにも近いとも感じるのは。瞬は疑問符を浮かべながらそれを床に置くが、それを見ていた有香は妙な事を言い出す。

「ねえ、そのバックル部分……………この宝玉が丁度入りそうなんだけど」
「は？」

「とりあえずさ、ソラは知らないんだよね？これの事」

「はい……………全く心当たりが……………。浩人が入れてくれたのかな……………」
「どうだかな。しっかし、これだとまるで誰かライダーにもなれるとか……………言いたそうだな、これ」

ソラですら知らなかったこのベルトの存在にポツリと土が零すと、途端に視線は瞬の方へと向いた。瞬はその視線に顔を上げて「何だよ」と言葉を漏らす。ライダーになれる。その言葉に一番食い付きそうなのはまず彼・瞬なのだ。ライダーオモ、ではなくライダーフアンである彼ならばまず願望としてあるはずなのだ。「ライダーになりたい」と言う願望が。

特にその願望の事が頭に過った翔真と有香は彼をじーっと見つめる。白の宝玉とベルトを手を取っていた瞬はこれ見よがしに嫌な顔をする。あまり見られるのは好きではないらしい。

「何だよお前等。俺の顔に何か付いてる？」

「いや？べつにいい？」

「嘘臭いな有香。どういう事だよおい」

「……………」

「翔真、無言を突き通すのは止め」

「ほれ」

瞬がもう嫌な顔をしてそのようは反応をしている間に有香がとんでもない事をしてしまった。バックルの空いている部分へその白の宝玉を押し込んでしまったのである。一瞬、瞬は押し黙ったが次の瞬間には爆発したように叫んでいた。土はそれを見てぷつと吹き出しソラは茫然としているが、もうお構いなしだ。何をやっているのばかりに瞬は叫ぶ。

「な、な、何やってるんだあああああっ?!」

「何って、入るかなーって思っただけ。入ったじゃない、それ」

「そーゆー問題じゃねえだろ?!これはソラのだぞおい?!」

「明らかにベルトとして機能しそうだと思っただけなのに」

「それが余計だっけ?!」

正直、やるとは思ってたな！

瞬はそう更に叫びながらベルトから宝玉を外そうとするがまるで外れない。そればかりか最初からそこにはめ込まれていたかのように、今度は抜けなくなってしまうのである。予想外の事に有香も翔真も目を丸くするが、押しても引いてもまるで取れないのだ。もう瞬の方は瞬で頭の中がパニックになっているのだが、それを見ていたソラは最初は困ったかのような表情を浮かべていたのだけれども、慌てふためく瞬を見ているうちに……笑みをこぼしていた。それは最初ちよつとしたものだったが、段々と我慢できずに声に漏らす。

「ふ……ふふつ、瞬ってば慌てなくても良いのに、ふふつ」

「ソラが……笑った、初めて俺の前で笑った」

「笑うと可愛いじゃない、あんた」

「何だ、ちゃんと笑えるじゃないか、お前」

そう言う土はソラに向かうと再びカメラのシャッターを切った。

瞬と出会った時より、彼女は笑っていなかった。不安な表情ばかりで、おまけに泣いている時すらあったのだから瞬たちにとって初めてのソラの笑顔であったろう。瞬は思った。そのソラの笑顔は本当に可愛いものだ。この可愛くて、愛おしいと思える笑顔がルシファのせいで今まであまり浮かべていなかったとしたら、どうなのだろう。浩人の事は瞬はよく知らない、だが彼もきつと同じだったのではないか？彼女の笑顔を、全てを守る為に戦っていたのではないか？

……途端に、瞬は思った。このソラと言う少女を放っておくわけにはいかない。絶対に守ってみせなければならないと、単純にそう思ったのである。ぎり、と瞬は齒軋りをした。

その時である。

『キヤ ツ！！！！』

「?!」

「な、何?!」

「悲鳴?!」

「何だ一体?!」

外から聞こえてきたのは悲鳴であった。甲高いそれを聞き全員がその場へ立ち上がる。

瞬が急いで窓を開けてそこから身を乗り出して外を見たのだが、そこにあつたのは瞬にとって“生で見るのは”初めての光景だったのである。否、生で見るなんて、この平和な世の中では絶対にありえないはずの光景……とも言えるべきなのだろうか。

とにかくそれは、瞬の目をひん剥かせた光景であつたのだ。

「まさか………怪人……?!」

街から火が上がり、人々が逃げ惑っている。おまけに遠目に見えたのは……見た事もない、怪人であつたのだから。

Encounter's STORY END
NEXT to Invasion's STORY . . .

Chapter 2 - 5 「邂逅編」 崩れたヘイボン（後書き）

Chapter 2 完結しました！！

結局、デイケイド登場は次回持越しのようです（苦笑）待っていた方がいたなら申し訳ないです・・・m（――）m 次回からいよいよ本気で戦いの始まり、そして！いよいよ！！主人公、ライダー変身を果たしますよ！！

ようやっとです。主人公じゃないライダーが活躍する上に主人公はマジの一般人（しかも高校生！）と言うその状況下でいつ変身するのやら……と、作者も実は心配をしておりました（笑）

にしても、歴代ライダーの影も形もないやんけ、と言う方。

あとちよいです。あとちよいだけ、しんぼうしてくださいませ・・・

！！

Chapter 3 - 1 「侵攻編」 戦いのハジマリ

唐突なるこの事態に、即座に動いたのは翔真だった。

翔真は急ぎ携帯を取り出しワンセグでニュースを掛ける。初めて見るらしい携帯にソラは多少興味津々だったが、そんな事言っていない事態ではなかったのだ。ニュースは既に、いきなりの緊急事態に追われ番組中もスタッフが駆け回っている。

『速報が入りました！街中に突然奇妙な仮面を被った人物が奇妙な怪物が現れ街中を暴れ回っている模様です！あ！人が、人が襲われています！！』

『早く逃げた方が良い！！ここにも襲い掛かってきているらしい！』

『まさか、そんな事g……くしばらくお待ちください』

「あ……ニュースが」

「これって、まさか」

「どうやら、怪人共が暴れだしたらしいな」

士はニュースを見て尚且つ外を覗いている瞬の様子を垣間見ながらそう告げた。だが、この世界では怪人と言う存在は架空の産物に過ぎない筈なのである。それがどうだ、こんな風に放送局も慌てる程に現れ始めたのだ。TVの中だけだと思っていた存在の登場に、有香は体を震わせる。

だが、最もここで怯えていたのはソラであった。先程のニュースの中継で映された、怪人の存在。そればかりか、今はどうやら下級戦闘員らしき存在もいるではないか。その中継を見た途端、ソラは顔を真っ青にさせてその場で縮こまっているのである。それまで外をずっと眺めていたらしい瞬は、そのソラの様子を見てすぐに駆け寄ってきた。

「あいつら、もしかして・・・」

「……ルシファーだ、ルシファーがここまで攻めて……！」

「世界自体はどうなったか分からないが、この世界にわざわざ踏み込んでくるなんざ、そのルシファーは相当やり手らしいな。次元を超える力を持つ組織なんて、めったにいない。そう言う奴らがこんな場所に攻めてきたと言うのは
架空だった存在が、架空じゃなくなる」

「そんなの・・・！めちゃくちゃになってしまいます！！」

「この国の防衛は」

「言っておくけど、この国の防衛とかあてにしちゃダメよ？！終戦してからこの国は戦力を自衛隊以外持たないって決めてるんだから
！」

確かに有香の言う通り。あの怪人たちがどこまで現れているのかわからないが、東京だけに出現していたとしても国民を守り切れるような軍隊を持ち合わせていない。自衛隊とて、確かに訓練は受けているがこのような非常事態に上手く対応できるかどうか分からないのだ。

嘆息を吐く士だったが、瞬はソラの肩を抱え彼女を必死に宥める。

「ルシファーはきつと、私を探してここまで・・・！」

「大丈夫、大丈夫だ！俺は絶対、ソラを守るから！」

「瞬・・・」

「……この家にいる限り、安全と思うか？怪人に関して、俺は全く・・・」

「どうだろうな。だが、少なからずとあいつらはソラを見つけない限り、絶対に引きやしないと云う事だな。元いた世界を飛び出してわざわざここまで来たんだ、それ相応の出迎えはしてやらないとな
！」

「えっ、土さん?!」

「瞬、お前等はここぞで」

「待ってください、まさか一人で行くつもりですか?!」

瞬は身を乗り出して土の方を見ると、土は既にその手にデイケイドに変身するためのバックルを持っていたのだ。瞬は目の前で初めて見た本物のデイケイドライダーに、目を一瞬輝かせるが土が特攻する気だと知りハツとなる。確かに、今現在戦える仮面ライダーは、土……デイケイドしかないのである。だが、それだとしても一体どれだけいるのか分からない敵にたった一人で挑むのは、どれだけ無謀なのか。それは、土自身がよく知っている筈なのだ。

「海東もいなければここには誰ひとり俺の仲間はいない。それにだ、この世界じゃ仮面ライダーは架空の存在なんだろう? 怪人だって架空の存在だったのに、現れたんだ。俺が出て行ったって、大丈夫だろ」

「いないはずありません!!」

「あ?」

「俺……土さんの仲間になりたいです。確かに、俺は何もできない、非力な存在です。でも、でもそれでも仲間になる事だって出来るじゃないですか!!」

「瞬」

「ちよ、瞬」

「いつも自分を大切に思ってくれている人がいると言っ事を、自覚して下さい……!!」

瞬と土はかれこれ数時間しか共に行動していない。だが瞬は、「門矢士」と言う人物をよく把握しているつもりである。視聴者であったからこそ、瞬は知っていたのだ。

彼自身、他の世界でよく「破壊者」と揶揄された。それ故に、非常

に己を大切にしない。仲間がいたとしても、彼らを守るためにたった一人で特攻する。今、士が瞬たちの事を「仲間」と呼ばなかったのはそう言った事が関わっているのだ。それに、内心できっと思っているのだろう。自分自身を、またこいつらも「破壊者」と呼ぶのではないかと。だから、仲間なんて言える訳がない。

それは違う！と瞬は感じていたのだ。士だって、仮面ライダーなのに。例えどれだけの者達にも「破壊者」と揶揄されようと、正義のために戦う。それだけで、彼は仮面ライダーなのである。瞬は必死の思いで士の手を掴むが、瞬の予想に反し、士はこんな事を言ってきたのである。

「……非力な訳、ないだろ？」

「え……？」

「お前がソラを助けた時のあの戦闘力。言っておくが、並の高校生じゃああんな戦闘出来やしない。それは何の為に身に着けた？ただの自己満足か？」

「それは……」

「“仮面ライダーに憧れた”、と言う理由。それは傍から見たら自己満足なのかもしれない。だが、お前は言っただろ？人を助けたいとそれが顕著に出ている証拠だ」

「士さん」

「有香と翔真だって知っているんだろ？瞬が、いわゆる正義漢だどやりたい事と思っている事が同一である上に絶対に曲げない信念を持っている奴だ。そんな奴が、非力な訳がないんだ」

「……ああ」

「瞬ってさ、ライダーオタクだけど確かに良い奴よ？その通り」

「翔真、有香」

確かに、士が言った通りだ。瞬は我流で技を覚えた。だがそれを使うのはあくまで、人を助けたいと感じた時なのである。彼は言っ

いた、自分は人を助けたいのだと。それを曲げるつもりはないのだと。それを間近で見た士は本当にそう思っていたのである。瞬は面食らった表情を見ると、士は初めて瞬たちの前で、微笑を浮かべる。やはり、彼は行くつもりであるらしいが、士は告げた。

「お前も、やる事はあるだろ?……ソラ達を守る事だ」

「士さん……」

「非力な奴など、この世にいない。皆必死に頑張ってるんだ。今自分がやれる事をやれると言う事だけでも、非力でもない筈だ。お前だって、今やれる事をしろ。ソラや翔真、有香はお前大切な人だ。ならば、絶対に守らなきゃな」

「……!」

「今は夏ミカンやユウスケはいない。海東はまあ、分からないが……俺も、出来る事を、やれる事をする。この家に、絶対近づけさせないようにする。それが、俺のやるべき事だ」

「士さん」

「……貴方は、やはり」

有香も翔真も、そして瞬とソラも士のその言葉を聞いて顔を上げていた。翔真は言葉を最後まで続けなかったが、瞬の顔を見つめる。瞬はその不安な面持ちの中で、キツと強いまなざしを向けるとコクリと頷いた。それを見て、満足したらしい士はソラの頭を撫でる。

「士、さん?」

「……お前を守ってくれる奴は、ここにいる。だから、安心しろ」

「……!」

「じゃあ、行ってくる。お前たちだって、俺の仲間……そう、だから安心できる」

「士さん……絶対、帰って来て下さいね。貴方は、破壊者じゃない。仮面ライダーだ」

瞬のその言葉を聞いた土は頷いた後に立ち上がると、勢いよく部屋を飛び出しそのまま家を飛び出して行った。瞬はそのまま窓まで駆け寄ると、勢いよく走って行く土の背中を、観えなくなるまで見送っていたのだった。横目でソラの様子を見た瞬は、やはり不安そうな表情を浮かべていると実感している。ギリと齒軋りをした瞬は、「絶対に、守る」と小さく呟いたのだった。

家を飛び出した土は、炎が上がる方へと走っていた。

炎が上がっている、つまり、そこに怪人がいる可能性が高いのだ。間違いなく彼らはソラや彼女が持つ宝玉を狙っているに違いない。ならば、土はやると決めた事を絶対にやるのだ。生憎、今は自分のバイクがない。それならば移動手段は足しかない。だから、彼は走っているのだ。尽きる事のないその信念に惹かれたのか、家を飛び出しその家が小さくなり始めたその時に目の前に現れた者がいたのである。

「だ、誰だお前は!!」

「我々の邪魔をしようと言っのか!!」

そう、間違いなく下級戦闘員であろう、人物たちであった。そいつらは土の事を敵と認識したらしい、襲いかかるうとしているではないか。だが、やはり下級は下級だ。

土はこれみよがしに眉を顰めるとその戦闘員たちに告げた。

「お前等が、ルシファーと言う奴らか。俺はお前等の邪魔をする」

「な、何っ?!」
「か、掛かれ!!」

その叫びと共に、戦闘員は土へと襲いかかってきた。だが土は全くひるまない。土は一人に蹴りを食らわせ吹っ飛ばすと、もう一人を殴り飛ばした。それですぐにくったりとしてしまったので、土はすぐに目の前へと走りだそうとする。だがすぐにその足を止めた。

何故ならば、目の前より……四人の人物が歩いてきたからである。奇妙だったのは、四人とも仮面を被っていると言う事。明らかに戦闘員ではないその風貌に、土はその四人を睨みつけた。その四人の方も、目の前で戦闘員を吹き飛ばした土の存在に気が付いたらしい、黄色い仮面を付けた人物が鼻で笑った。

「ねえ、あいつ」

「ああ、らしいな。……やっぱり、この世界にやって来ていたとはな」

「何だ、お前達は」

「あら、私達に向かってその口の利き方を取るなんて、ねえ」

「お前達は、幹部か」

「はっ、そうだ。俺達はルシファー四大幹部。この世界を、『破壊する』者だ」

「破壊するなーんて言ったら、あいつの面目、丸つぶれじゃないのく?」

そう言つて、ケラケラと黄色い仮面は笑った。クスクスと笑う青い仮面を被った人物や、ルシファー四大幹部と告げた緑色の仮面を被った人物。そして無言を突き通している、赤い仮面を被った人物。

名は分からないが、とにかくそいつらはルシファーの手

先である事が判明し、土は更に眉間の皺を深くする。しかし、先程黄色い仮面が言った言葉が気になる。まさか、土の事を知っているのか？そうであるのかどうかははっきりしないが、その者達がソラを狙う者なのは違いないのだ。

「ここから先へは……俺が絶対に通させやしない」

「へえ、ボク達と戦うつもりなわけ？」

「そうみたいねえ？くすくすくす」

「面白いな。俺達も探し物があってな、お前と戦ってる

暇はねえんだよ」

「そうか。なら、嫌でも戦わせてやる」

絶対に、ここから通さない。ソラに、瞬たちに手出しはさせない。土はその思いを剥き出しにすると、手に持っていたディケイドライダーを腰に巻いた。そして、目の前にゆっくりと、ディケイドが描かれたライダーカードを構えた。それを見ていた四幹部の内、緑色の仮面は仮面の奥で歯軋りをした気がする。だがそうも言っていない。

ディケイドライダーを展開させ、土はカードを持つ指を強めると意思表示とばかりにギツと四人を睨みつけた。四幹部も、引き下がるつもりはない土に敵意を剥き出しにする。青い仮面は「チャリと啞うと、不敵な笑みを浮かべ土に告げる。

「ねえ、破壊者さん？私たちの邪魔をする気なら、ただじゃ済まさない」

「俺は、破壊者じゃない」

「何？」

土をがんじがらめにしていた「破壊者」と言う言葉を、今、土は自ら振り切ったのだ。瞬に「破壊者じゃない」と言われたその時、そ

の言葉は土の心に響いた。それは、土にとって本当に嬉しかったのだ。以前、シンケンレッド・志葉丈瑠に言われた時もそうだった。だが、丈瑠と違い、瞬は「戦わぬ者」だ。「戦わぬ者」から告げられたその言葉の大きさ、それが身に染みる。

そして、

決まり文句と言える言葉を、土は叫んだ。

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ、…覚えておけ！！ 変身！！」

K A M E N - R I D E D E C A D E

その瞬間、土はライダーカードをドライバーへと挿入した。耳に残るような機械音と共に次元の壁のようなものが現れると、土はマゼンダ色の仮面ライダー・ディケイドへと変身していたのだ。

そしてベルトの横に携行されていたライドブツカーをガンモードへと変化させると、戦いの始まりとばかりにその四幹部へとそれを撃ち放つ。だがすぐにそれは振り払われると、黄色い仮面が勢いよく飛び出しディケイドに蹴りを食らわせた。それを右腕で庇うと至近距離で今度はソードモードへと変換させたライドブツカーを振り払う。しかしそれをかわした黄色い仮面はディケイドの横腹に蹴りを入れると激しいアップパーカットを食らわせたのだ。

「ぐっ！！」

「ふふ、ここはボクが抑え付けておくから、ギルとチカとキョウは早く行きなよ」

「あら、心強いじゃない」

「くくっ、だつてさあー、こいつ一人だけだもんなあ！！」

「吹っ飛ばされんじゃねえよ、ライ！！」

ライ、と呼ばれた黄色い仮面はへいへーいと軽い口調で言う「ディ

ケイドに馬乗りになろうとする。だがすぐに起き上ったデイケイドはライにパンチを何発も食らわせた。戦闘の様子を見守っていた三人はそのままその場を立ち去り、デイケイドの歩いてきた方向へと歩いて行く。

まずい！と思ったデイケイドはライを退けようとするが、ライは手よりかぎ爪を伸ばすとそれでデイケイドを引っ掻き更に距離を縮めたのである。

「お前……獣か」

「んー、まあそうだなあ。そう認識しといて、ねっ！ー」
「っ！ー！」

そのまま再びライはデイケイドを引っ掻こうとするが二度目は食らうかと、デイケイドはバック転をしライドブッカーで再びライに向かって振り下ろした。だがまるで効き目がないらしい。ひひひと嗤うライに気持ち悪いと思いつながら、デイケイドはライドブッカーを腰へと戻すとそれをブックモードへとし、そこからカードを取り出した。

「獣には獣だな！ー！」

K A M E N - R I D E O O O

そのカードはオーズへと変化する為の物だったのだ。

バックルを閉めたその瞬間、デイケイドに飛び掛かろうとしていたライを弾き飛ばすメダル状のエネルギーが出現し、あの音声が流れる。

T A K A ! T O R A ! B A T T A ! T A T O B A ! T A ・

T O ・ B A T A T O B A ! !

「何それ、ちよっと反則じゃない?!ー！」

「これが俺の戦闘スタイルだ、俺の存在を知っていたら熟知しておけ!!!」

「そうじゃなくて、オーズなんて知らない!!!」

オーズ・タトバコンボになったデイケイドは腕のトラクローでライの胸を引っ掻いた。

どうやら、オーズの存在は知らないらしい。だが、一体何故知らないのだろうか。デイケイドは知っていて、オーズは知らないとは異様ではないか。デイケイドはまあ、世界を渡る者なのだから知っているとしても、オーズの存在を熟知してはいないとは……しかし、知らないのはこの目の前にいる、彼だけなのか？それは正直判断し難い所がある。それに、このライと言う幹部。四人の中で年若と伺えよう。ならば知らないのか？Dオーズはライの方を見据えると、足のバツタレッグでライを蹴った。

「ちい！でもそれ知らないけど、ボクには勝てないよ!!!」

「はっ、やってみなきゃ分からないだろ!!!」

再びDオーズはトラクローを構えるとそのままライと揉み合いになる。そして近距離でライを何度も引っ掻いて、ライの方もまたDオーズの方へ攻撃を加えていく。両者一歩も引かないその状況。じりじりと、Dオーズはライを家の方から引き離して行く。

そう、早くこいつを何とかして残る三人の足止めをしなければならぬ、とDオーズは考えていたのだ。ライはオーズを知らない。だがDオーズの方には、ガタキリバヤラトラーターと言ったコンボカード、つまりいわゆるフォームライドカードが全て揃っているのだ。

絶対に負けられない。Dオーズは思いながら、再びライへと立ち向かうのだった。

彼らは知らない。その場を、ずっと覗いていた者がいる事を。

Chapter 3 - 1 「侵攻編」 戦いのハジマリ（後書き）

この話にて初登場！仮面ライダーディケイド！！

んで、いきなりカメンライド・オーズをさせました。とまあ、疑問はありますよね。果たして土がいつ、オーズ〓映司に出会ったのか。ぶっちゃけ、この作品でそれを解説する時が来ます。メイン軸にはならないかもしれませんが（笑）

いきなりディケイドVSライ、と言う戦い。さて、これに決着の余地はあるのか？！と言うね（笑）ははは！（無責任だろおい）

火が、街から立ち上る。

それを窓から遠目でちらちらと見ていた瞬は流石にまずいと思い始めていた。かれこれ土が家を出てもう十分あまりになるが、それ以降の火の燃え広がりには相当なものだったのである。

土は間違いないくデイケイドに変身してたった一人で怪人に立ち向かっているのだ。だが……土、否、デイケイドは分身の術を持ち合わせていないが為にもし今、他の場所に怪人が出てきたとしても、絶対に戦えないのである。デイケイドを信じていない訳ではない、だがそれでも……ルシファーと言う存在を土は知らないとも言っていた。知らぬ敵に、果たしてどう立ち向かうのか……。

ふいにそう考えるも、瞬は部屋の中で三角座りをしているソラに、絶対に守らなくてはと言う思いを固める。一応、この家にある限りの武器……となり得るかもしれない物は集めておいた。敵はソラから聞いている限り強大だ、だが土は「やれる事をやる」と言ってくれたのだ。ならば、頑張らなければならぬのである。ギユツと拳を握りしめた瞬に有香が「ねえ」と聞いてきた。

「瞬。何かさ、……大口叩いてごめんね？」

「有香」

「ここまでデカイ話とは思ってなかった。あたし、そりゃあドキドキするような話だなーとは思ってたけどさ……ソラにとっちゃあ、辛い話、でもあるんだよね」

「……」

「だから、その……」

有香が口ぐもり、瞬が何か言おうとしたその時であった。今までず

つと黙っていたソラが、有香の手を掴みギュツと握ってきたのである。遙かに体力がない為、それはもうちよつと握る程度でしかなかったが、それからは間違はなくソラの意味であった。ソラのその行動に瞬と翔真がちよつと面食らっていると、ソラは有香に告げる。

「有香さん」

「ソラ」

「私、あなたのその力強さが……本当に羨ましい」

「えっ？」

「私……言いたい事、なかなかはっきり言えなくて……浩人と一緒に行動する事になった時も彼になかなか言いたい事言えてなかったと思う……だから、私」

「ソラ……あなた」

「私、有香さんにはっきり言え、て言われた時……最初こそは怖かったけど、確かにそうなんだって。士さんにも言われて、有香さんにも言われて……初めてちゃんと言おうって」

そうだ。ソラがはっきりと自分の身元を告げたのは、士に言われた事でもあるし有香に「はっきりしろ」と言われた事が要因なのだ。彼女は、それで背中を押してもらったような物だ。有香はそんなソラをまじまじ見て彼女の頭を撫でる。そして、微笑を浮かべた。

「……そっか」

「まあ、あんまりはっきり言い過ぎるのもなんだけどな。うるさくなっちゃう」

「ちよ、誰がうるさいのよ?!」

「誰ってお前しかいないだろ？」

「瞬! あんたねえーっ!!」

「何だよ!」

「・・・呆れた」

有香と瞬のそのやり取りを見て、翔真は呆れるがソラはそれを微笑ながら見た。このような幼馴染のやり取り、ソラにとって見るのは初めてなのだ。最初こそ彼女は驚いていたが、何だか見ていて愛おしくなるようなこのやり取り、彼女にとっては見ていて幸せなのであろう。

ソラが、ふふつと笑みを漏らしたその時であった。

ドンツッ!!!

「?!」

「何だ?!」

瞬は突然したその物音に立ち上がり、再度窓から自らの家の門前を覗く。その門前はつい数分前に、怪人が入ってこれないようにバリケードを作ったのである。そのバリケードを、足蹴にする奴がいた。見た事もないようなその風貌。正直、人ではないと言う事は一目瞭然だった。

瞬がその光景を隠れながら見ていると、後ろからその光景を見たソラの顔色が再びサツと変わった。その顔がひどく怯えている。それをすぐに判断した瞬は「来たか」と呟いた。

「あいつ……ルシファアの怪人、なんだな？」

「う、ん……あれは……浩人が倒せなかった怪人で」

「マジで?! って事は、強いのか？」

「うん……」

「・・・瞬、どうする」

フレアが倒せなかった怪人。だとすれば、相当の実力者であろう。

家に入ってこられたらまずい……と瞬は思う。何とかしてあいつを退けなければならぬ……と思うが、今彼にはそれほど力を持ち合わせていない。人間の力ではおそらく、その怪人を倒せないのは間違いないのだ。

だが、それでも何もしないで退散するのを待つ訳にはいかないと思っただけだ。何とかしてその怪人を退かせようと思っただけだ。しかし早くしなければ、本当に怪人が家の中に来てしまうだろう。實力すら分らないその怪人、退散させるにしたらって単純なものはどうしようもないかもしれない……。どうにかしようと考えていた、その刹那。

「ギャッ」

「……え？」

その怪人が、突然後ろに吹き飛ばされたのである。デイケイドでもいるのか？と見渡しても辺りには誰もいない。そればかりか、誰かいるような雰囲気ではないのだ。なのに、吹き飛ばされた。瞬は頭の中が疑問符だらけになる。瞬の困惑した表情に、翔真が気が付いた。

「……瞬？」

「今、怪人が後ろに吹っ飛ばされて……」

「デイケイドがいるの？」

「いや……土さんはいない。でも吹き飛ばされた」

「？」

「何が、起こって……」

ソラや有香たちも疑問符だらけだがそれは瞬も同じだった。何故？と言う考えがまず浮かぶのが当然なのであろう。だが……一つ、可能性があるとは瞬は考えていた。デイケイド以外に、次元を超える

事の出来うる戦士の存在を。瞬はその記憶を手繰らせて考えていた時、とあるライダーを浮かべたのだった。

だが、何故“彼”が・・・？とも瞬は考える。“彼”がこの世界の存在を知っているなど、士の件も考えてあり得ないはずである。だが、姿が見えないのに怪人は吹き飛ばされた。姿が見えないままに攻撃が出来る。否、長い時間に渡り超高速移動で攻撃する事の出来るライダーなど一人しかいないのは分かっているのだ。分かっているのだが……。瞬は、気付かれないように、ボソリと呟いた。

「まさか……………いるのか？この世界に」

吹き飛ばされた怪人は、何が何だか訳が分からなかった。

この怪人は、自分が使える幹部・チカの命により一足先にこの場へと来て、ソラやあの宝玉を探していたのである。ふいに、バリケードが張り巡らされていた家の門を見ておそらく間違いないだろうと直感で感じ、入り込もうとしていたのだ。なのに、突然見えない“何か”に吹き飛ばされ、その挙句にしばらく滅多打ちに遭っていたのである。

言葉が話せないこの怪人は、うーうー、と獣のような唸り声を上げながらのたうち回っている。

「……全く、家にまで入りこもうとするとは、相当な卑怯者だな、お前」

青年のその声と同時に滅多打ちが終わり、怪人は内心ホッと息を吐

いた。

だがすぐに目の前に現れ怪人の目をギョッとさせる。赤い装甲に青い目、その手に握られたクナイにベルト。明らかに「変身したその状態」。尚且つ、カブトムシをモチーフと思わせるこの存在。怪人が、大首領らより「敵」と認識させられている存在に良く似たその戦士。

唸り声をあげながらその怪人は立ち上がるも、すぐにその存在はクナイを振るい怪人を叩きつけた。すぐに蹴り飛ばし、怪人がくたばると同時に戦士は、指を一本天高く掲げた。

「おばあちゃんは言っていた。 “ 人の家に入り込む奴は、戦士の領域に入るにも等しい ” 」

うううううう!!!

「言葉が話せない、か。それならば、そのまま唸りすら出せぬようにしてやる」

冷たく吐き捨てるその戦士。戦士の言葉を聞いた怪人は飛びつくも今度は殴り飛ばされてしまったのだ。戦士は、ベルトに装着されたカブトムシとも思わせる機械に手を付ける。機械音が、そこから漏れ出たのに怪人は更に仰天する。だが、戦士は待つてくれない。その装着された機械のスイッチを順番に押し、それらの機械音が響いた後にカブトムシの角と思わしき部分を、倒した。

ONE TWO THREE

「ライダーキック」

Rider kick

戦士が言ったその名称とその機械音が言った名称に、聞き覚えがあるらしかった怪人はその場から逃げようとする。だが逃がす訳がない、とばかりに飛び上がったその戦士は、飛び蹴りと言えるその蹴

り技……ライダーキックを放ち怪人にアタック。そして、怪人は爆散していた。爆散の煙がその場から上がり、それが晴れると同時にしゃがみ込んでいた戦士は再び立ち上がる。

そして、ゆっくりと瞬たちがいる家の方を振り向いた、その刹那。

「あら、予想外の邪魔者がいたじゃない」

女の声。その瞬間に、鞭のような物が飛んできたので戦士は素早く避ける。舌打ちした女は鞭を自らの元へと引き戻した。それは、女幹部のチ力だった。戦士を見て、仮面の内部でこれ見よがしに眉間に皺を入れたチ力は戦士へと一歩近寄る。

「全く……デイケイド以外にとんだ邪魔者が入り込んでいた物ね」

「お前は……ルシファアの幹部か」

「あら、ルシファアをご存知？……くす、それならご存知よねえ、邪魔した者を容赦なく排除するのがルシファアのやり方だとも」

「知らないな。それに、悪いが俺は今お前を相手をする暇はない」

「随分とコソコソと……まさか、貴方なの？“あの世界”で建設途中だったルシファア支部を壊したのは。それに、さっきはよくも私の可愛いミストデビルを、倒してくれちゃって」

チ力とはげのあるその言葉で戦士に告げながら更に近寄る。だが、戦士はそこから退くつもりはないのである。か、まるで動かない。鞭を手でいじりながら更にチ力が近寄ると、戦士は手に持っていたクナイでチ力の顎に突き付けた。チ力はそれを見て、くすりと嗤う。

「凶星？」

「……お前達の、好きにはさせん」

「あら言っただけ？今にあの宝玉を我らルシファアの手に、そして、あの被験体を……」

「言っておくが、あの高校生をバカにしたらお前達の面目丸つぶれかもな」

「はぁ？」

どういふ事なのだろう。不敵な笑みを浮かべているらしいその戦士に、チカは馬鹿馬鹿しいと感じたのか鞭を再度振るおうとする。だがそれを殴り飛ばした戦士はその場で後ろを振り向くと、再び指を天高く掲げる。その様子に、チカはギロリと睨み付けた。

「あの高校生はいずれ、いや、本当に近い未来だな……鋭く輝く光の如くにお前達を滅ぼす存在となるだろう。俺達仮面ライダーと共に、お前達を倒す」

「何それ、意味が分からないわねえ」

「言ってる。まだ原石だろうが、あの高校生には『力』がある。未来を守る。光を貫く正義の力。俺らしくないな、こんな気障な言葉を使うなど」

「くすくすくす……そんな言葉、二度と吐かせないようにしてあげる、わっ！！」

その瞬間、再度チカは鞭を振るうがその戦士は関係ないとばかりにそれを蹴り飛ばした。そして、自らのベルトに装填されていたまた別のカブトムシの機械の角と思わしき部分を倒す。すると、戦士はまた違う姿へと変わるとくりりとチカの方を向き、不敵な笑みを声と共に漏らした。

Hyper Cast Off

「?!」

「ふっ……いずれ、また会おう」

「ちよ、待ちなさい!!」

Hyper Clock Up

今度は別の機械音を響かせると、その戦士はチカの目の前より姿を消したのだった。思い切り舌打ちをしたチカは鞭をその場にあった電信柱へと当てるとその電信柱を倒してしまった。もう八つ当たりである。それはともかく、先程の戦士の言動そのものに怒っているらしいチカは仮面のクラツシャー部分を展開させると、その顎を手で触る。口が、明らかに怒りに彩られていた。

「全く……あの傲岸不遜男……ッ、本当、……嫌いだわ。平成の仮面ライダーの中で、最も嫌い。大嫌いよ！！全く……いずれ痛い目に遭わせてあげるわ、“カブト”」

チカが呟いたその名。カブト。そう、あの赤い戦士はカブト……仮面ライダーカブトであるのだ。瞬は間違つてなかったのだ。カブトの名を浮かばせたのも、その姿を見せずに敵を吹っ飛ばすことの出来る力を持つ、いわゆる「超高速移動」を持つ戦士の事を熟知していたからであろう。

チカは知っていたのだ、カブトの事を。だから嫌っていたのである。う。デイケイドと同様の次元超越能力を持ち合わせているばかりか、超とも言えるチートな能力……超高速移動能力を持っているのだ。生憎、涙ファアの幹部や怪人には今の所それに対抗しうる力を持った存在はいない。しかも、先程チカが言っていた事……別世界に作っていたルシファアの支部が壊された。それもおそらくはカブトのやった事だろうと目星をつけていたのである。だから、彼女は嫌っているのである。

ちい、と再び舌打ちをするチカの前に、遅れてギルとキョウウがやってきた。

「おいおい、どうした？随分と……不機嫌じゃねえかお前」

「べつつにい？……カブトが、現れたのよ」

「はあ?!あの赤い野郎が?!……… ったく、ちょこまかとしやがってあのカブトムシがあ」

「カブトムシならストロンガーも同様でしょうよ」

「うるせえ」

そう言うとギルは腹が立っているのかクラッシャーを展開させて、我慢しきれなくなったのか煙草を取り出し口にくわえるとそれを吸い始める。別にキョウもチカも文句は言わないらしい……。そもそもキョウは今に至るまで言葉一つすら発していないが。煙草の煙を吐きながらギルの目に入ったのは、遠目に見えるバリケードを張った門……瞬の家であった。

それを見て、口角を弓なりにするギルは再び煙を吐く。

「あつこか?…… 宝玉と被験体の女がいるところは」

「ええ。ミストデビルが見つ付けてくれたのよ?感謝するべきね」

「はん、でもそいつは倒されたんだろ?カブトに」

「……………ふん」

「凶星かよ」

煙を吐くギルは苦笑いを浮かべるがキョウは……まるでくだらないと言わんばかりに、顎をくいつと動かした。そして、ズイっとあの家を睨み付けると自らの懐より鎖鎌を取り出す。ギルはそれを見て煙草の火をもみ消すと、「おいおい」と言った。

「随分と、やる気だなあお前」

「……………」

「けっ、相変わらず無言かよ。まあ良いけど」

「まあ、あんたも十分ヤル気じゃない」

チカはそう言うギルの背中には確かに、彼の武器とも思わしき巨大

な大剣が備え付けられてあった。先程まではなかったが、何かしらの方法で召喚でもしたのだろう。くすりと嗤いを漏らすチ力は鞭を再度持ち直すと、首を回す。そろそろあの家を強行突破してやろう、と言う面持ちなのである。

ギルはクラツシャーを再び直して一歩踏み寄るが、ふいに……遠目の方を見て、その足を止めた。

「どうしたの？」

「……………誰か、いる」

「は？」

何という事だろう。キョウのその言葉にチカがギルの見ている方向へと目をやると、確かに誰かいる様子であったのだ。まさかまたライダーが?!と身構えるも、よく考えたらそれは違うと判断された。尤も、ディケイドとカブト以外じゃあ、次元移動できるライダーはいない。尤も、ディケイドの同種族のライダーであるらしいディエンドは管轄外であるみたいだが。

とにかく、今、よりによって訪問者がいるなどと……こつも予想外な事が起きるなんて、異世界と言う場所はやはり予測できない、とチカとギルは思い二人揃って舌打ちするのであった。

だが、キョウは、その訪問者を食らいつくように睨みつけている。

まるで、「異物」を見るかの如くに

Chapter 3 - 2 「侵攻編」 予想外のランニユウシャ（後書き）

はい。「天の道を往くライダー」降臨です！

彼のあの言動を再現するにはちよつと大変でしたね・・・（苦笑）

そもそも彼自身はかなり扱いが困難なんですよねえ、はい（しみじみ）
とりあえず彼のこの章での出番はここまです。ええ、これ以上出してデイケイドと鉢合わせ！なんてはまだしませんよ、流石に（苦笑）

話としてはそろそろ・・・ええ、そろそろ主人公の方に動きを持たせないと思ってます・・・（笑）カブト乱入で話がややこしく

Chapter 3 - 3 「侵攻編」 黄色のキヨウイ

Dオーズとライの戦いは、まだ続く。

タトバコンボのDオーズは獣の能力を持っているらしきライへとトラクローやバツタレックで立ち向かうが、どうにもDオーズが優勢とは到底思えない。明らかに、ライの方は「オーズを知らない」と言っておきながら戦闘で有利に立っているではないか。ちい、と舌打ちをしたDオーズへとライは蹴り込みを入れて獣のような爪でDオーズの胸を引っ掻く。

「ふはははは！もうちょつと掛かってきなよ?!」

「ちいつ！ガキみたいな声を出しておきながら……やはり幹部なだけはあるって事が。じゃあ、これならどうだ!」

その刹那、Dオーズはライドブツカーからまた新たなカードを取り出し、ドライバーを展開しそのカードをドライバーへと入れた。それをまずいと思ったライは飛び掛かるが、フォームエンジのあの特有のエネルギーに弾き飛ばされる。

FORM-RIDE OOO RATORATAR

RAION!TORA!CHITTER! RATORATAR

! RATORATAR!!

「はあっ?!またコンボか!」

「オーズはこんな事が出来るって事、理解しろよな!」

それは、いわゆるオーズで言う「コンボチェンジ」であった。基本コンボであったタトバから、猫系コンボであるラトラーターへと変わったのである。DオーズRはその瞬間頭部で乱反射を起こし、ライオネルフラッシャーを使用した。そのかなり強力な眩しい光

にライは目を覆う。それをDオーズRは見逃していなかった。素早くライの側によると、更に強力となったトラクローでライを引っ掻く。歯軋りのようなものを上げたライはDオーズRを蹴り飛ばすと、自らの手から爪を収納しその代わりに自らの武器とも言える強大な刃が備え付けられた薙刀を取り出した。

「っ?!」

「……ボクをなめたら、後が怖いって事を教えてあげるよ!!!」

ライはその途端にその薙刀を振り回しDオーズRを攻撃し始めた。DオーズRはトラクローでそれを防御したり避けたりするのだが、ライはその薙刀を持った途端に凄まじい速さでその突きを繰り返す。

再度舌打ちをしたDオーズRはそれを必死に避けるも、何度目かその攻防が行われた刹那にその薙刀が右肩部分を掠める。右手のトラクローでそれを受け止めるもそれが見事に引っ掛かってしまい、その薙刀によりライはDオーズRを持ち上げたのである。ライの凄まじい力の発揮に戸惑ったDオーズRは、何とかそのトラクローを収納しようと別のフォームライドのカードを取り出そうとする。

だがライの行動の方が早かった。それを下から上へと振り上げるとDオーズRをライの後ろへと投げ飛ばしてしまったのである。その衝動で、カメンライドが解けて元のデイケイドへと戻ってしまった。

「ぐ……お前……ッ」

「なめてたでしょ、ボクの事。ボクはねえ、これでもギルやチカよりもずつと力が強いんだよねえ。だからさあデイケイド、さつさとボクの前で

死んで？」

「はっ、誰がお前なんかの前で死ぬか。俺はしぶといんだよ!!!」

そしてディケイドは、再びライドブッカーから別のカードを取り出しドライブを展開する。それを見てライが襲い掛かってくるが、それをサツとかわしたディケイドは再びカメンライドのカードを取り出しそれをドライブへと入れようとした、その時だった。

ライが再びの攻撃を仕掛け、そのカードを弾き飛ばしていたのである。ディケイドは「なっ」と声を上げるがもう遅い。素早い行動を起こすライは強引にディケイドドライブへと手を掛けると、それを外してしまったのである。当然、ディケイドは変身が解けて、土へと元に戻ってしまった。それを見てニヤリと嗤ったライは土を蹴り飛ばす。

「ぐっ」

「さつさと死ね!!」

「ちっ！ドライブを返せ!!」

土は、生身のままライへと掴みかかり彼の足を右足で蹴り飛ばし薙刀を上手く支えとして利用し、ライがその手に持ったままだったディケイドドライブを取り返そうとした。だがすぐにライに突き飛ばされ、地面へと転がり込む。変身が解けた土は戦闘により多少ボロボロだったのであるが、ライの方をよく見てみれば全く無傷だったのである。

先程までの攻撃は、効いているようで効いていなかった。土がその悔しさに地面に拳をぶつけると、ライがそれを見て嘲笑する。

「ははっ、流石の破壊者もベルトがなきやあただの人間、て奴だねえ！」

「くっ……、俺をなめるな!!」

再びライに飛び掛からんとした土は近場に落ちていた鉄パイプを取ると、「らあっ！」と掛け声をあげてライへと殴りかかる。それを

ライは持っていた薙刀の刃の部分で真つ二つに斬るとその刃は、土の頬を掠めた。かすり傷が出来てしまい、吹き抜ける風がその傷に染み渡る。

だが、そんな事言つてられなかった。土は、ライへと再度飛び掛かりデイケイドライダーを取り戻そうとするのである。ライは少々鬱陶しそうにしながら、土の腹を蹴ると横っ腹を更に蹴り土の身体を突き飛ばしたのだった。胃から液を吐き出しながら土はギツとライの方を睨み付けると再び立ち上がる。

この凶太さ、ライには理解出来ぬ物だったけれども……土を足止めしていると云う事実には、仮面の奥でほくそ笑んだ。そして、二チャリと嗤うとある事を思い付いたのか、デイケイドライダーを振りかざす。

「お……前ッ、何のつもりだ?!」

「別に?でもさあ……これ、必要なんでしょう?だったら返すよ」

「何……?」

やけに素直なライのその行動。土は訝しげにライを睨んだ。確かにライは、デイケイドライダーを土に差し出すが如くに目の前へとそれを提示しているのである。まるで、畏だとも言えるようなやり方ではないか。見るからに何か考えているようにしか見えないライの言動に、土は立ち上がると身構えた。

「お前、随分と余裕なんだな」

「だってボク、幹部だし?お前のようなライダー一人に負けてるよ
うじゃ名が廢るんだよ。とゆか、ライダーとしか戦う気、ないし?」
「……………」

やはり、どこか怪しい。それが土の思つた事であった。このライと

言う幹部、土にとっては子供のような感じともどこかでは思っているようなのだが、その一方で残虐性やどこもない余裕を感じなくともない。策略とかどうかはともかくとしても、信用ならない敵。それがこのライ、否、ルシファーと言う存在に感じた土の印象であったのである。

目を光らせながら土はゆつくりとライへと近寄り、ライはデイケイドライバーを土の前に投げ捨てた。更にライのその怪しい行動に眉間に皺を寄せる土だったが、よく見れば彼の持つ薙刀がドライバーに向かつて一直線に伸びているではないか。少し距離はあるものの、明らかにそれは薙刀を使ってドライバーを壊してしまおう、と言う意図の現れである。

こいつ、案を考えるのは上手だが実行するのは下手なタイプだな。

土は、そう思った。

そして身を乗り出すと土はゆるりとライの方面へ近づく。ライの方も、じり……とドライバーの方へと近寄って行くが、その意図は丸見えだ。風が静かに吹いて、二人の間に静寂を齎す。…と、その刹那、どこかで爆発音が聞こえた気がした。それを合図とし、ライが薙刀をドライバーへと投げようとす。が、今度は土の方が早かった。土は素早く駆け出し、ドライバーの方へ飛びつき地面を転がる。投げつけられた薙刀を寸秒で避け切ると、ライの足を自身の右足で払った。

「ちいつ！ やつぱ甘かったか！」

「随分と舐めた真似をしてくれたな！ 変身！！」

KAMEN - RIDE DECADE

KAMEN - RIDE KUUGA

もう数秒とも言える動きで土はドライバーを身に着け、再度ディケイドへと変身すると、先程変身そびれた事の取り返しをするように新しいカメンライドカードを取り出し、自らが最初に出会ったライダー・クウガへと変身を遂げた。Dクウガはライを更に蹴りつけ立ち上がる。

ドライバーを破壊し損ねたライは大きな舌打ちをすると、薙刀を構えDクウガへと振りかざす。振りかざした薙刀をかわしDクウガは後ろへと後転すると、薙刀を蹴り飛ばす。だがそれを弾き飛ばす事は出来ないらしく、すぐに押し戻された。相手は薙刀、と言う長い棒形状の武器を使っている。今はマイティフォームであるDクウガにとって、明らかに不利だ。

棒状、つまりロッドを使う方が効率が良い。そう考えたDクウガは再度フォームチェンジしようとライドブッカーへ手を伸ばした、その時だった。

邪魔者ガ、入ッタカ

「?!」

吹き飛ばシテヤル!!

「何……ッ、うわっ!!」

その刹那、凄まじい轟音と共に激しい竜巻にも似た突風が吹き、Dクウガのみをその場から吹き飛ばしてしまったのである。ベルトに装填していたライドブッカーはそこから吹き飛んでしまい、Dクウガは丸腰の状態となってしまった。突然の事にライは一瞬、動きを止めるが、すぐに「ああ」と声を上げると薙刀を振り回し両腕で首の後ろへと横に持つ。Dクウガは何とかその場で立ち上がるうとするが、ライに足で抑え付けられて立ち上がれない。

「なーんだ、助けに来るなら来るって言ってよ、ホント」

「ぐ……何だ、今の」

「ボク達の邪魔をした、罰だよ？デイケイド。ボク達ルシファーに……これ以上首、突っ込まないでくれる？正直言っさあ、正義の味方とかどうとか、大っ嫌いなんだよね」

ライの子供のような声に、殺意のような感情が混ざる。それと同時に力が更に入れられ、踏みつけられているDクウガはそれを意地で退けようとするがその力はかなり強く入れているらしく、なかなか退ける事が出来ない。薙刀を右手に持ったライは、刃の部分をDクウガの足元へ向けながら再び告げる。

「だから……ここで死んでよ、デイケイド。死んでくれた方が、ありがたいけど」

「はっ、生憎だが俺は死ねないんだよ。俺は、絶対に戻ると約束したからな！お前等ルシファーに、ソラを渡す訳にはいかない。それに、瞬たちは待つてるんだよ、俺の……帰りをな！」

「……………ふうん」

Dクウガは瞬や翔真に有香、そしてソラの顔を脳裏に浮かべながらライに告げた。絶対に、帰る。正直ルシファーと言う存在の事は、未だにDクウガには分からない。だが、もう分かっていた。Dクウガにとって、ルシファーと言う存在は敵であり、絶対に倒さなければならぬ存在。

Dクウガ……デイケイドにとって、大シヨツカー以来の倒すべき組織。だから、何としてもここで死ぬわけにはいかない、と思っっているのだ。だが、ライは鼻で嗤い更にDクウガを踏みつける。

「ボクには理解できないね」

「言ってる！お前なんかに、理解できる事じゃないだろうな！！」

「へえ。理解出来なくて結構だよ。デイケイド……………！！」

ライは、マスクの奥でニチャリと嗤った。それに気づかないDクウガはライの足を持ち上げようとする。どこからそのような体力が湧き出ているのか分からないが、本当に力が強い。ライドブツカーを何としてでも探し出してカメンライドし力主体のライダーへ変わらなければ、絶対に勝てない。そう思っていた、矢先だった。ライの右腕が一瞬、後ろへと隠れたその刹那

「ッ???!?!」

Dクウガの右足に、凄まじい痛みが走ったのだ。

一体何が?!とDクウガが何とかライを押し退け上体を起こすと、その右足に深々とライの薙刀が突き刺さっていたのである。地面にさえも突き刺しているその薙刀を、ライはグリツと動かした。当然、それでDクウガの右足に痛みが走らない訳がない。

「ッ、あああああッ!!」

「ははははははッ!! 痛い? 痛いでしょ? あはははははッ!!」

「お前ッ!!」

ライは更にその薙刀を刺すと、Dクウガの右足からはドクドクと赤黒い血が流れ出た。上体を起こしていたDクウガはそれを力尽くで抜き、何とかその場から立ち上がった。

だが、右足から流れる血は止まる事なく、その場に流れ落ちる。右足を引きずり、ライドブツカーを視線の先に見つけたDクウガはその場から移動しようとするがライは薙刀の刃の部分に付着した血を拭くと、すぐに棒の部分でDクウガの足を払ったのである。

「ぐうッ!!」

バランスを崩したDクウガは再びその場に崩れ、カメンライドが解けてディケイドへと戻ってしまった。丸腰では何も出来ない事を良い事に、ライはディケイドを蹴りあげて、後ろの壁へと衝突させて再度ディケイドの変身を解いてしまった。

士はその場にうずくまり、ディケイドライダーを右手に持ちながらも、右足を立てて出血している部分を抑える。だいぶ挟られたらしい傷跡から血が更に流れ、あっという間に士の手を真っ赤に染め上げた。ライは薙刀をその場で立ててそれに凭れる形で立つと、嗤った。

「うっ……っ」

「はっ、流石のディケイドもさー、そうなっちゃうと本当に駄目だよねえ。だって人間なんだもの。ははははは！！」

「お前っ、俺はまだ、うわっ！！」

ライは棒の刃部分ではない部分を士の腹へと素早く突き、士のバランスを崩しその場へと倒れさせてしまった。右足が痛み、思うように立てない士はギリと齒軋りをした。

これまでにない絶体絶命の危機だとも、士は思った。右足はおそらく治癒しなければ機能出来ない上に、ライドブッカーがない為に変身したとしても他ライダーへとカメンライド出来ない。一方のライは、無傷に等しい。否、その鎧と戦闘能力の為にまるで傷を付けられていないのだ。恐らくコンプリートフォームで行きさえすれば、勝てるかもしれないのだが……それへとなる為の道具であるケータツチは、今は士の手元にはない。写真真館へと、置きっ放しのままこの世界へと来てしまったのである。

もう、不利な状況でしかなかった。他のライダーが助けに来てくれさえすればいけるのだけれども、ディエンドである海東は来るかどうか不明、他ライダーには次元を渡る能力を持つライダーなど心辺りもない、おまけにどうだ、「破壊者」であるディケイドの元へ、果た

して助けなんて来るのかどうか……。

絶望的な、この状況。地面に説き伏せた身体を起こそうにも、力が入らない。ライは余裕そうな口ぶりで雑刀を振り下ろし、血が未だにこびりついた刃を土へと向ける。

「終わりにしようよ、ディケイド。ボク達の邪魔をした罰、受けて貰う」

俺は………ここで、終わりなのか？

絶望的な、その言葉。だが、土はすぐにそれを振り払った。拳に力を入れ、顔を上げてライを思い切り睨み付けたのだった。土は、思う。

……いや、諦めない、絶対に諦めてたまるか！

瞬は、あいつらは、俺の帰りを待ってる。

夏海にユウスケだって、絶対俺の帰りを待ってくれてくれる筈だ！

だから、だから………ッ！！

「終わらない……、俺は絶対に終わらない。お前なんかには、やられてたまるか……！」

「随分と、強気なんだね。最後の言葉は、終わりかな？」

「ッ……！」

「死ね」

その、ライの冷たい言葉が終わった刹那に、ライは雑刀を振り下ろした。やられる！とばかりに土はそれに目を背け、目を強く瞑った、その刹那。

奇跡が、起きた。

数十秒、否、数秒と経っていないのかもしれない。ライに突如として何かの拳銃の弾のようなものが直撃し、ライが後ろへと後ずさったのである。何か、弾のようなものが落ちたその音で土は緩やかに顔を上げて、その奇妙な状況に気付いたのだ。

「何だ・・・？」

「土さん！！」

聞き覚えのあるその声。土はハツとして後ろを振り向く。そう、そこに立っていたのは……

その手に、エアソフトガンを構えた、瞬であった。

Chapter 3 - 3 「侵攻編」 黄色のキョウイ（後書き）

新年一発目更新が、これて・・・（苦笑）

戦闘だらけ！（笑）とにかくもう戦闘だらけな話でした。タイトルは勿論ライの事を指してます。もう怖いよ、このガキ

さて、瞬くんが何故ここにいるのか、他のメンツはどうなった？！との事がありますでしょうが次回その謎が明らかになります。

そして次回……何が、起こる。

「瞬……ッ?!」

士は驚きの声を上げて、瞬の方を見た。明らかにそこにいるのは瞬本人である。エアソフトガンなんて持っていたのか、と思いつつもどうしてここに彼がいるのか。士には分からない事だらけだったが、彼の横よりひよっこり顔を出した三名により、更に士は驚嘆の声を上げる。

「ソラ?! 翔真に、有香も」

「や、やつほー土さん」

「……瞬に着いて来たんですけど」

「だ、大丈夫ですか……っ?!」

「お前等……何で来たんだ?! あの家にはいた方がずっと安全じゃ」

「彼らが、黙ってられないと言っていたから……私が連れてきた」

聞き慣れないその声に、土ばかりか少し姿勢を崩していたライもその声の主に見張った。なぜならばそこには……一見、50代くらいに見える壮年の男性がそこにいたのである。スーツのジャケットを着こなしていると思いきや、中にはラフな服装が見えている。眼鏡を掛けて白髪混じりの髪であるがその目は凜とした眼差しで、顔立ちも若い頃は美形であったろうな顔立ちである。この壮年の男性の事など、士は心辺りなどなかったのが……たった一人、それに該当するであろう人物を記憶から引き出す。

「まさか……少し前に翔真や有香が言ってた、橘川っていうのは」「そう、私の事だ」

彼は、翔真や有香、そして瞬の恩師である橘川氏だったのだ。話を三人から聞いていた士は顔と名前が合致するのだが、何故そんな彼が瞬たちを連れてここにやってきたのか、そもそも何故部外者であるはずの橘川氏がこんな場面にあるのを承知でやってきたのか。

それは、ほんの数分前に遡る事となる。そう、士がまだデイケイドに変身し戦っていた、時の事。

数分前。否、ほんの数十分前へと遡る。

チカとギルとキヨウの三人が、ソラとあの宝玉を探すために瞬たちの家へと近づいた時である。バリケードが張られまくった瞬の家に訪れた訪問者がいたのだ。その訪問者は、バリケードが張られまくった門を見てこれ見よがしに顔を顰めると、インターホンを鳴らしたのである。

しかし、誰も出ないのだ。その人物はその反応により、首を傾げたのだ。

「……妙だな・・・物騒なニュースが流れているのに、この時間帯に誰もいないとは」

彼……橘川氏は瞬を間違はなく訪ねに来ていたのだ。その時間帯には、不気味な怪人が出現したと言うこの現実世界では到底あり得ないようなニュースが流れていた。瞬には元々頼みごとをしていたのだけれども、彼の様子が気になってしまったのである。現実世界で本当に怪人が出現したこの事態、正直彼の事だから行動を起こして

いるに違いない、と彼は思ったのだ。

中学時代、瞬を教え子として持っていた橘川氏は最初こそは瞬が無類のライダー好きであると言う事実が気が付いていなかった。だが、彼が楽しそうにライダーの話をしているのを耳にした時に、彼がライダーファンであると気付いたのである。そこからは、とんとん拍子と言う感じに話を通じ合って、今や……教師と生徒と言う関係には不釣り合いなのだけでも、DVDを貸し借りしたりお互いにライダーに関して沢山の話をすると言うまでの関係に至ったのである。

瞬は現在高校生であると知っていた橘川氏は、時期的にもしや一年生辺りは早帰りなのでは？と予測した事、もしくはニュースの事により全員早退と言う事になったのかもしれない、と考えていたのである。それで訪ねてきたのだけでも、インターホンに誰も出ないではないか。

「おかしいな……もう一度やってみるか」

橘川氏はもう一度インターホンを鳴らす。遠目の方で街が燃えているのが見えるが、とにかく彼が確認したいのは瞬の無事であった。このバリケードが張られた門を見ればいるのは分かったのだが、何故か出てこない。もしか、警戒でもしているのだろうか
と橘川氏が薄々と思い出した時であった。インターホンの先から、聞き覚えのある声が聞こえたのである。

『……はい？』

「あー、橘川ですけども……崎元くんは」

『せ、先生?!』

「おや、やはり崎元くんか」

『先生……何でここに?!と、とりあえず開けます!』

インターホンに出たのは、他でもない瞬であった。自室にソラと翔真と有香にいた彼は、二度も鳴ったインターホンを不審に思い、出てきたのである。まさかの恩師が訪れて来た事に面食らった瞬は一旦インターフォンを切ると、すぐに門の向こうにある扉が開き、瞬本人が出てきた。

橘川氏は瞬の姿に目を細める。数十分前に出会った翔真はともかく有香の方はやはり容貌が変わっていたが、瞬は中学時代よりもずっと遅しくなっていたのである。相変わらず感じさせるライダー好きと言うオーラにも懐かしさを感じるが、瞬の方は首を傾げた。

「橘川先生、何故ここに？」

「久しぶりだな崎元くん。ニュースを見て……君が心配になったもんだからね」

「俺を？……何か、先生らしいな。……とりあえず、上がってください。その、ちょっと訳ありな事情があるんですけども」

「訳あり？」

瞬は扉から出るとバリケードを解いて、橘川氏を家へと招き入れた。瞬から今現在は家の中に母親はおらず、その代わりに翔真と有香、そしてもう一人がいると言う事を橘川氏に説明した上で自分の自室へと招き入れた。不審げな顔で行った瞬が少し困惑気味な顔で戻ってきたので、ソラは首を傾げる。

「瞬、どうしたんですか？」

「いや、……橘川先生が」

「へ？せ、先生?!」

「……数十分ぶり、ですよ先生。何故ここに？」

「その事に関してはまた話すが……この子は誰だ？そして今、何が起きているのか状況は分かっているのか？お前たちは」

橘川氏は見知らぬ少女「ソラを指さしながらそう静かに告げた。確かにその通りだ。今、部屋の中には武器となり得るものを大量に持ち込んでいたし、それ以前にソラと言う少女がこんな場所にいるとは思わなかったのだ。クラスメイトか何かだと思いたかったが、瞬たちが通う高校の制服とは違うし、何だか恰好的にどちらかと言うとホームレスのように見えなくはないのだ。

武器が取り揃えられている状況と云い……強ち推測していた事は間違っていないかったのかもしれない、と橘川氏は思うが、瞬がその事に関して、話を切り出してきた。

「先生。」

信じて下さるかどうかわかりませんが、彼女は今、とある組織に追われているんです」

「組織、だと？」

「ええ。言うなれば、シヨツカーとかに近い存在の組織……ルシファア、と言う組織に」

「シヨツカー?! そんなまさか、あの組織は」

「分かってます!……けど、彼女から聞いた話は全て現実で、その証拠に今街で暴れている怪人は皆ルシファアから来ている! 今起っている事は夢なんかじゃない、全て現実となっっているんです!……破壊の限りを尽くす彼らの目的は一つ、……彼女を、ソラを自分達の手中に入れる事、彼女が持つ『七色の宝玉』を手に入れる事。その為だけに、彼らは町を破壊しています」

「……」

「そして、今、彼らを止める為に戦っている人がいます。門矢士……」

「…仮面ライダーディケイド」

「ディケイド?!」

瞬は、橘川氏が驚いた表情をしたのを仕方ないと受け止めながら更に話を進める。ソラから聞いた話を全てそのままに、橘川氏へと伝えた。ソラが別世界から来た事、その別世界にも仮面ライダーがい

た事、その世界は滅びてしまったかもしれない事、そして今……ソラは本人にも分からない方法でこの世界に来た事、時を同じくして仲間と逸れてしまった上に何故かこの世界へ渡って来た土と出会った事、瞬はソラを助けた事
彼女を、守ろうと決意した事を。

瞬の話を黙って聞いていた橘川氏は下を俯き顎に手を当てながら、沈黙し考えている。その様子を見ていた瞬や有香に翔真、そしてソラは不安げな表情を浮かべていたが
寸秒考えていた橘川氏はゆっくりと顔を上げて瞬たちを見つめる。

「……君は、昔から嘘を吐くのがへたくそだったからね。この話は嘘とは思えない。否、正直このような少女がいると言う時点でもう本当なんだろうな」

「……それじゃあ！」

「信じる事にする。とまあ、私がここにやってきたのは、このようなニュースを見て君がどんな行動を起こしているのか……崎元くん
の事だから何かしら行動を起こしているのではないか、少し心配になったものでね、だからこうして尋ねた訳だが」

「あつ……」

橘川氏が瞬の事を心配して来てくれた事を知った瞬は些か真つ赤になるが、一番彼らにとって嬉しかったのは氏が瞬の話を通じてくれたと言つ事だ。この話は本当に当事者とそれを実証できる存在がいなければ「空想」と化してしまう話だ。それを信じてくれた、と言つ事は本当に大きいのである。

とまあ、瞬自身も確かに橘川氏が言うように嘘を吐くのが苦手である。その事を氏が知っていた上に、怪人が暴れていると言つ話は既にニュースで聞きかじっていた為であろう。

「それで、君たちはここにいると言つのは……彼女を、ソラくんを

守る為か？」

「勿論です！……けど、一つ、不安な事があります」

「言ってみなさい」

「あたし達、ルシファーに関してはよく知らないしソラの方も把握し切れていないみたいだから、怪人の強さとかそう言った事、本当に全然知らないんです。知らないから

士さんが

「デイケイド？」

「……士さんの事が、心配なんです。本人は大丈夫だ、とは言っていたのですが、本人でさえ知らない敵に立ち向かう事は……あまりにも無謀すぎて」

「……要するに、君たちは心配だから彼を助けに行きたい、そう言う事なのかな？」

「はい！」

はつきりとした彼ら三人の意見に橋川氏は苦笑せざるを得なかった。橋川氏は、恐らく士としては非力で戦う力もない三人を切り捨てたと言うより……守る為にここに残したのだ、と解釈している。尚且つ、このソラと言う少女を狙う輩から、守る為に。だが、彼らの気持ちは分かる。瞬としては、ソラを絶対に守って見せると言う思いはあるのだろうが、やはり……我慢は出来ぬ、と言う事だ。よく見れば、瞬は既に武器と思わしき武器を持っているではないか。

だが、問題はもう一つある。それは、瞬が守りたいと願う

ソラの思いだった。

「君たちは良いとして、ソラくんは？君は狙われる側なのだとしたら」

「私も行きます！」

「え……?!」

橋川氏は……ソラが、そこまで強い意志を秘めているとは思って

なかつたのである。寧ろ臆病そうで、震えて怯えていそうな少女に見えるのだ。だから、この時だつて家にいるやら何だの言いそうであつたのに、着いて行くといい出したのだ。泣きそうな目で、ソラは訴えている。

「わ、……私もじつとしていられないです！本当なら私は、この世界に降りてくるべき存在じゃなかつた……だ、だから……」

「私らを巻き込んでしまった事への、罪滅ぼし……ってところね。やりー、あんたちゃんと言いたい事言えるじゃないの！やっぱあんた、良い子だよ」

「は、はあ……」

「有香、無闇にソラに絡むんじゃねえよ」

「うっさいわねえ！別に良いじゃないそんな事！」

有香がまるで親しい友のような反応をしてきたのでソラは困惑気味な表情をするが、瞬がそんな有香に食い付いてきたために、この二人はまたしても言い争いをする。こんな緊張感があるともつかぬような、微妙な空気の中で平常心でいられるこの者達は、本当に凄い……と橘川氏は思った。

現在の状況を呑み込んでいるからこそなのか。特にこの瞬は、昔から一度決めたことは絶対に曲げない信念がある。守ると決めたならば絶対に守る、助けると決めたならば絶対に助ける……そう言った強さを持っているのだ。ソラと言うこの少女を守ると言ったのであれば、絶対に守る。土を、ディケイドを助けると言ったならば絶対に助ける。そう言う意思が、彼から伺えたのだった……。

「それで、こいつらを連れてきた、つてののか？」
「ああ。崎元くんは言い出したら聞かない性格をしているしね」

お手上げ、と言う風に橘川氏が両手を上げると瞬も苦笑交じりの表情を浮かべた。そんな二人や他の三人を見てみると、一瞬怒鳴ろうと思っていた士の感情が和らいだ。瞬をゆつくりと見つめる。

「……………瞬、お前……………」

「士さん……………迷惑だったならごめんなさい。でも、俺は助
けたいと願った、守りたいと願った！だから！！」

「……………大体分かった。お前、要するに頑固なんだな」

「まあ、そうなのかもしれないけどね」

士の横に歩み寄ってきた瞬が、士の肩を持って彼を立たせると目の前で首を傾げていたライがプルプルと震え出している。笑いを堪えているのが、傍から見てすぐに分かる。エアソフトガンを構えた瞬は、これまでに見た事ないような怒りの表情で、ライへと怒鳴りつけた。

「お前が、ルシファアの幹部か！！」

「……………あはははははははっ！！！！そうだよ、その通りだよ？！随分と威勢がいいガキなんだねえ！！あはははははははっ、腹が抜れそうだ！！ボクに楯突こうつての？！そんなおもちゃみたいな銃で」

ライが小馬鹿にしたような嗤い声を上げて薙刀を振りかざそうとした刹那、瞬はエアソフトガンから再び弾を撃ち出していた。その勢いは激しいもので、鎧を身に纏っていたライでさえも後ろに退くものであったのだ。ライはそれにより瞬を睨み付けるも、瞬の方も負けじと睨んでいる。

「おもちゃって言わないでくれるか？これ、父さんの形見なんだよ！それをおもちゃって言う奴の方がずっと餓鬼だよ！！お前なんか、負けやしない！！！！」

「瞬……」

「……………ちっ、人間の子供って本当大嫌いだよ。ボクを馬鹿にして、生きて帰れると思うな？！」

そして、ライはあらんばかりの声を上げながら薙刀を振りかざしこちらへと駆けてきたのである。それを瞬は臆する事なくエアソフトガンに向け撃ち放った。同時に後ろに控えていた翔真へと目配せをすると、彼を土が失くしたライドブツカーの搜索へと向かわせる。いつ弾が切れるか分からないが、とにかく撃つしかないと思った瞬は目の前にライの薙刀が近づいたその刹那、それをギリギリでかわして薙刀に向かつて回し蹴りをしたのである。予想外の体力にライは目を白黒させるが至近距離で瞬はエアソフトガンの弾を撃ちこんだ。思い切りを舌打ちしたライは、薙刀を振り回しながら瞬めがけて突こうとする。しかしそれを、瞬はエアソフトガンで見事に防いだのだ。

そのまま瞬は薙刀を前へ押し込み、それによってライが後ろへ再び退いたのを見逃すことなく、再びエアソフトガンで撃ち込む。人間にこうまでして反撃されるのは初めてであるようで、少々ライは戸惑いながらその弾を避けて再び薙刀を突き付ける。

「なめた真似、してくれちゃってねえ！！」

「俺みたいな“餓鬼”に、コテンパンにされる準備をしるよ、幹部が。正々堂々と、掛かって来いよ！！お前の方がずっと餓鬼だ！！」

「この……糞餓鬼っ！！！！」

瞬の挑発ともとれる怒りの言葉に、ライはむきになり薙刀を振り回すと再度瞬へと突き付けてきた。だが瞬は寸止め同然にそれを左足

で止めると、上へと蹴りあげた。だがその隙を突かれ、ライに胸倉を掴まれた瞬はその場に投げ捨てられてしまう。

「ぐっ!!」

「瞬!!」

「こ、の……ッ!!」

すぐにその場に起き上った瞬は、ライに向かって右足で蹴りを入れる。

しかしそれをうまく抑えたライは遠目で瞬や士たちの奥を見たその刹那に……仮面の奥で、ニチャリと嗤う。それに気付かぬ瞬は更に拳をライへ向けると、その場で飛びあがって殴りかかった。こちらを嘲るように余裕そうに構えるライを、なりふり構わず瞬は殴りつける。だが、所詮は人間の力だ。瞬の拳の方が痛くなり、その痛みを払うかのように手を開いた刹那に、馬乗りされていたライが瞬を押し退け、今度は押し倒してしまったのである。

「っ!!」

「全く、人間のくせにボクを倒そうとするとか……本当、糞生意気にも程があるよ」

「うるさい!!くそっ、くそっ!!」

「あーあ、骨も糞もない餓鬼なんか倒される、ボクじゃないんだよねえ」

「何……?!」

「さっさと死んでよ、

人間」

ライが、その一言を言い放った刹那、遠くから……非常に長い鎖の鎖鎌が、飛んで来ているのが見えたのである。それは紛れもなく、瞬を狙って来ていた。ライから急いで退こうとするも、がっちり瞬の肩を掴み、明らかに退かさんとしているではないか。

やられる！！！と、瞬が思い目をぎゅっと瞑った、刹那
だった……………。

何かが、貫かれる音がした。

その音がしても、瞬は痛みすら感じていなかったのだ。恐る恐る目を開いた瞬だったが、彼の胸は無事だった。それどころか、目の前のライは「ほう？」と言う言葉を漏らしているし、有香やソラからは引き攣ったような声が漏れていたのである。

一体なぜ？と瞬は思うが、後ろをゆっくりと振り向いたその時に、その理由がはつきりと分かる。

一体、何が起こったのか

絶句した瞬は、必死の思いで……………声を漏らしていたのだが、それは悲鳴にしか、ならなかった。

否、悲鳴になって当然だったのだ。だって、だって瞬の目の前では。

「あ……………あ……………、ああああああああああああああああ

あああああッ???!?!?!」

「……………かはっ」

「士、さん……………ッ!!あああああああッ!!!!!!!!!!」

瞬に背中を向けた士……………否、デイケイドが、その鎖鎌に胸を、貫かれていたのだから。

胸を貫かれたデイケイドは、ゆっくりと瞬の方へと顔を向ける。その仮面には、間違いなく士と言う人間の血の飛沫痕が飛んでいて。口元からも、ゆっくりと血が流れていて。

ライドブツカーを無事に見つけてきた翔真も、後ろに隠れていた有香やソラも、そして橘川氏も、その様子に絶句した。瞬は、その悲鳴を上げてからも……………もう引き攣った声しか上がらなかつた。

「ど、して……………?士、さん……………」

「……………俺を、仮面ライダーだつて言ってくれたお前を、俺の仲間のお前を、瞬を、死なせる訳には行かないだろ?デイケイドのカードだけは、奇跡的に持っててな……………」

「まさか、俺を守る為に……………?士さん、そんな……………っ」

泣きそうな目を向けてきた瞬にデイケイドは苦笑を漏らすも、そのすぐ後に、仮面のクラツシャーから吐血しその変身が解ける。その腰から、デイケイドライバーが落ち、士は膝から崩れ落ちた。

その胸は赤々と血で染まり、その胸にいつも下げていたカメラは鎖鎌によつて壊れ、土も口から真つ赤な血を吐き出していたのである。翔真はその様子を見て、震えて怯えたような声を上げながら見つけてきたライドブツカーをドライバーの元へと転がす。有香は酷く絶句し、涙目になり今にも大声で泣き叫ばんとするソラを必死に庇っていたのだ。

瞬は、瞬は……………ただ、士が血を吐くのを、苦しむのを見ているだけしか出来ないのである。若々しい証拠のその大きな目を見開いた瞬

は、ライによつて抑え付けられていた肩を振り解き、起き上り土を抱えたのである。その目から、大量の涙を零しながら。

「土さん……土さん！」

「……男だろ？瞬。泣くなよ……。お前、言つてたよな、ソラを守りたいつて。じゃあ、お前は……。ここで死んではダメなんだよ。お前は、あいつを守らなきゃなんねえ。俺じゃあ……。俺だけじゃあ勝てないだろうが、お前がいれば大丈夫だ……。ツ、かはっ」

「そんな、そんな……。ッ！土さんもいれば、何も怖くなんかありません！土さんだつて、一緒にいましょうよ？！それ、なのに」

「……大丈夫だ。俺、は……」

土が再び血を吐き、その血が瞬の顔に付着する。と、その刹那だった。土の足が、まるで映像のように消え始めたのである。そう、あの時……。瞬がかつて、ライダー映画で見た時とはまるで違う消え方で、土自身が消滅し始めたのだ。突然の出来事に、瞬は大きく戸惑いを隠せない。

「土さん？！そんな、まさか」

「……瞬。これを……。お前に託す」

「え……？」

瞬は、土からデイケイドライダーとライドブツカーを託された。その二つには、土の血が付着し、土の手も消滅し始めていたのだ。瞬はその二つを受け取るも、土の手を再度握りしめた。

瞬の涙のつぶがそこへ零れ落ちて、土が消えないように必死に掴もうとする。だが、消滅は瞬の手では全く抑えられないものだった。

それは、瞬では止められないものであったのだ。小刻みに震えて泣いている瞬の顔に、血まみれの土の手が、消滅しかかっている土の手が触れる。

.

Chapter 3 - 4 「侵攻編」 唐突のサンゲキ（後書き）

はい、何と言う展開だ（おい、無責任だぞお前）
て訳で、今回をもって門矢士「デイケイドは一旦退場してもらいま
す。

断言しておきます。士は必ず本編に戻ってきます。あの映画みたく
な方法じゃなくて、必ず戻って来るんです。作者が意地でも戻って
来させます！！！！（え

そして……………。いよいよ、皆様お待たせしました。
瞬は、次回変身を遂げます。二回も！！（笑）

士が、デイケイドが消滅した。

目の前で起きたその事象は、酷く瞬の心を抉った。茫然と見つめる中、士の胸を貫いた鎖鎌の持ち主らしき者が、ゆっくりと前から歩いてきたのである。瞬がゆっくりと顔を上げてそいつを見ると、そいつは無言で瞬へと近づき、瞬の目の前にあった壊れてしまった力メラを、更に踏み潰したのである。ガシャンと言っ音が響いた時、瞬は我に返り、その人物の足に飛びついていていた。

「止める……、止めるおおおっ!!」

そう叫びながら瞬は士のカメラをその人物の足元から拾い上げ、ドライバーとライドブッカーを持ったままソラ達の元へと駆け寄る。怯えた表情を浮かべるソラの目の前に立ち、彼女を庇うように立つと、その人物……赤い仮面を被ったそいつは、ゆっくりと瞬たちの方へと振り向く。

赤い仮面を被ったその人物。そいつをソラがはっきりと認識した刹那、彼女は……最も怯えた表情、尚且つ驚愕した表情へと変えたのである。

「う、そ……何で、生きてるの?!」

「ソラ? どうしたの?!」

「あの、赤い仮面……ッ! フレアが、浩人が倒したはずなのに……?!!」

「何だっつて……?!」

そう。ソラは覚えていた。元の世界で、フレアが最後に戦っていた

相手こそ、あの赤い仮面なのだ。あの赤い仮面は、フレアに倒された、とソラは認識していたのである。フレアが持つ最大限の炎の力で、あの体を焼き尽くされていた筈だった。フレア……浩人にとって、間違いなくそれは命がけだったはずなのである。なのに、生きています。浩人のあの命がけの行動は、一体何だったのか。

浩人がこれを知ったらどう思うか……、それを考えたソラの目尻に自然と涙が溜まる。だが、それを制したのはその赤い仮面だった。無言を貫く赤い仮面は、鎖鎌を投げて瞬たちがいる場所の近くに立っている電信柱を壊したのである。いきなりの攻撃に、ソラはビクリと反応した。

「ひっ……………!!」

「てめえ……!!」

「……………そいつを、こちらへ渡せ。渡さなければ、先程の破壊者のようになるぞ」

「ッ?!」

「…脅しのつもりか?!」

「くすくす、その通りよ?」

赤い仮面は明らかに脅迫して来ている。それに反論した瞬たちであったが、直後に別の女の声が聞こえてきたので身動きをする。刹那、目の前に青い仮面の人物が現れ有香を平手打ちでその場から突き放してしまったのである。更に悲鳴が上がリ、今度は緑色の仮面の人物が翔真の首を絞めてその場から浮かせているのである。その状況に、瞬はソラを庇いながら「止める!!」とありったけに叫ぶ。

「くすくす。あら、やっぱり人間て弱々しいわねえ」

「ったあ……………!!」

「ライ、ディケイド相手に苦戦してたのかよおい」

「っ……………」

「ギル、それにチカにキヨウ……別に？そんな事ないよ。とまあ、
ディケイドを仕留めたのは確かにキヨウだよ、うん」

「……………」
「お前等……ッ！！！」

緑色の仮面は瞬のその声に反応し、首を絞めていた翔真を突き放し
青い仮面と共に瞬とソラの元へと向かい始める。ソラは、明らかに
怯えていた。やはり共に連れてくるべきではなかったのか。だが、
置いて行くのも何か不安で仕方がなかった。置いておくなんて、守
ると言う事には値しないと瞬自身は思っていたからである。さて、
必死にソラを庇うそんな瞬であったが、先程目の前で土をやられた
事による怒りが彼ら四人に対して沸々と込み上げていたのである。
ギリ、と歯軋りをする瞬であったが、目の前にある人物が立った事
によりその気持ち少し落ち着く。だがその気持ちはすぐに大きな
不安へと立ち上った。

「先生……?!」

「崎元くん、四人で一緒に早く遠い所へ逃げなさい！！」

「で、でもッ！！」

予想外の展開に、瞬は目を見開いて下を俯く。

こんな事を言っている橘川氏であるが、以前言った通り彼はもう6
0歳を過ぎていいるのである。そのような老体の恩師に、あのような
実力も計り知れないような人物たちを任せる訳にはいかない

。だが、迷っている暇などない。何故ならば赤い仮面、キヨウ
と呼ばれたそいつが再び瞬たちに近付いていたからである。手には
鎖鎌を持ち、邪魔をするならば容赦しないと言う感情の元に動いて
いるのかもしれない、と瞬は思う。だが、キヨウの目線がすぐに移
動し、その鎖鎌を持ち直し投げる姿勢を作ったのである。ハツとし
た瞬はすぐに橘川氏へと逃げるように言おうとするが、遅かった。

鎌の着いていない方をこちらへと投げたキヨウは、あっという間に橘川氏を縛り上げてしまったのである。

「ッ?!」

「先生?!」

「……………邪魔だ、退け」

その刹那、橘川氏は縛り上げられた事によりその場から投げ捨てられ、この場から少し遠くへと投げられてしまったのである。声にならない悲鳴を上げたソラだったが、今度はライが襲い掛かってくるではないか。瞬はソラを守るためにライに蹴りを加えるが、その右足を掴まれてその場から逆さ釣りに宙づりにされて右へと投げられてしまう。すると緑の仮面……………ギルが、今度は瞬へと近づく。瞬は足払いをしてギルのバランスを崩そうとするが、ライのように簡単にはいかないらしい。頭を掴まれて今度は左方面へと投げられてしまったのである。瞬は、酷くポロポロだった。今も、土をやられたその怒りはまだ収まっていないが為に、いつもよりも感覚が鈍ってしまっている。

すると、青い仮面……………チカはくすりと嗤うと、誰もまわりにいなくなり無防備になってしまったソラへと近づいたのである。瞬はそれを見てハツとなると、すぐに起き上ってあらんばかりの叫びを上げた。

「止める!!! ソラに近付くな!!!」

「あら、貴方随分とポロポロなのにそんな事言ってくれるのねえ。デイケイドは死んだ、それなのに貴方はまだ私たちに刃向うなんてねえ……………生意気にも程があるわ」

「ははははは!!! 確かにそうだよねえ!!! デイケイドはもう死んだんだよ?! お前、絶望していてもおかしくないのにさあ、ははははは!!! あの破壊者にどんな感情表現をしてたんだかねえ」

「……………何、だと？」

「くすくすくす！…どの道貴方たちは皆ここで死ぬ。所詮、人間は脆い奴なのよ。だったら守るなんて事は止めなさい？死ぬのが怖いならね！！」

「くくくくく！…確かになあ！…愚かな人間ばっかで」

「どうせ死ぬのにさ、バカな行動して抗って、何が面白い訳？ボク達には分かんない事だらけだ」

「……………止める」

「あのデイケイドだって、人間なのよ？どうせ、破壊者と呼ばれてようが、あんな塵、死んだって何一つ変わらないわねえ。くすくすくすくすくす！！」

「はははははははははは！！！！！！！！！！」

「くくくくくくくくくく！！！！！！！！！！」

敵幹部三人は、嘲り笑った。人を、守る事を、助ける事を、

デイケイドを。

それが、瞬の怒りの炎に油を差し、瞬の中にあつた何かが切れる。目の前でソラが怯えている、有香が倒れている、翔真が苦しんでいる、恩師さえさえも巻き込まれてしまった。そして……………そして、士が望まんとしなかった事に、なるうとしている。

理性は、限界だった。目を見開いた瞬は、嗤う三人、否、四人へと雄叫びを上げる。

「止めるおおおおおおおおおおおッ！！！！！！！！！！」

「はあ？」

「ん？」

「なあに？」

「瞬……………」

「しゅ、瞬……………あんた」

「……………瞬」

「これ以上……これ以上、お前等が何を言おうがなんであろうが！お前等の好きにはさせない、お前等にソラは、あの宝玉は絶対に渡さない！！許さない……土さんを嘲り笑った、俺達人間を嘲り笑ったお前等は、絶対に許しやしない！！！！！！！！」

瞬の目に宿った怒りの炎は収まる事無く、燃え上がる。

そのあらんばかりの叫びに敵幹部四人は、一気に瞬の方を見た。瞬の方を見て、再び嘲るのだけれども

次の彼の行動には、

誰もが目を白黒させていたのである。瞬は、その手に持っていたデイケイドライバーをその腰に装填、おまけにライドブツカーからデイケイドへと変身する為のカメンライドカードを取り出したのである。ライは後ろへ少し退き、ギルはその仮面の奥で顰め面を作り、チカは「何のつもり？」と吐き捨て、キョウは瞬をただひたすらに睨み付けたのである。

ドライバーを展開し、瞬はそのカードを、目の前にかざした。そして

「変身ッ！！！！」

K A M E N - R I D E D E C A D E

次の瞬間には、瞬はデイケイドへと変身していたのである。

その姿に、ソラ達三人は息を呑んだ。マゼンダカラーのボディに緑色の複眼……のだが、そのデイケイドはどこかおかしかった。先程までの、土が変身していたデイケイドとの違いを見破ったらしいキョウが、どこからか再び鎖鎌を呼び出すと振り回し始め、その姿の「名称」を口にする。

「……………お前、“激情態”、か」

「何ですって？」

「ああ、あの噂のか。くくくくくく！！！！」

そう、瞬は確かにデイケイドへと変身した。だが、瞬は感情が高ぶり怒りと言う感情に囚われてしまっている。その為か、その複眼は酷く歪み、額のシグナルポインターは紫色へと変化していた。その姿は以前、士が「世界の破壊者」である事を受け入れた故にその姿となっていた、だが今デイケイドへと変身しているのは士ではない、瞬だ。それ故に、感情がピンポイントとなったのである。

「一人残らず、倒す、倒してやるうっうっうっ!!!」

Sデイケイドはライドブッカーをガンモードへと変化させると、四幹部へとそれを撃ち放つ。だがそれに対してびくともしなかった彼らはSデイケイドの回りを取り囲んだ。だが、Sデイケイドはしゃがみ込んですぐにギルへと飛び蹴りをする。回し蹴りをチカへと食らわせる。刹那にライドブッカーをソードモードへと変化させるとライに斬りかかり、更にはキョウをも蹴ろうとした。だが、感情で動いている故に周囲を見渡す程の冷静さを失っていたSデイケイドは気付かなかった。後ろからチカに鞭で攻撃されてしまったのである。

「っ、ぐはあ!!!」

「瞬!!!」

「ど、どうしよう……」

「……あいつ、あれを使いこなせてない……ッ」

Sデイケイドの戦い方を見ていた三人はそれに酷く困惑していたが、不安にも駆られていた。

そして翔真のその一言に有香は頷く。瞬は感情に任せてデイケイドとなったはいいものの、正直上手く使いこなしていないのである。ソラは不安げな瞳をSデイケイドへと向ける。瞬の怒りは分かる。

瞬の目の前で、土がやられてしまったと言いつた事実、彼にとってどんな影響を齎してしまったのか、そんな事すぐに想像できるのだ。だが、感情任せに戦っていたら絶対に勝てやしない。そんな事、瞬自身も分かっているはずなのに、その理性ですら、動かせないでいる。

ふいに、有香が何かを思い出したようにその表情を変えた。

「……………あ」

「どうした？」

「翔ちゃん、家に置きっ放しのあのベルト、ねえ、あれって使えるんじゃない?!」

「……………まさか、あれを瞬に渡すのか?!」

「だって、今のデイケイドじゃ絶対に勝てない!!それに、……………それに土さんは望んでないはずだよ、あんな戦い方……………」

「……………有香……………。……………分かった、俺が取ってくる」

「翔ちゃん?!」

「お前はここにいろ。良いな？」

「……………うん、分かった。翔ちゃん、気を付けてね」

「ああ」

翔真は有香と頷き合うと、四人の幹部に気付かれぬようにその場を立ち去り、有香はソラと共に隠れた。だがSデイケイドは、本当に劣勢の一方で押されてしまっているようだった。

感情で動いているが為に動きが制限される、理性が欠けている。今の所はライドブッカーで何とか対抗している物の、このままでは本当に負けてしまう。ソラはそんな事、絶対に嫌だと思った。ライドーが負けると言う事態、ソラは……………そんな光景を見るのが嫌だったのだ。負けて、ボロボロになって、それでも痛みつける怪人たちが、幹部が苦手だった。例えば感情そのもので動いていたとしても、瞬は「ソラを絶対を守る」と言っていた事を、彼女は覚えていた。

ライの持つ鋭い爪で切り裂かれたSデイケイドは地面を転がってその場から少し距離を置く。そこで立ち上がったDデイケイドは荒い息を上げながら、ライドブツカーを再び構えた。だが、チ力の鞭がそれを捉え弾き飛ばすと、そのライドブツカーはソラ達の方へと転がって行った。「あ」と声を上げたソラがそれを拾ったのだけでも、ギルはそれを見て凄まじい勢いでソラ達の方へと走って行ったのである。ソラはそれを見た瞬間、その目をカツと開いて悲鳴を上げていた。

「いやああああああつ！！！！」

「ッ！ ソラッ！！！！」

Sデイケイドはその悲鳴にハツとなった。素早く移動してからソラ達を庇うと、ギルが振りかざした大剣を、目の前で止める。ギルは舌打ちをしながらも、明らかに切りかかろうとばかりにその剣を押しつけてくるのだ。ソラは引き攣った悲鳴を上げて、Sデイケイドを見つめていた。

「瞬……ッ！」

「ソラ、早く、有香のところに行け！お前を、絶対に俺は」

「瞬……今の瞬は、ただ怒りにしか、動いてない……」

「……………え？」

唐突なその言葉、だがしかし分かっていたその言葉を突き付けられてSデイケイドはついその抵抗を、止めてしまった。それと同時に斬られてしまったSデイケイドはその拍子に変身が解け、瞬へと戻ってしまう。だがギルを何とか押し出した瞬は、ソラを急いで有香の方へと連れて行く。

だが、ソラは震えながらも、瞬へと

その言葉を更に

告げたのである。

「今、瞬は……ダメなんだよ。私、瞬と出会ってまだ数時間しか経ってないけど、貴方が本当は凄く優しい人だって分かってる。怒りで動いたら、何もかも見えなくなる人なんだって……そう思ってた」
「ソラ……」

「これは、本当は貴方のベルトじゃないんだよね……？お願い、瞬。守ってくれるなら……貴方のやり方で、私を守って下さい。これは、デイケイドの……土さんのものなんです、から……」
「……………」

ソラは不安げにその言葉を切ったのだけれども、確かにそれは正しかった。

今、感情だけで動いていては本当に見えていた物が見えなくなってしまう。守りたいと願うならば、自分自身の力で守り通さねばならないのだ。土が何のために瞬へとデイケイドドライバーを託したのか。彼は「夏ミカンたちへ渡してくれ」と言っていた。つまり、大切な仲間へとこれを渡してくれ、そう言う意味であろう、と瞬は思った。ならば、勝手に使って勝手に感情任せに戦っていたら駄目だ、と瞬は思った。感情任せに動いていた数分前の自分を情けなく思いたくなかったが、過ぎた事は仕方ない。今、考えなければならぬのは、自分の力でソラを守り抜く、そう言う事だ。瞬は決意した表情になると、今まで持っていたデイケイドドライバーやライドブツカーを有香に渡す。

「有香……これ、預かってくれ」

「うん、分かった。でも、あいつらまだ暴れてる……」

「ああ、分かってる。……けど、あいつらを絶対に止めなきゃならない。俺は、……絶対に、ソラを守り抜いてやるから」

「瞬……！」

「けど、あんたまさか、生身で挑むつもりじゃあ」

「……………何の武器もないけど、俺は、向かう」
「え……………?!」

有香が戸惑いの声を上げる中、瞬は再びその場から立ち上がった。今度はデイケイドに変身せずに、ただ傍に転がっていた鉄パイプをその手に持ち、四幹部を睨み見据える。そして、言葉になつていない雄叫びを上げながら瞬は目の前へ走って行くではないか。その声に気付いた四幹部は再び瞬を見据える。ライヤギルは鼻で嗤い、チ力はくすりと嗤う。

「へえ、結局変身しないで来るんだお前」

「くくくくくく!!泣いても知らねえぞ糞餓鬼!!」

「デイケイドに俺はならない!!……………俺は、戦う。今度は感情剥き出しになんかならない、ソラを……………絶対自分の力で守り抜いて見せる!!!!」

「くすくすくす、なんと勇敢な人間なの。でも残念、貴方はここで死ぬのよ?!くすくすくす!!」

「……………くたばれ」

「やってみなくちゃ分からないだろ!!うおおおおお!!!!」

雄叫びをあげ、瞬はその中へと突っ込んで行く。浩人とまた違った性格で、自分を「守る」と言ってくれた瞬。ソラは、そんな彼の背中を必死に見つめる。彼の強い決意が現れたその背中を見ていたソラなのだが、その視線はとある人物の声により途切れる。

「お、おおい」

「!!… 翔ちゃん!」

そう、先程ベルトを取りに行くと言っていた翔真が戻ってきたのだ。その左手にはソラが持っていた例の宝玉が入ったバッグを持ってお

り、右手には有香と翔真が悪戯で宝玉を入れてしまったベルトが握られていたのだ。運動神経がない彼がよく頑張ったもんだな、と尊敬していると、息を切らした翔真がソラ達の方へと近寄る。

「はあ、はあ……ベルト、これでいい、のか……？」

「うん！それで、それでいい！！それを瞬に！！」

「わ、分かった。ソラ、そこに隠れてろ……っ、有香は先生を頼む！」

「分かった！」

「は、はい！」

翔真は一息つく暇もなく宝玉が入ったバッグをソラに預けると、そのまますぐ瞬が戦っている場所へと必死に走り出す。有香の方はソラがちゃんと隠れるのを見届けた後、橘川氏が未だいるであろう場所へと、走り出した。翔真は以前にも話した通り、体育会系ではない上に体力もない。きつと、体力ももう既に限界が来ているであろう。だが、瞬が今必死に戦っているのに、何もしない訳にはいかない。

彼ら幼馴染二人は、そう思っていたのだ。だからこそ、必死に走る。翔真の視界に、瞬の背中が映った刹那、瞬がギルによって説き伏せられていた。

回し蹴りを食らわされて更に跳ね飛ばされ完全に瞬はノックアウトされる寸前であった。持っていた鉄パイプはとうにどこかへ吹き飛ばされている。唇を切っているらしい瞬は涎に混じって血を吐き出した。それを乱雑に拭い去った瞬は、裂帛の声を上げて再び立ち上がり飛び掛かる。

「らあっ！！」

「人間如きに、何が出来る！！」

「くすくすくす！さつさと死になさい？」
「はははははは！！！！」

瞬を殴り、蹴る、叩き落とす。

そんな卑劣な行為を、瞬と言う人間一人に行う敵幹部四人。その中の三人の、歪な笑いが響く。だがそれに負けることなく、絶対に屈することなく瞬は立ち上がり再び戦い続けているのだ。瞬の……その姿を見た時に、翔真は、ギョツとベルトを握りしめ、氣力を振り絞り走る。そして……瞬は叫んだ。

「絶対に、負けてたまるかあああああつ！！！翔真も、有香も、先生も、……ソラも絶対に傷付けさせない！！！お前等なんかに、俺の大切な人達を傷付けさせるかあああああああつ！！！！うおおおおおおおおおおつ！！！」

命を掛けた、瞬の魂の叫び。

その叫びを聞いた時、翔真の足が更に進み、これでもかと言つぐらいに声を張り上げたのである。

「瞬っ！！！！！」

「っ?! 翔真?!」

「これを……受け取れええええええええええっ！！！お前が使うのは、このベルトだあああああ！！！！らあああああつ！！！！！」

その刹那、翔真の方を向いた瞬の顔色がさつと変わったがもう止まっつてられない。翔真は、白の宝玉をバツクルに収めたベルトを、瞬へと投げていた。まるでブーメランのように回転したベルトを、瞬は上手く受け止めていた。そのベルトを無我夢中で、瞬は腰へと装着していたのである。

すると、まばゆい光を放ったベルトは瞬時に白銀色へと変化し、白

の宝玉は無色透明のクリスタルのようへと変化した。刹那、それは……瞬の腹へと吸収されてしまったのである。だが、痛みは感じなかったのだ。そこにあったのは、「守りたい」と言う思いだけであつた。

「これは……まさか、俺に力をくれるのか……？
俺に、皆を守る力を……っ」

「何、今の？」

「うっそでしょ？こいつ、今ベルト付けちゃったよ……？！」

「……………まさか」

「こいつ……っ……！」

四幹部は、仮面の奥で目を見開いた。そして、瞬は拳に力を入れて握り締めると、顔を上げてギツと四幹部を睨み付けた。そこから醸し出されるのは、
光の波動。

それは、幹部から観ても、翔真から観ても……遠くにいる、有香や橘川氏、そしてソラにもはっきりと見えた。白い光が、渦のように出ている事が。瞬の目に宿っているのは激しい怒りなんかじゃない、皆を守りたいと願う感情そのものだけだつた。

ライダーが好きだから、なりたいたいのではない。
皆を、大切な人を、この世界を、守りたい。

その瞬間、瞬の脳裏に「あの」叫び声が浮かぶ。ポーズが浮かぶ。強い意志が感じられるその瞳を、ようやくと橘川氏を縛り付けていた鎖を解放した有香と、その彼女に連れられてきた橘川氏が見つめる。彼の強い思いが滲む背中を、翔真が、ソラが見つめている……。そして、瞬は「うおおおおおおおっ……！」と雄叫びを上げていた。

「俺は、負けない！皆を、この世界を絶対に守り通して見せる！！お前等の、好きなようには絶対にさせてたまるかあっ！！」

無我夢中だったのかも知れない。刹那、瞬は両腕を開き相手に手の甲を向けて腹の前で構えると、先程吸収されたベルトが眩い光と共に現れた。それは先ほどとは打って変わり、立派なベルトとなっていたのである。一号のベルトにも、クウガのベルトにも類似したそのベルト。

そして瞬は、左手を天高く上げて、それをゆっくりと降ろしてくる。それと同時に進行で右手で握り拳を作ると左手をゆっくり降ろすのと同時に、胸の横……脇腹へと引き戻す。その行為をすると同時に、ベルトのバツクルのクリスタル部分から、石を強く叩いたような音が聞こえてきた。それが長く続いた刹那に、瞬は二度目のその「言葉」を叫んだのである。

「変身っ！！！！」

その言葉と同時に、右手と左手の構え方を変えた。それと同時に、眩い光が瞬を包む。その眩い光は周囲の者達は目を覆いカバーしたのだが、その光は敵幹部四人をその場から押し出す。光は数秒、否、数十秒続いたか、それが止み始めた時にようやっとなら達は目を開けた。

そして………彼らは皆、驚嘆の声を上げたのである。そう、太陽や月の「光」以上に白く光り輝く戦士が、そこにいたのだから。瑠璃色、とも言える青いマフラーに灰色とも言えるような銀色仮面、黒に近い群青色の左足と銀色の鎖が絡みついた水色の右足と言う左右非対称の足のデザインに、黒い手袋。腰のベルトについた鞘からも、眩い光が煌いている。そして仮面の上部から飛び出しているのは、どこかで見た事があるような戦士と類似した、二本の触覚。

その戦士は、ゆっくりとソラの方へと振り向いた。その仮面は……飛蝗から模られていたのだ。水色とも言えるその青い複眼。強い意志を感じさせる、その目。そして眩い光。

その姿を見つめていた橘川氏は、呟いていた。

「まさに、光の戦士……光の仮面ライダーだ……」

「あれが、瞬……なの？」

「間違いない……俺は見た、瞬がああ姿へと変わるのを」

橘川氏、有香、翔真は茫然としながらもそう口々に言っていたが、ソラだけは違った。ソラは彼の姿をまるで食い入るようにじっと見つめていたのである。そして、彼の姿が浩人が変身した姿のフレアによく似ている事に気付く。フレアが炎の戦士であるならば、彼は光の戦士。

特に意識していた訳ではないのだが、脳裏に、その名が響いたのだ。そしてその名を、呟いているソラがいたのである。そう、ソラの脳裏に浮かんだその名は……後々に渡るまでずっと、彼の名前となる。彼は以後、その名を使い続けるのだ。その名は

「仮面ライダー、グレア……」

眩くキラキラと「光る」戦士。だからグレア。仮面ライダーグレア。今ここに、光輝く仮面ライダーが新たに誕生したのであった……。

Chapter 3 - 5 「侵攻編」 光のヘンシン（後書き）

とうとう……

とうとう変身しましたよ皆様っ！！ふう、ようやくと変身出来て私も一安心です！！光の中から輝く戦士がここに降臨、「仮面ライダーグレア」！！

うん。もう、結構長いですこの話。

最初瞬くんをディケイド激情態へと変身させたのは、彼の心構えをきっちりしたかったからです。士が消えたショックは計り知れない物です。だからこそその怒り。その怒りからでは全てを守る事など出来ない。まず、彼にそれを叩き込んでおきたかったのです！（笑）あはっ

さて、そんな波乱含みのChapter 3、いよいよ次回、完結します。もう序盤から色んな事がありすぎた壱の章も遂に終わり、彼らの旅が始まります。

次回投稿、早々と出来るよう、頑張ります。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517w/>

Masked Riders -NEXT Generation-

2012年1月6日23時50分発行